

**令和２年度指定
WWLコンソーシアム構築支援事業**

**事業報告書
第１年次**

令和３年３月

国立大学法人大阪教育大学

大阪教育大学附属高等学校平野校舎

大阪教育大学附属高等学校池田校舎

はじめに

大阪教育大学は、令和2年度【WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業】に採択されました。令和4年度までの3年間、大阪教育大学を管理機関とし、本学附属高等学校平野校舎を拠点校、池田校舎を共同実施校として、事業に取り組んでまいります。

採択結果を受けた令和2年4月時点は、新型コロナウイルス感染拡大（第一波）の真ただ中でした。誰も正解を知らない・わからない未曾有の問題解決を迫られ、世界が試行錯誤を繰り返す中、学校は年度末からの休校が継続していました。当初のWWL構想計画は大幅に遅れ、残念ながら多くの事業について、規模縮小、延期、中止を余儀なくされました。対面実施を前提にしたものは、すべて見直しの対象です。会議や打ち合わせもオンラインです。環境整備が不十分な状態でのオンライン会議は、多様なハプニングも起こります。そうした意味で、令和2年度は「課題発見」の機会になったとも言えるでしょう。

さて、本学が目指す事業のテーマは『Society5.0に向かう生徒と教員のための「学びの共同体」の構築』です。教員養成系の単科大学である本学の特性をいかして、高校生のみならず高等学校教員、加えて未来の教員である学生・大学院生・留学生等が、ともに学びあう「学びの共同体」の構築を目指します。しかし本事業は、管理機関・拠点校・共同実施校の関係者のみで実施できるものではありません。協働大学・協働機関・連携校等の皆様のご理解・ご協力なくしては成立しません。今年度の事業につきましても、皆様との連携・協働に基づいて実現に至ったものと考えております。

本報告書には、令和2年度の事業に関する記録が掲載されています。残念ながら3月中旬以降に実施予定の事業につきましては収録することができませんでした。一部「予定」として示してございますが、ご了承ください。

コロナ禍のさまざまな「制約」の中で、いかに教育のクオリティを落とさずに事業を展開するのか…。1年が経過した現時点におきましても、この問題は継続中です。非対面の限界を感じつつ、オンラインだからこそ実現したこともありました。新たな可能性への挑戦を含め、次年度の事業展開に向けて今年度以上の成果に結びつくよう取り組んでまいり所存です。本事業への忌憚のないご意見・アドバイスをいただけますと幸甚に存じます。

次年度も引き続き、どうぞよろしくお願い申し上げます。

令和3年3月8日

大阪教育大学 附属学校連携担当
学長補佐 鈴木 真由子

目 次

I. 事業概要

事業実施計画書	1
---------	---

II. 事業報告

1 拠点校・共同実施校における取組	
【1】カリキュラムの概要	8
【2】新設教科・科目	12
【3】国内・海外研修等	33
【4】高校生国際ワークショップ	44
【5】大学との連携プログラム	51
【6】その他	57
2 附属学校間ネットワーク	66
3 管理機関における取組	68
4 アセスメントグループの取組	70
5 広報活動	82

III. 会議報告

1 AL（アドバンスト・ラーニング）ネットワーク運営会議	83
2 運営指導委員会	83
3 事業検証委員会	85
4 GIER（グローバル・イノベーション・エデュケーション・リサーチ）委員会	86

資料編

- ・大阪教育大学アドバンスト・ラーニング・ネットワーク運営会議設置要項
- ・大阪教育大学グローバル・イノベーション・エデュケーション・リサーチ委員会設置要項
- ・委員名簿

I. 事業概要

(別紙様式1)

令和2年5月19日

事業実施計画書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1
管理機関名 国立大学法人大阪教育大学
代表者名 学長 栗林 澄夫 印

1 事業の実施期間

契約締結日 ～ 令和3年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 大阪教育大学附属高等学校平野校舎
学校長名 広谷 博史

3 構想名

Society5.0 に向かう生徒と教員のための「学びの共同体」の構築

4 構想の概要

本構想では、Society 5.0 で求められる力を基盤として、データサイエンスに基づいてSDGsの課題を理解し、その解決に向けてイノベーティブに思考し、主体的に実践できるグローバル人材育成システムを開発する。そこで、拠点校と共同実施校では、「データサイエンス基礎」等の科目を新設する一方、カリキュラムの中心となる「グローバル探究」では、SDGsの中で両校が異なる目標を設定し、国内外の協働大学・協働機関とともに開発する新たなプログラムや既存科目との有機的連携により、生徒の資質・能力等の育成を目指す。さらに、これまでの両校の教育研究の実績を活かしたアプローチの違いによる教育効果を、データサイエンスを活用し検証する。連携校の生徒が高校生国際会議を含む各種プログラムに参加するとともに、教員も教員国際会議や指導法や評価に関する研修へ参加することで、生徒と教員のための「学びの共同体」の構築を目指す。

5 令和2年度の構想計画

(1) AL ネットワーク運営関連組織の構築

①AL ネットワーク運営会議(年2回)の開催

AL ネットワークの運営を総括管理する。関連組織における取組の進捗状況及び課題を把握し、研究開発の方針を決定する。運営会議は、関連組織間の情報共有の場であることから、海外や遠隔地からの参加を可能にするため、対面を含むオンライン会議の開催とし、管理機関・拠点校・共同実施校の教職員にも公開する。

②GIER 委員会(月1回程度)の開催による各取組の進捗管理

各プログラムの進捗管理、拠点校や共同実施校での研究開発の支援と協働、連携校・協働

機関等との連絡調整と協働、情報発信を行う。その際、拠点校・共同実施校、国内外の連携校等が常に情報を共有することを可能にするため、英語専用ページも含めインターネット上のグループウェアを整備する。また、具体的な実施部門として委員会内に下部組織（ワーキングチーム）を設置し、担当者を配置することで円滑な進捗管理を目指す。

③附属学校間連携による教育研究の展開

連携校である他大学の附属高等学校と連携して、学術情報ネットワークである SINET を整備し、学校現場における教育活用研究を展開する。学校間の連携を密にするため、ネットワークツールを活用して各プログラムの共有を可能にする。また、探究学習の展開方法や評価、国際共同研究のあり方について、研究会を年 4 回開催する。

（２）カリキュラムの開発・評価

【A 高校生対象】

④新設科目「グローバル探究Ⅰ」のカリキュラム開発と授業実施

大阪教育大学及び国内外の協働大学教員の指導・支援を得ながら、拠点校・共同実施校においてカリキュラムを開発し、授業を実施する。その際、SGH において開発した指導方法及び学習ツール『平野メソッド』を導入する。

⑤新設科目「データサイエンス基礎」のカリキュラム開発と授業実施

大阪大学、大阪教育大学の研究者と、拠点校・共同実施校教員が協働してカリキュラムを開発し、授業を実施する。

⑥新設科目「生命の倫理」のカリキュラム開発と授業実施

大阪教育大学及び協働大学教員の指導・支援を得ながら拠点校において実施する。

⑦学習成果を測定するデータの集積

拠点校・共同実施校の授業担当者と協働して生徒の資質・能力等の測定に向けたデータを集積させる。

⑧教育用コンテンツの提供

インターネット上で探究学習を支援するツール（大阪教育大学と啓林館による共同開発）「Ai 支援探究学習支援サービス（日本語版）」を提供し、探究的な活動で活用する。

⑨カリキュラムに関する助言・支援

事業の全体構成との整合性を図りつつ、年間を通してカリキュラム開発に対する包括的な助言・指導・支援を行う。

⑩留学生共同学習プログラム

大阪教育大学留学生との「Lunch Time Chat」を拠点校・共同実施校で実施する。また、アジア高校生架け橋プロジェクトで受け入れる留学生や大阪教育大学の留学生とディスカッションや共同学習を行う「多文化理解講座」を 11 月、12 月、3 月に実施する。さらに「エンパワメントプログラム」への参加を連携校に呼びかける（3 月）。

⑪高大接続に向けた条件整備

大学教育の先取り履修や、より高度な内容を学びたい高校生に向けた条件整備を進める。ネットワークへの円滑な接続による学習支援を実現させるため、拠点校・共同実施校におけるハード面・ソフト面の環境を整備する。e-ポートフォリオを Class へ転換させることで教育データを収集しやすくする。また、大阪教育大学の先取り履修を拡大実施させるとともに、国内協働大学と連携し、SEEDS プログラムの文系版の開発準備を実施する。

【B 教員対象】

⑫フォーラムの開催

探究活動をテーマとする教員向けのワークショップを開催する。その際、WWL 事業に関するより深い理解を促進することも目指す。

⑬教員研修の実施

新設した学校設定科目「データサイエンス基礎」や「グローバル探究Ⅰ」等と関連づけた

授業実践に資する教員研修を実施する。その際、WWL 事業に関するより深い理解を促進することも目指す。

【C 次世代の教員（学生・大学院生）対象】

⑭学部教育（教員養成）の実施

他の関連事業における情報収集及び探究活動を調査し、その結果を、学部学生対象の授業や連合教職大学院のスクール・リーダーシップコースにおけるグローバルスクールプログラムで活用する。今年度後期には、教育学部において「探究型学習の実践と研究」を新設し、拠点校・共同実施校の教員とも協働して授業を実施する。

【D 評価指標の試作】

⑮イノベティブな人材にかかわる評価指標の試作

グローバル人材指標については、拠点校では PROG テストを活用するとともに、新たな多文化理解指標 GPAT を開発してきた。イノベティブな人材の育成指標については、IR 部門附属学校アセスメントグループが開発プロジェクトを立ち上げて試案を作成する。

（3）海外研修及び高校生ワークショップの実施

⑯拠点校での「カンボジアフィールドワーク」「ニュージーランド研修」の実施

カンボジアフィールドワークを1月に実施し、SDGs に関する探究活動の調査・研究や社会貢献活動を行う。また、ニュージーランド研修を3月に実施し、海外連携校の生徒とSDGs に関する討論と、次年度の国際共同研究の準備を進める。

⑰共同実施校の「カナダ研修」「シンガポール研修」の実施

シンガポール研修を3月に実施し、現地大学でのSTEAM プログラムやSDGs 研修に取り組む。また、カナダ研修を3月に実施し、グローバル探究で設定したSDGs に関わる課題の探究活動を現地高校生とともに行う。

⑱高校生による国際ワークショップの実施

拠点校及び共同実施校の生徒を中心に実行委員会を立ち上げ、連携校の生徒と協働して高校生による国際ワークショップを11月に実施する。海外の生徒とはオンライン上で情報交換し、高校生が主体的に企画・運営を担い、留学生、学部学生・大学院生がサポートする。

⑲海外高校生（留学生）の受け入れ体制の整備

海外の高校生（留学生）に対する学習支援ボランティアを管理機関及び協働大学の留学生等から募り、ボランティアチームを形成する。留学生は、「グローバル探究Ⅰ～Ⅲ」をはじめ、全ての授業を日本人高校生と一緒に受講するため、ボランティアチームのメンバーは、両校の教員と連携して高校における学習活動に留学生が支障無く参加できるようサポートする。今年度は、そのための体制を整備し、授業及び国際ワークショップの支援にあたる。

（4）実施体制の整備

⑳運営指導委員会の開催

事業の運営に関わる指導助言を得るため、10月（中間報告と指導助言）及び3月（年間報告と指導助言）に運営指導委員会を開催する。関連事業に精通している各運営指導委員からの指導助言・評価を受け、事業の充実・改善を図る。運営委員会の開催にあたっては、グループウェアを活用し、事前に資料等の閲覧を可能にするほか、対面による参加が困難な場合にはオンライン会議も同時に実施する。

㉑検証委員会の開催

3月に検証委員会を開催し、今年度の事業による評価を受ける。特に、汎用性を担保するため、「グローバル人材」及び「イノベティブな人材」としての評価指標の妥当性や検証方法について委員から指導助言を受けて精度を高める。

(5) 広報・普及活動

②広報及びALネットワークの拡充

本事業を広報することで国内外の連携校の増加を図り、AL ネットワークの拡充及びプログラムの普及を図る。GIER 委員会の広報ワーキングがホームページを作成する等により、事業に関連する広報活動を展開する。海外連携校の増加については、拠点校・共同実施校の担当者を軸に交渉を進める。

③国内外のトップ大学への進学や海外留学等の促進

国内のトップ大学への進学については、大阪大学及び大阪府立大学と協働して、高大接続に関する連携を図る。海外大学や海外留学等の促進のため、海外進学者や大学関係者からの講話や留学エージェントによる説明会を附属高校間のネットワークを活用して複数回開催する。次年度に実施する進路指導担当の高校教員向けの海外留学・進学研修会の体制を整える。

(6) 財政等支援

④自己負担額の支出計画

今年度は、既に 780 万円程度の学内予算を確保済みであり、今年度の実施状況に合わせて来年度予算の確保（約 1,000 万円）を手続きに従って行う予定である。採択時に評価が高かったこともあり、大学全体の本事業に対する期待も高い。またクラウドファンディングについては、本学で教員養成にかかる案件で開始したところ成立し、さらに附属で行い成立している。このような経験を活かし、今後本学におけるグローバル人材育成目的のクラウドファンディングについても検討を始めている。また、連携機関の特に企業からの寄付についても、採択時の高評価を受けて交渉を開始している。

⑤人的または財政的な支援、研修やセミナー等の実施に向けた計画

既に大学および附属の学内体制の構築を開始し、学内人材の活用体制を進めている。一方、教員向けワークショップ等については、新型コロナウイルス対応で、対面形式での実施が難しいため、ネットを活用したワークショップ等の検討を開始している。実施時期については、現在コンテンツやツールの検討を始め、秋に向けた実施を予定している。また、教職大学院での授業活用については、現在学生向けにオンライン授業を開始しているため、後期にこれらのコンテンツから編集して、教員のネットワークで活用を行う予定である。

⑥支援期間終了後の事業の継続的な実施に向けた計画

特に、教員間のネットワークの形成においては、現在対面形式における集合研修や会議ができない状態であるので、ネット会議を活用して、AL ネットワークや附属学校間の研究会構築を検討している。これらのネットワークの活用は、地理的距離を超えることが出来るため、うまく活用すれば、経費的にもメリットが大きく、支援期間終了後の教員間、生徒間ネットワークの維持にとって、非常に大きな効果をもたらすものと考え、そのことから、ネットの活用については、大学を挙げて推進する計画である。

6 事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
(1) ①AL ネットワーク運営会議の開催 ②GIER 委員会の開催 ③附属学校間連携の教育研究	大阪教育大学 大阪教育大学 大阪教育大学	栗林 澄夫 鈴木真由子 広谷 博史
(2) 【A 高校生対象】④～⑥新設科目 【A 高校生対象】⑦測定データ集積 【A 高校生対象】⑧コンテンツ提供 【A 高校生対象】⑨カリキュラム助言 【A 高校生対象】⑩留学生共同学習 【A 高校生対象】⑪高大接続 【B 教員対象】⑫・⑬教員研修等 【C 次世代教員対象】⑭学部授業 【D 評価指標の試作】⑮評価指標試作	拠点校・共同実施校 大阪教育大学 大阪教育大学・協働機関 大阪教育大学 大阪教育大学 大阪教育大学・協働大学 拠点校・共同実施校 大阪教育大学 大阪教育大学	堀川 理介 仲矢 史雄 堀川 理介 八田 幸恵 箱崎 雄子 片桐 昌直 佐藤 賢司 広谷 博史 仲矢 史雄
(3) ⑯海外フィールドワーク・研修 ⑰海外研修 ⑱高校生国際ワークショップ ⑲海外高校生の受け入れ体制整備	拠点校・海外連携校 共同実施校・海外連携校 大阪教育大学 大阪教育大学	堀川 理介 筒井 和幸 仲矢 史雄 赤木 澄代
(4) ⑳運営指導委員会の開催 ㉑事業検証委員会の開催	大阪教育大学 大阪教育大学	鈴木真由子 鈴木真由子
(5) ㉒広報及びAL ネットワークの拡充 ㉓進学・留学の促進	大阪教育大学 拠点校・共同実施校	佐藤 賢司 片桐 昌直
(6) 財政等支援 ㉔～㉖	大阪教育大学	片桐 昌直

7 課題項目別実施期間

業務項目	実施期間（ 契約締結日 ～ 令和3年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①AL ネットワーク 運営会議の開催						●						●
②GIER 委員会の開催	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
③附属学校間連携の 教育研究						●		●		●		●
④～⑥新設科目	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
⑦測定データ集積	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
⑧コンテンツ提供			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
⑨カリキュラム助言				●					●			●
⑩留学生共同学習			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
⑪高大連携							●			●		
⑫⑬教員研修等					●			●				●
⑭学部授業							■	■	■	■	■	■
⑮評価指標試作	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

⑩拠点校：海外フィールドワーク・研修										●		●
⑪共同実施校：海外研修												●
⑬高校生国際ワークショップ								●				
⑭海外高校生の受入体制準備												→
⑯運営指導委員会の開催							●					●
⑰事業検証委員会の開催												●
⑱広報及びALネットワークの拡充												→
⑲進学・留学の促進						●			●		●	
⑳～㉔財政等支援												→

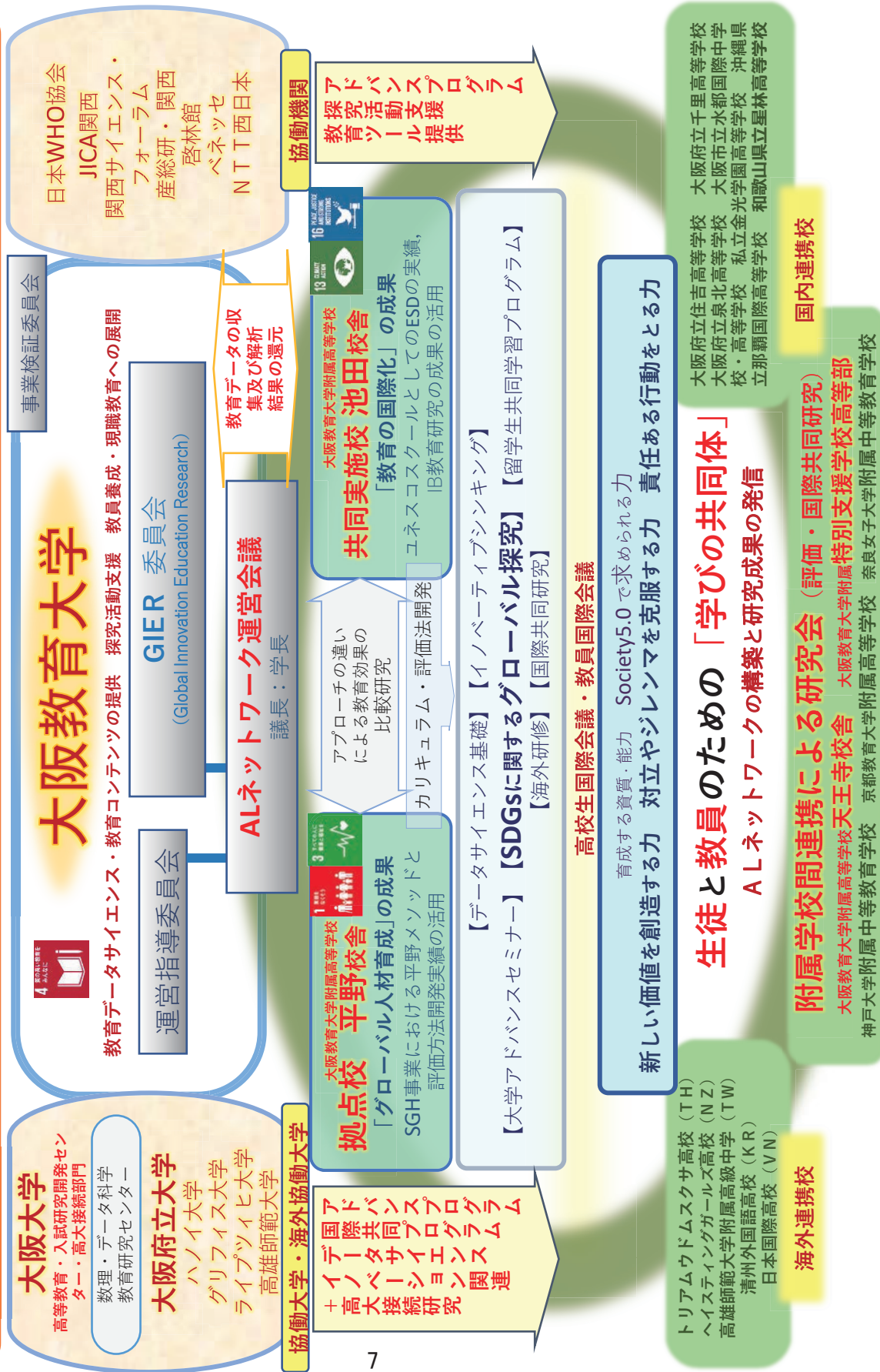
【担当者】

担当課	附属学校課	T E L	072-978-4016
氏 名	上田 瑞美	F A X	072-978-3262
職 名	係長	E-mail	fuzoku@cc.osaka-kyoiku.ac.jp



Society 5.0 に向かう生徒と教員のための「学びの共同体」の構築

データサイエンスに基づくイノベティブなグローバル人材育成システムの開発



Ⅱ. 事業報告

1 拠点校・共同実施校における取組

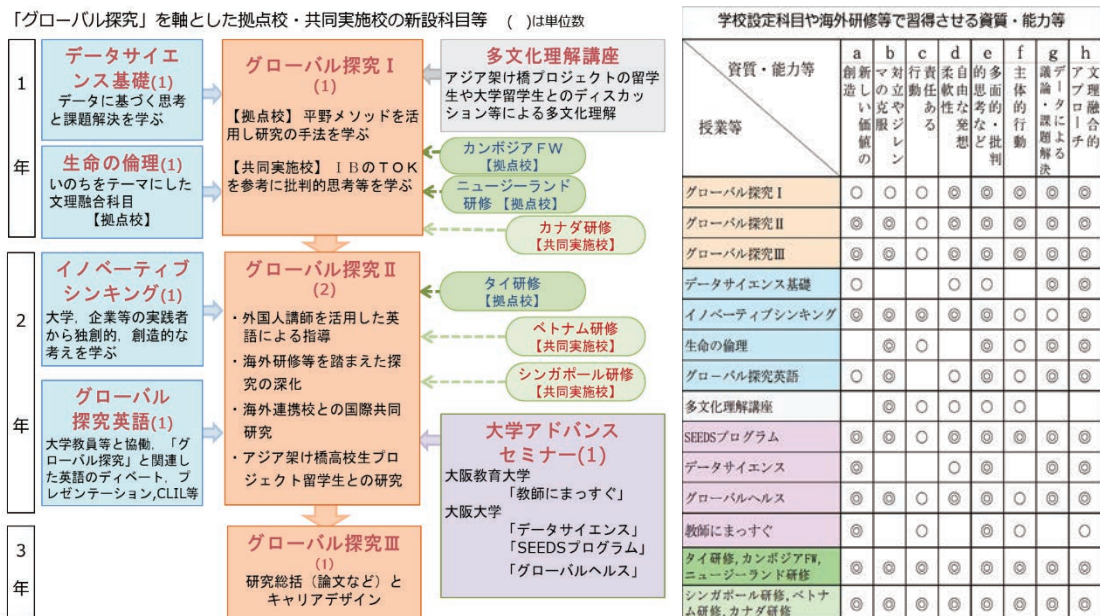
【1】カリキュラムの概要

(a) イノベティブなグローバル人材像と資質能力・マインドセット

本事業では、イノベティブなグローバル人材像を「Society 5.0において共通して求められる力、すなわち文章や情報を正確に読み解き対話する力、科学的に思考・吟味し活用する力、価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探究力等を基盤として、SDGsの課題の理解に必要なグローバル的思考さらには、その課題解決に向けてイノベティブに思考し、主体的に実践できる人材」とし、必要な資質能力等を下右表a～hとした。平野校舎、池田校舎において、これらの習得・伸張に資するカリキュラム開発を行う。

(b) 人材育成に資するカリキュラムの概要と習得を目指す資質能力

研究開発するカリキュラムの概要と各々で目指す資質能力の関係は下図の通りである。



①新たな教科・科目の設定

○グローバルな社会課題に関する探究活動（グローバル探究Ⅰ～Ⅲ）

グローバル探究Ⅰ	1年 全員 1単位	【共通】研究の様々な手法やデータに基づく論理的な考えを踏まえて、研究活動に取り組む。
		【平野校舎】拠点校が開発した探究活動の指導方法・評価方法である「平野メソッド」を活用しながら、チームづくりや課題発見、データに基づく論理的思考、調査手法等の一連の研究手法を学び、SDGsをテーマとする研究活動に取り組む
グローバル探究Ⅱ	2年 全員 2単位	【共通】グローバルな社会課題について、SDGsの達成に向けた研究を行う。その際、文理両方の内容を総合して探究し、イノベティブな発想で解決する必要があることから、複数教科の高校教員や、大学・企業等の専門家の指導、並びに、外国人講師を活用した英語による探究活動を行う。海外連携校との国際共同研究や、国内連携校との共同研究、大阪大学ユネスコ・チャータからの指導による研究にも取り組む
		【池田校舎】国内フィールドワークや海外研修、専門家との対話を重視した学習を通して、キー・コンピテンシーを育む学習プログラムに取り組む。探究の成果を各自が英語で報告書にまとめる
グローバル探究Ⅲ	3年 1単位	【共通】1,2年での研究を個人論文にまとめるとともに、3年間の取組を振り返りながらポートフォリオを作成する。またこれまでの学びを踏まえながら自らのキャリアを設計し、それぞれに応じてさらに発展的な学びに取り組む

○「グローバル探究Ⅰ～Ⅲ」のベースとなる新設教科・科目

データサイエンス基礎	1年 全員 1単位	データの見方・考え方を学ぶ。物事を定量的に捉えることで、統計的なものの見方や考え方、量的関係をもとに推論する力などの資質・能力を養い、全ての科目を探究的に学ぶ上での考え方の基礎を習得する。大阪大学、大阪教育大学の研究者と両校教員が協働し、教科や「グローバル探究」「データサイエンス」等との関連を図りながら、カリキュラムの研究開発を行う。
イノベティブシンキング	2年 1単位	大学や研究機関で研究・開発に取り組む研究者や、企業で新たな価値やサービスを創造・提供する経営者・実務家を招聘し、具体的な事例を講義やワークショップを通して学びイノベティブなものの見方や考え方を習得する 【平野校舎】全員 【池田校舎】希望者
生命の倫理	1年 全員 1単位	【平野校舎】生命や人体、医療保健制度や法律と倫理などを融合し、臓器移植や遺伝子操作などのテーマについて調査や議論（ディベート）を通して理解を深める

○高度な学び、大学教育先取り履修に向けた新設教科・科目

管理機関、協働大学と協働した学校設定教科「**大学アドバンスセミナー**」（2年1単位希望者）を実施する。以下の大学と連携した下記の講座から選択する。

大阪教育大学：「**教師にまっすぐ**」

大阪大学：「**データサイエンス**」「**SEEDS プログラム**」「**グローバルヘルス**」

②カリキュラムに位置づけられた短期・長期留学や海外研修

平野校舎

タイ研修	2年全員（120名）が参加。・タイの都市部、地方の医療、教育、格差等の現状を視察し、社会課題の発見と解決への意識を高める。連携校（トリナムウドムスクサ高校）と共同研究を進める生徒は、滞在中あるいはオンラインでの研究活動を行う。
カンボジアフィールドワーク	1,2年希望者約30人が参加。3箇所のNPO、NGO等（医療支援、女性や児童労働問題支援を行う団体）に分かれて協働し、社会課題の発見と解決・支援への意識を高めると共に「グローバル探究」の調査・研究を行う。
ニュージーランド研修	1年希望者約20名が参加。連携校（ヘイスティングガールズ高校）と共同研究を進める生徒は、滞在中あるいはオンラインで研究活動を行う。
高雄師範大学附属高級中学	オンラインで共同研究を行う。

池田校舎

カナダ研修	1,2年希望者約20名が参加。語学研修とともに、St.Michaels University Schoolの生徒と共同して、自ら設定した課題について探究活動を行う。
シンガポール研修	1,2年希望者約10名が参加。「グローバルリーダーシッププログラム（隼ISA）」に参加し、現地の大学で、英語でのSTEAMプログラム、SDGsの講義と議論、リーダーシップ研修に取り組む。
ベトナム研修	2年希望者約20人が参加。大阪教育大学とハノイ大学が協働してSDGsに関する研修プログラムを企画する。「グローバル探究」の課題に対して現地研究者から指導・助言を受けるとともに、フィールドワークを行い、探究への意欲を高める。

③「留学生共同学習プログラム」

- ・「**アジア高校生架け橋プロジェクト**」：アジアの高校生を受け入れ、共同学習を行う。
- ・「**多文化理解講座**」：大阪教育大学等の留学生とディスカッション・共同学習を行う。
- ・「**Lunch Time Chat**」：大阪教育大学グローバルセンターと連携し、留学生やネイティブ教員が両校舎の生徒とオンラインで意見交換を行う。

④高校生国際会議に向けた取組

令和2年度は各校舎で「国際ワークショップ」を開催する。また、令和3年度以降は国内・海外連携校並びに協働大学、協働機関と連携し、「高校生国際会議」を開催する。

教育課程表

大阪教育大学附属高等学校平野校舎

49 期（2020 年度入学）

教 科	科 目（標準単位数）	1 年	2 年		3 年		
			共通	選択	共 通	文 系	理 系
国 語	国 語 総 合	4					
	現 代 文 A						
	現 代 文 B		2		2		
	古 典 A					2	
	古 典 B		2	△1	2		
地 理 歴 史	世 界 史 A		2				
	世 界 史 B				○4 ●4	○から	○4
	日 本 史 A		2			○から	○から
	日 本 史 B				○4 ●4	●から	○4
	地 理 B				○4 ●4	●から	○4
公 民	現 代 社 会	3				1 科目選択	1 科目選択
	倫 理				○4 ●4	計 8 単位	○4
数 学	数 学 I	3					
	数 学 II		3				
	数 学 III				4		
	数 学 A	2					
	数 学 B		2				2
理 科	物 理 基 礎	2			☆2		
	物 理			△2			□4
	化 学 基 礎		3		☆2	☆から	□から
	化 学					2 科目選択	5 1 科目選択
	生 物 基 礎	2			☆2	計 4 単位	□4
保 体 健 育	生 物			△2			
	体 育	3	2		3		
	保 健		1*①				
芸 術	生 命 の 倫 理	1*③					
	芸 術 I	2					
英 語	コミュニケーション英語Ⅰ	3					
	コミュニケーション英語Ⅱ		4				
	コミュニケーション英語Ⅲ				3		
	英 語 表 現 I	3					
	英 語 表 現 II		2		2		
	グローバル探究英語			△1*④			
家 庭	家 庭 基 礎		2				
情 報	社 会 と 情 報	1*②					
	データサイエンス基礎	1*⑤					
(学) グロ ーバル 探 究	グローバル探究Ⅰ	1*⑥					
	グローバル探究Ⅱ		2*⑦				
	グローバル探究Ⅲ				1*⑧		
	イノベーションシンキング		1*⑨				
(学) 大学ア ドバンスセ ミナー	データサイエンス		(1*⑩)				
	グローバルヘルス		(1*⑪)				
	教師にまっすぐ		(1*⑫)				
L H R		1	1		1		
総 計		32	33(34～36)		18	14 計 32	15 計 33

(学)は学校設定教科。*①②：必履修科目が標準単位数を下回る教育課程の特例。*③～⑫は学校設定科目。（ ）は選択者。2年選択では△から2単位を選択する。

教育課程表

65期（2020年度入学）

大阪教育大学附属高等学校池田校舎

	科目	標準 単位	1 年	2 年		3 年		備考
				必修	選択	必修	選択	
国語	国 語 総 合	4	4					
	国 語 表 現	3					2	
	現 代 文 B	4		2		2		
	古 典 B	4		2		2		
	精 読 古 典						2	
地歴	世 界 史 A	2	2					
	世 界 史 B	4					#3	
	日 本 史 A	2		*2				
	日 本 史 B	4					#3	
	地 理 A	2		*2				
	地 理 B	4					#3	
	世 界 史 特 講						&1	
	日 本 史 特 講						&1	
公民	地 理 特 講						&1	
	現 代 社 会	2	2					
	倫 理	2		*2			#2	
	政 治 ・ 経 済	2					#2	
数学	公 民 科 特 講						&1	
	数 学 I	3	3					
	数 学 II	4		3		1		
	数 学 III	5					6	
	数 学 A	2	2					
	数 学 B	2		2				
	数 学 総 合						2	
理科	物 理 基 礎	2	2					
	物 理	4		*2			4	
	化 学 基 礎	2	2					
	化 学	4		*2			4	
	生 物 基 礎	2		2				
	生 物	4		*2			4	
	精 選 物 理						2	
	精 選 化 学						2	
保健 体育	精 選 生 物						2	
	体 育	7～8	3	2		3		
	保 健	2	1	1				
芸術	ス ポ ー ツ 総 合 演 習						1	
	音 楽 I	2	*2					
	美 術 I	2	*2					
	書 道 I	2	*2					
	音 楽 II	2					%1	
	美 術 II	2					%1	
英語	書 道 II	2					%1	
	コミュニケーション英語 I	3	3					
	コミュニケーション英語 II	4		3				
	コミュニケーション英語 III	4				2		
	英 語 表 現 I	2	2					
	英 語 表 現 II	4		2		2		
	英 語 演 習						2	
家庭	時 事 英 語						1	
	家 庭 基 礎	2		2				
情報	情 報 の 科 学	2		1				
	デ ー タ サ イ エ ン ス 基 礎		1					
グ ロー バル 探究	グ ロー バ ル 探 究 I		1					
	グ ロー バ ル 探 究 II			2				
	グ ロー バ ル 探 究 III						1	
	イノベーション				1			
大学アド バンスセミナー	デ ー タ サ イ エ ン ス			1				
	教 師 に ま つ ず ぐ			1				
	小 計		30	30	0～3	12	12～18	
特活	L. H. R.	3	1	1		1		
	合 計		31	31～34		25～31		

☆ 1年生では、芸術の*より1科目2単位を選択する。

☆ 2年生では、地歴・公民・理科の*より地歴科目を少なくとも1科目含む3科目6単位を選択する。

☆ 標準単位欄が空欄の科目は、学校設定科目である。

☆ 選択科目の履修の条件や開講の有無には、詳しい規定が別にあります。このため、上記の表にある科目を履修できない場合があります。

【2】新設教科・科目

①「グローバル探究Ⅰ」

A：平野校舎

1) 授業の目標

探究活動の指導法「平野メソッド」を活用しながら一連の研究手法を学び、SDGs をテーマとする研究活動に取り組む。以下の知識技能の獲得と資質能力の育成を目指す。

- ・課題研究の手法の習得（課題と仮説設定，情報収集・整理，ポスター作成，プレゼンテーション等）
- ・論理的思考力，批判的思考力，多面的思考力の育成（新設科目「データサイエンス基礎」との関連を重視），多様性の理解，新たな価値の創造

2) 年間授業計画及び指導体制，実施形態

対象 1年生全員（3クラス 120名）

[1学期] 探究活動への導入，合意形成，多様性理解

[2学期] 研究全体の構成と課題の発見，QFT，班づくり，情報の収集・整理法，調査手法，データにもとづく論理的思考，三角ロジック，ミニマムリスト，フィールドワーク，ポスター作成法

[3学期] プレゼンテーションの手法，発表，振り返り，2年への計画

月日	内 容	主担当
6/18	探究活動概要（目標・必要な技術・計画）・課題への導入	山崎
6/25	PROG-H テスト	担任
7/2	Dixit（ダイバーシティ）	福好
7/22	NASA ゲーム（コンセンサス）	村上
7/30	リテラシー	瀧下
8/28	グローバル探究の1年間の流れ（学習内容）と課題の確認	山崎
9/3	（大阪・国内関連）課題発見ブレインストーミング（QFT）フィールドワーク（大阪・国内関連）→QFT+調べ学習	福好
9/10	テンダラート作成：興味のある分野の絞り込み	村上
9/17	研究班づくり（自身の興味関心分野をプレゼンし，志向の近い者で研究班を編成）	瀧下
9/24	仮説設定：4QS	山崎
10/1	研究構想発表会への準備・4QSの継続と情報カードの説明	福好
10/8	情報収集の方法と取り扱いについて 国内FWの説明→企画書作成（Zoom等で実施可）	村上
10/15	発表準備	瀧下
10/28	研究構想発表会	福好
11/5	ミニマムシート導入（仮説・検証方法・アクションプラン）	山崎
11/12	ミニマムシートへの取組と調べ学習（継続）	山崎
11/19	ミニマムシートへの取組と調べ学習（継続）	山崎
11/21	2年発表会見学	福好

11/26	今後の予定とミニマムシート完成・調べ学習	福好
12/3	ポスターコード導入・ポスター完成期限設定	福好
1/14	3 学期の流れと発表準備	福好
1/21	中間発表会（班をシャッフルし、4 会場で発表）	福好
1/28	プレゼンテーションの手法	村上
2/18	研究発表会（1 会場で 10 分×32 班＝5 班×8）	福好
2/25	発表振り返り	福好

- ・指導体制 授業は学年団 4 名が担当した。各授業の指導は上表のように主担当者を決めて案を作成、毎週の会議で授業方法(指導案)を打合せし、4 名で授業を行った。
- ・実施形態 2 学期当初まで、学年 120 名を 4 分割し 4 名の教員が授業を進めた。9/17 以降は、約 4 人 1 組のチーム(全体で 32 チーム)に分かれた活動が中心となった。

3) 各授業の概要

[探究活動概要（目標・必要な技術・計画）・課題への導入]

目的：「グローバル」とは何か、「探究」とはどのような学習活動であるか、達成目標としての SDGs や未来予測としての Society5.0 の背景を知り、本校 WWL プログラムの特色である「データサイエンス」、「イノベーション」、「チームづくり」が果たす役割を考える。

内容：「あぶない勝手口」の解決策を考える導入ワークを実施。生徒は、無批判でアイデアの数を重視するブレインストーミングの第一段階を体験し、解決策を評価するための「啓発、対症療法、禁止制限、コスト依存、盲目的、改造、責任追及、本質的発見」などの型を学んだ。独自性・新奇性が重視される研究に対してプロセスが重視される探究学習、身近な学部を専門分化の例として Society3.0 から 5.0 へと個別データ化と協働創発への時代背景を概観した。また、MDGs から SDGs へ引き継がれた課題を知り、17 のゴールが互いに関連し、「小さな地球の大きな世界」というグローバル課題の基本的視座において、救う側／救われる側という二項対立を脱した「地球を救う最後の世代」として当事者意識を持つ地球市民を規定した。

形態：本来のグループワークは、感染防止策強化のため、個人ワーク主体で実施した。

[Dixit（ダイバーシティ）]

Dixit というカードゲームを活用し、他者の物事の見方・考え方の違い(多様性)を体験することを目的に活動ベースで授業を実施した。「グローバル探究」において、根本となる考え方である「多様性」を導き出すためにテーマは何なのかを考えさせながら活動させた。Dixit の中では、1 つの絵に対し、独自の語(説明)をつけチーム内で発表する。複数提示される絵からその語と合致していると思う絵柄を他のメンバーは探し、



投票する。この活動の中で、1つの事柄に対して、見る人によっては全く違った捉え方ができる、様々な考え方や観点があることを体験しながら気付くことができた。

【NASA ゲーム（コンセンサス）】

目的：グループでの探究活動に欠かせない「合意形成(コンセンサスを得る)」を本活動により体験し、難しさやプロセスを知る。

内容：NASA ゲームとは、壊れた宇宙船から 300 km離れた母船にたどり着くために 15 個のアイテムをどう活用すべきか、その優先順位をグループ内で話し合っ決めて決めるゲームである。NASA が公式な解答を提示している、つまり答えが存在するという点が面白く、グループで競いあいつつ、その過程で自然と合意形成を体験することができる。

成果：生徒は、ゲームを通じて、合意形成の難しさはもとより、自分の意見を根拠・論拠を意識して伝え、他者と議論することの難しさを実感した。

【リテラシー】

目的：インターネットを正しく使用するための知識や能力について考えるとともに、個人の情報を含む各種情報の取り扱いに関する正しい知識を身につける。

内容：個人の写真を無断で SNS 上に掲載することにより起こる様々な事態や影響について、実社会で起こっている事象も提示しながら考える。個人情報を含む各種情報の取り扱い、インターネット上でデータの見方・扱い方について考え直す機会になった。

【グローバル探究の1年間の流れ（学習内容）と課題の確認】

目的：グローバル探究のテーマを確認し、高校生が探究学習する意義を考え、本校が規定する「グローバルな基礎用語」（コンセンサス）を、事前調査結果の報告を踏まえて個人的な関心(多様性)と関連づける。

内容：大阪を中心とした国内のグローバル課題、アジアを中心とした世界のグローバル課題という2年間の「グローバル探究」のテーマを確認し、社会のグローバル化によって、ある地域の課題が他地域にも影響が及ぶ現状を認識した。また、高校生にとっての探究学習の意義を考え、困難の解決と「新しい価値の創造」という視点を確認した。さらに本校が規定する「グローバルな基礎用語」として「格差・貧困」「健康・福祉」「安全な水と衛生」「新しい生活様式」「ビッグデータ・AI」など5つのカテゴリーから15の用語を選び、文献調査による独自の用語定義、情報源の評価のレポートとして夏季休暇中に事前調査した報告書の共有発表を通して、個人的な関心事から探究テーマへと深化させる準備を行った。

【（大阪・国内関連）課題発見ブレインストーミング（QFT）】

大阪や国内の課題について考えるために、QFT(Question Formulation Technique)による問いつくりの手法を学んだ。本活動では、仮説を設定する前段階で、身近なことから研究する焦点を探し出す方法を体験的に学習した。身近な困り事やニュース・新聞などで取り上げられる事象などを小さな問いに分けていくことで、問いを明確にしていく手法を学んだ。作成した問いを、事実として調べればわかるものや答の出ない研究が必要なもので分類し、より高度な問いとは何かを学んだ。



【テンダラート作成：興味のある分野の絞り込み】

目的：研究班の編成にあたり，興味あることをもとに問いをつくり，SDGs との関連を考える。
 ツール：マンダラートを簡略化した「テンダラート」
 流れ：右表参照（50 分）
 成果：生徒は，テンダラートを作

時間	内 容
5 分	イントロダクション：本日の段取りと目標
10 分	個人ワーク①：テンダラートの記入
10 分	SDGs の紹介 ・動画で SDGs について説明 動画 URL：https://youtu.be/virfmRwgIps
5 分	個人ワーク②：テンダラートに SDGs の項目を付記
15 分	個人発表：テンダラートからいくつか選び，問いと SDGs 項目を紹介する

成することで，興味関心から研究に向けての問いを見つけることができた。

【研究班づくり】

目的：興味関心が共通している生徒同士で研究班を編成する。
 ツール：「テンダラート」とその問いをもとにした SDGs の項目（生徒が前回の授業内で準備済み）研究班エントリーシート
 流れ：①一人一人が設定したテーマについて，関係の深い SDGs の目標ごとに集まり，各自のテーマについて最低 5 人と相互にプレゼンテーションを行う。②その中で興味関心の近い者同士（3～5 人）の研究班を編成する。③研究班ごとにテーマで決め，教員にプレゼンテーションを行う。これによりテーマの内容をより明確化する。
 ルール：興味関心が合う者と出会わない場合は，別の目標の場所へ移動する。
 成果：プレゼンテーションの人数を決め，署名を必要とすることで，より近い興味関心をもつ者同士による研究班を編成することができた。

【仮説設定：4QS】

目的：QFT によって素朴な疑問をつくる段階から，操作（コントロール）と測定（データフィクション）によって検証可能な仮説を設定する技法を学ぶ。
 内容：Four Question Strategy (4QS) を構造化したワークシートを用い，課題設定を検証可能なものへ置き換える。具体的には，設定したテーマに影響を与える要因（条件），この要因を操作（コントロール）することで従属して変化する結果，さらにテーマのうち，「成長」「改善」などのマジックワードを測定可能なデータとしてとらえる視点を身に付けることで，検証可能な仮説を設定する効果的な技法を学んだ。興味ある分野によって拡散させたテーマを，調査可能性という評価軸によっていったん収束させる段階である。しかし，これが最終的な研究テーマ設定ではなく，4QS によって得られる仮説を複数検討することで，研究の軌道修正が可能である点を合わせて理解した。学習形態は研究班によるグループワークを主体としてブレインストーミングを行った。

【情報収集の方法と取り扱いについて】

目的：課題探究における調査の方法を学ぶ。特にアンケート調査，インタビュー調査について留意すべきことを知る。
 流れ：最初，各種調査方法と各調査での注意事項を説明し（15 分），班ごとの探究活動（4QS による研究テーマの見直し，仮説の設定，情報収集など）を行った（35 分）。
 成果：生徒は，アンケート調査の危うさや難しさを理解し，実施の際の心構えを得た。

【研究構想発表会】

これまでに学んだ手法を活用し、研究したい課題を明らかにし、研究計画を作成した。その計画をもとに、先行研究から研究を行う意義の

	項目	チェック項目
1	タイトル	どういう問題に取り組むのが伝わるタイトルになっている
2	目的	現状分析に客観的な根拠がある
3		取り組んでいる問題を解決する必要性が伝わってくる
4		取り組んでいる問題に対する解答（仮説）がある
5	提案	アクションプラン（提案）が具体的である
6		実現の可能性がある
7	独創性	研究に独創性がある

説明や自分たちの仮説が論理的になっているかを全体で確認した。各研究班は、自身の研究テーマ・意義・仮説を説明するためにパワーポイントやポスターを作り発表した。発表時間は、各班 4 分で、その後 3 分間を質疑応答の時間とした。発表を聞いた生徒たちは、チェック項目を確認し、コメントシートによかった点・改善点などのコメントを書いて班員に渡した。そのコメントをもとに、研究を内容や手法を調整した。

【ミニマムリスト導入】

目的：研究骨子の要素を過不足なく把握し、各要素間の論理構造をワークシートによって可視化することで、探究学習の進捗状況を知り、今後グループで取り組むべき調査の方針を主体的に決定して自律的な探究学習ができるようになる。

内容：研究骨子の要素を 1 枚のワークシートに整理した本校オリジナル教材「ミニマムリスト」として「ブロック BASIC」を作成した。その際、問題設定のフェーズに必要な《事実》《疑問》《規準》の各要素の間で根拠・論拠・主張からなる、いわゆる三角ロジックになぞらえた論理構造に注目することで、自身の主張を支持する客観的事実や主観的価値判断を相対化し、具体的に省察できるようになった。検証のフェーズでは、《データ》《仮説》《考察》の各要素間にも論理的な展開が必要であることを知り、今後の探究学習の方向性を各班が主体的に方針決定し、調査結果を批判的に検討することが大切であることが分かった。その後 3 週に渡り調査と検討を重ね、「ブロック BASIC」の完成を目標として、自律的に探究学習を進展することができるようになった。

【2 年生 SGH 課題研究発表会の見学】

以下の 2 点を目的として、2 年生の SGH 課題研究発表会を見学した。

- ・自分にはない研究手法やアプローチ、アクションプランを発見し、研究にいかす。
- ・発表会の運営方法を学ぶ（課題研究発表会の運営は生徒が主体的に行っている）。

研究内容を見学する際は以下の 5 点を確認させることとし、積極的な見学を促した。

- ①タイトルから研究内容がわかるか。
- ②主張・論拠・根拠（客観的データ）が揃っているか。
- ③取り組んでいる課題を解決する重要性が伝わってくるか。
- ④仮説があるか。
- ⑤具体的なアクションプランがあるか。

【ポスターコード導入】

発表用ポスター作成時の注意点を説明した。特に、ポスターの役割とレイアウトの説明を行い、発表者と聴衆のコミュニケーションツールとして相手を惹きつけるものとする。ポスター上の情報の論理的な流れや相手

- 「魅力的なポスターの作成」
 - ・ポスターの役割・レイアウトの説明
 - ・ポスターの 3・1・3 の説明
 - ・タイトルで必要な要素の説明（主題：研究課題、副題：アプローチ・答・結論）
- ポスターコード（改）を配布
 - ・ポスターと照合しコードにチェックする
- ポスター作りのテキストの説明
 - ・ポスター作成時の工夫（抜粋）の説明
 - ・ポスターテキストの配布

を惹きつけるタイトルとすることを学習した。最後に、チェック式のポスターコードを活用し、自分たちのポスターをもとし、各チェック項目の確認を行った。

【中間発表会】

課題研究発表会に向け、ポスターを用いて研究内容を発表した。発表方法は、発表4分、質疑応答3分、コメントシート記入等3分の計10分で実施した。すべてのポスターをプロジェクターに投影し、各班が研究内容を発表した。発表内容に対し、生徒間でコメントや質問、データの出典などを確認した。また、担当教員からのコメントや研究方向の修正等、最終発表に向け調整を行った。多くの班では、今後、独自の研究を進めるため詳細な調査や実験が必要であった。

2021/1/21

中間発表会コメントシート（ポスター発表）

発表タイトル：[]

チェック項目	チェック✓
①タイトルから研究内容がわかるかチェック！	
②主張・論拠・根拠（客観的データ）が揃っているかチェック！	
③取り組んでいる問題を解決する必要性が伝わってくるかチェック！	
④仮説があるかチェック！	
⑤具体的なアクションプランがあるかチェック！	

発表チームへのコメント（良かったこと・改善点・質問等）

【プレゼンテーションの手法】

目的：最終発表会に向け、プレゼンテーションの方法を知り、技術の向上を図る。

内容：何を伝えたいかを意識しながら、日本の昔話を聴衆にプレゼンする。教員はプレゼンを撮影し、生徒は自らのプレゼンを視聴し改善に役立てる。

成果：生徒はプレゼンテーションの難しさや面白さ、聴衆を惹きつける方法等を知り、最終発表会へ意識を向けるようになった。

【課題研究発表会】

1年生の課題研究の集大成として、課題研究発表会を実施した。全32班が本校アリーナでポスター発表を行った。すべての班を3グループ（A・B・C）に分け、各グループが合計10分の発表を3回行った。また、第2学年の生徒が発表会に参加し、それぞれに対してコメントをした。事前準備から本番までWWL委員7名が積極的に運営し、スムーズに実施することができた。



5) まとめ

6月から年度末まで「グローバル探究Ⅰ」の授業を実施してきた。休校措置があり例年より期間が短くなったが、グローバルな視点を持ち、今までになかった価値の創造に向けて研究に取り組んできた。当初は、大阪や日本国内の課題を探し、解決したい問い（テーマ）を見つけることに苦労していたが、抽象的な課題から少しずつ自身に関する身近な課題に掘り下げていく過程を重ねることで、取り組もうとする課題の複雑性や関連する様々な事柄について多岐に渡り学ぶことができた。本年度は、学校外で調査することや他者との接触等について制限があり、現場でのインタビューや調査が難しく、オンラインでのインタビューやアンケート調査、簡単な実験等に留まった例が見られた。来年度は、この課題も踏まえて、カリキュラムと指導法の改善を進めていく。

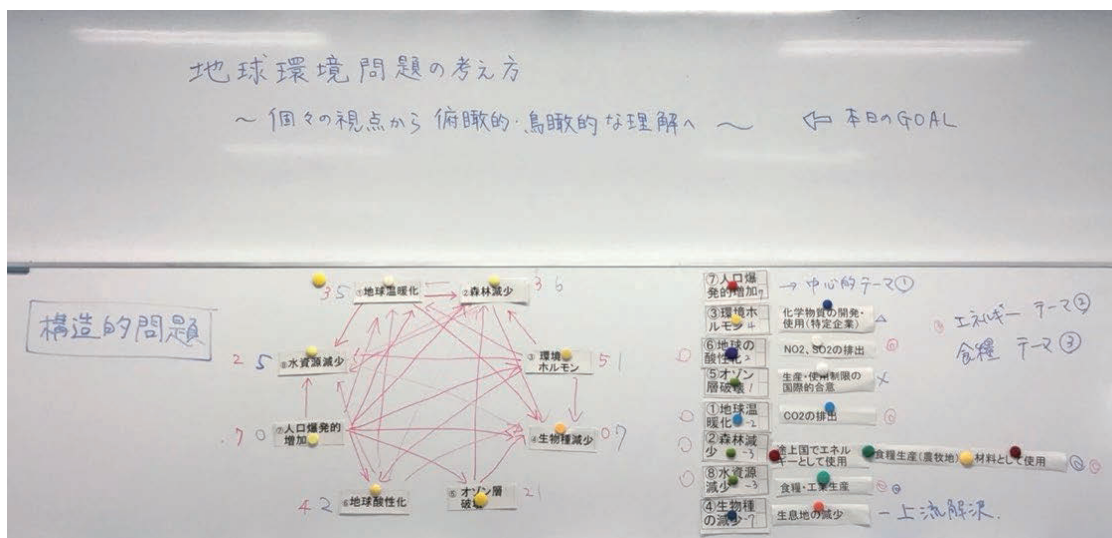
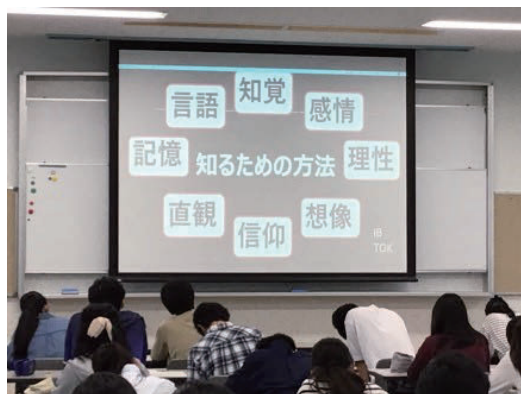
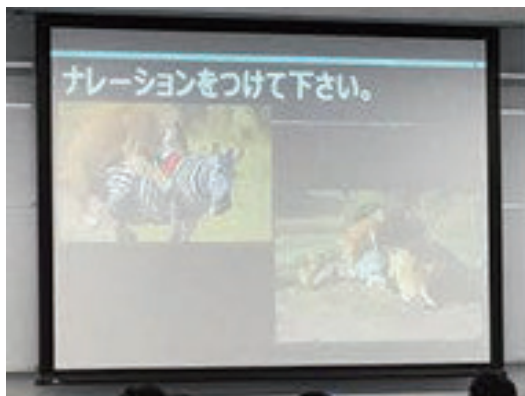
B：池田校舎

1) 授業の目標

- ・多教科連携の横断的な学習により，高校生として深い総合的な「学び」を目指す。
- ・ユネスコ国際教育の理念を意識し，人間の尊厳・平等・相互の尊重をベースにESDおよびSDGsを中心テーマとした学習を行う。
- ・クリティカルな思考を通して身近なところから世界で起きている様々な諸課題に向かい，地域や世界の文化の違いや人としての普遍の精神を理解することによって平和の文化を築いていく資質を養う。

上記の指導目標のもと，1年次ではSDGsのテーマに世界で起きている様々な諸課題を自分ごととして捉え考えさせることを重視した指導を行う。

2年次では外部との繋がりや世界の諸問題を取り扱うことを想定しており，その前段階として1年次には自分と課題との関わりを重視し探究活動を進めさせる。グループで課題に取り組ませる中で，自他を大切にする力など課題に取り組む上で必要な姿勢や基礎能力，および協働する力・批判的な力など課題に向かう能力の育成を図る。



2) 年間実施計画

回	月	日	曜日	1・2組（金3限）		3・4組（金4限）	
1	5	28	木	オリエンテーション、年間計画、「ESD」「SDGS」とは何か			
2	6	5/12	金	「生きることを考える」			
3	6	19	金	「知ることを探究する」			
4	6	26	金	ブックレポート報告会①			
5	7	3	金	ブックレポート報告会②			
6	7	10	金	A 環境	B 貧困	A 環境	B 貧困
7	7	31	金	B 貧困	A 環境	B 貧困	A 環境
8	8	7	金	C 労働	D 科学	C 労働	D 科学
9	8	28	金	D 科学	C 労働	D 科学	C 労働
10	9	4	金	E 人類史	F文献収集	E 人類史	F文献収集
11	9	18	金	F文献収集	E 人類史	F文献収集	E 人類史
12	10	2	金	Gジェンダー	H メディアリテラシー	G ジェンダー	H メディアリテラシー
13	10	8・9	木	H メディアリテラシー	G ジェンダー	グループでの問い作り・探究活動①	
14	10	16	金	グループでの問い作り・探究活動①		H メディアリテラシー	G ジェンダー
15	10	23	金	グループによる探究活動②			
16	10	30	金	グループによる探究活動③			
17	11	13	金	グループによる探究活動④			
18	11	20	金	グループによる探究活動⑤			
19	11	27	金	グループによる探究活動⑥			
20	12	11	金	中間発表準備 ポスター制作			
21	12	18	金	中間発表（ポスター発表）			
22	1	8	金	中間発表のリフレクション・本発表にむけて			
23	1	15	金	グループ探究⑧			
24	1	22	金	グループによる探究活動⑨			
25	1	29	金	本発表準備 PDFで提出			
26	2	5	金	本発表			
27	2	26	金	個人で探究のまとめ、1年間の振り返り			

3) 実施概要

・2回目：「生きることを意味について考える」アクティビティー「大切なもの」

事前学習として、身体が自由が効かなくなっていく難病を抱えた女性のビデオをオンライン視聴し、本授業に挑んだ。各自で自分にとって「大切なもの」をリストアップした後、病状の悪化に伴って、それらを少しずつ手放していく過程を疑似体験した。最後に残ったものは何か？をクラスメイトと共有した後、「最も大切なもの」と

「二番目に大切なもの」を考えた。それらの回答として圧倒的に多かったのは、「家族」や「友人」といった身近な人であった。そのほか、「意志」・「向上心」といった自分の価値観や方向性をもって生きることにつながるキーワードなども挙げられた。

各自が心の中に持っている「生きる意味」について言語化を通じて再確認し、これから「グローバル探究Ⅰ」を勉強する上での土台として、人との関わりが大事であることを認識させるアクティビティーであった。

・3回目：「知ることを探究する」

我々はあらゆる物事を「知っている」が、それは本当に「知っている」と言えるのだろうか。各々がおかれている立場によって、物事をどのように捉えるかは異なってくるのではないだろうか。「知るための方法」として「知覚・感情・理性・想像・信仰・直観・記憶・言語」という8つの要素を確認し、それぞれがどのようなものか、なぜ大切なのかを考えた。「知覚」という要素が最重要で、「信仰」という要素はあまり重要でないと考えた生徒が多かったが、それは本当だろうか。例えば、合格御守りに効力はあるのか否か。

複数のワークを通じて、様々な角度から物事を見つめることの大切さ、自分たちが抱えているバイアスについて気づいた。

・4回目：「ブックレポート報告会①」

事前学習（分散登校期間6月1・2週目）として、ESDやSDGsに関連する課題図書（各自の希望により、15種類の課題本から1冊を選択）を読み、要約レポートを作成した上で、本授業に取り組んだ。

同じ課題本を読んだ生徒でグループを組み、本の内容を確認し合うことで、各自の読みを深めた。そして、次週の授業に向けて、異なる課題本を読んだクラスメイトにもその内容を紹介できるよう、本全体の要旨をまとめた。

・5回目：「ブックレポート報告会②」

異なる課題本を読んだ生徒同士でグループを組み、本の内容を紹介し合うことで、今どのようなことが社会で問題になっているのかを学んだ。次週からは、SDGsに関連するテーマの、オムニバス形式の講義が始まる。課題本や講義を通じて、SDGsに関する知識を深め、自分がどのようなテーマに興味があるのか、考えていく。

★ テーマ講義（9人の授業担当者からオムニバス形式の講義を受ける）

テーマ「格差と貧困」

世界で貧困の格差が拡大し続けるのはなぜか。歴史的背景や経済の仕組みを踏まえて格差が広がる理由を考えた。そして、相対的貧困・絶対的貧困という概念や、日本の相対的貧困率の高さ、日本の子どもの貧困率の高さについて知った。子どもの貧困は教育格差をうみ、将来の収入差にもつながる。このような世代をまたぐ「貧困の連鎖」・「貧困の再生産」を断ち切るためには、どうしたらいいのか。親・家庭に対する支援策と、子供に対する支援策について考え、クラスメイトと相談しながら学びを深めた。

テーマ「地球環境問題」

地球環境問題を考える際、個別の事象だけに目を向けていては、その本質に気づくことができない。例えば、「生物種減少」の問題について考える際は、その原因となる「地球温暖化」・「森林減少」など様々な問題についても同時に考えていかねばならない。また、「人口の爆発的増加」の問題が解決しなければ、「オゾン層の破壊」・「水資源減少」といった問題も解決することができない。このように、地球環境問題とは、個別に独立した問題ではなく、構造的な問題である。グループワークを通じて、俯瞰的・鳥瞰的に地球環境問題を捉える視点を学んだ。

テーマ「科学技術の発展について考える」

私たちの日常生活は、科学技術の発展を受けて大きく変容し続けている。今の自分の生活の中で、「こんなのがあればいいのになあ」や「こういう手間が省けたらいいのになあ」ということはないだろうか。それらの不満や日々の疑問を発展させたり、様々な技術に関連づけて考えたりしていくことで、新たな技術革新が進んでいくことを学んだ。そして、技術革新が進むことで、十年後・五十年後・遠い将来、世の中がどのように住みやすく・楽になっていくのだろうかということを考えた。

テーマ「10年後の自分、どんな仕事をしていますか？」

世の中には様々な「仕事」があるが、これから「なくなる仕事」・「なくなりにくい仕事」・「新しく生まれる仕事」とは何だろうか。「なくなりにくい仕事」とは、人間が本来すべき仕事を意味する。その具体的な職業を考え、グループでKJ法を用いてカテゴライズしながら、働きがいのある人間らしい仕事とは何かについての示唆を得た。

テーマ「人類の過去・現在・未来～理学的に考える～」

SDGsの問題は全て人間が抱える問題である。人類とは何かを捉えることでSDGsの問題を考える出発点になるのではないか。DNA・人口食糧問題・貧困など様々な視点から人類の歴史を学んだ。

テーマ「情報収集と活用法」

後期から探究活動を進めるにあたって、文献や先行研究を調べるための方法や、それらを参考文献として活用する際の留意点を学んだ。また、日常生活の光景をうつした写真や絵本を用いて、身近にある諸問題をSDGsの観点から捉えるとはどういうことか、演習を行った。

テーマ「ジェンダー」

はじめにジェンダーとセックスの違い、GGI（ジェンダーギャップ指数）に関する日本のデータなどを紹介しながら、ジェンダーに関する意識や日本の状況を簡単に確認した。その後、日本のジェンダーに関する課題とは何か、解決されつつあるものと、解決しなければならない課題＋その原因について、グループで議論を重ねた。そして、それらの解決に向けて、「自分ができることは何か」を個人で考えることで学びを深めた。

テーマ「メディアリテラシー」

私たちは生活の中でメディアからの大量の情報に出会う。それはどのような意図で

演出されており，そこから私たちはどのようなメッセージを受け取るのか。それを考えるヒントとして，いくつかの広告を見て分析を行った。その中でメディアにおいてタバコの描かれ方が時代の移り変わりと共に変容したこと，さらにエイプリルフールに hoax で放送された B B C のドキュメンタリーを人々が純粋に信じてしまったこと，戦勝者によって歴史が作られ情報操作も行われること等にも触れた。これらを通じて，メディアの中での情報の描かれ方や演出効果，ターゲット・オーディエンス等に関する気づきを得て，メディアを受け取る側としての見識を深めた。

・ 14 回目 グループ探究活動①

SDGs の 17 テーマのうち，同じものに関心を持つ生徒同士（3～4 人）でグループを作り，探究活動の一回目を行った。後期の授業では，身近な生活の中に SDGs に関連する課題を見出し，その課題の解決に向けて「問い」を設定して探究活動を行う。課題になるものに，多様な視点をもってアプローチしていく姿勢を養うために，本授業ではグループでワークを行った。まずはテーマから連想する身近なキーワード・課題を，次に社会情勢に絡めたキーワード・課題をリストアップした上で，それらに関する問いづくり作業を行った。その後，他のグループとコメントを付け合うことで視野を広め，次回以降に問いを深めていくための下準備を整えた。

・ 15・16 回目 グループ探究活動②・③

今後の予定やリサーチクエスションのたて方を全体で確認した後，グループでの探究活動を進めていった。まずは，前回考えたキーワード・課題のうち，どれに焦点を当てて探究するかを定めた。そして，そのキーワード・課題に対して，5W1H の問いを考えたり，信憑性（事実か）・比較（ほかではどうか，過去はどうだったか）・影響（どうなるのか）・限定（すべてそうなのか）の観点から問いを考えたりした。その上で，仮説を含んだリサーチクエスションを導き出し，今後の研究手法を検討した。

・ 17 回目 グループ探究活動④

12 月 18 日に行われる中間発表に向けて，リサーチクエスションを確定させ，探究方法を検討したり，今後の計画を立てたりした。

・ 18 回目 グループ探究活動⑤

最初にクラス全体で集まり，中間発表の形式と探究方法の確認を行った。探究を進めるために，まずは先行研究を十分に調査した上で，今後どのような調査・実験をすべきか，それらは本当に仮説検証に有効なのかを考えるよう説いた。そして，3 人 1 組になり，他のグループの人と，それぞれのグループの進捗状況を確認した。その後，各グループに分かれ，探究活動を進めていった。

・ 19・20 回目 グループ探究活動⑥・中間発表準備

12 月 18 日に行われる中間発表に向けて，調査内容について考察を深めた上でポスター制作を進めた。

・ 21 回目 中間発表

ここまでのグループ探究活動の成果を発表する場として，中間発表を行った。ポスター発表の形式をとり，個人で発表する機会を 1 回，他グループの発表を聞く機会を

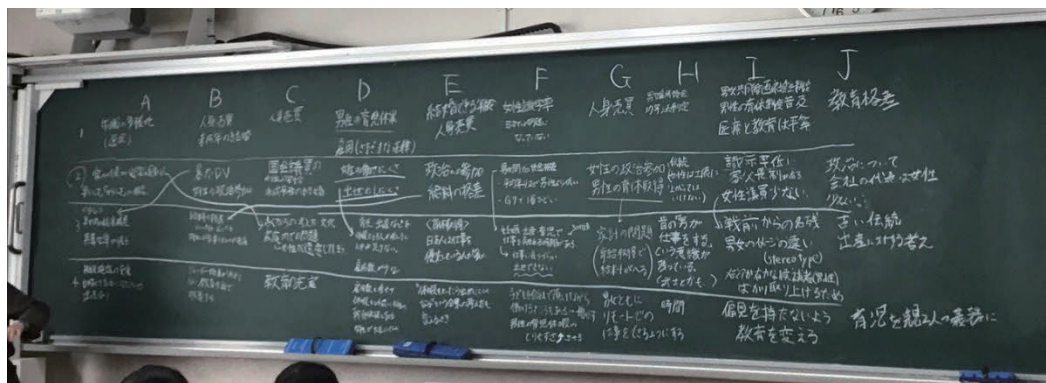
3回設けた。発表や質疑応答・相互評価を通じて、自分たちの探究活動が浅かったり偏っていたりすることに気付いたようであった。2月の本発表に向けて、どのように探究活動を深めて行くかをそれぞれが考える契機となった。

・26回目 本発表

半年間におよぶグループ探究活動の成果を発表する場として、本発表を行った。各グループのプレゼンと質疑応答・相互評価を行なった。自分たちが今生きている世の中についてSDGsの観点から捉え直すことの大切さ、物事を探究するとはどういうことか、等の学びを深める時間となった。ここまでの学びを振り返り、個人レポートを宿題として課した。

・27回目 まとめ

最初に、ペアワークでこれまでのグループ探究のふり返しをした。その後に、本発表で評価の高かったグループが発表を行い、探究学習をどのように進めていくべきか、SDGsに関する諸課題に対してどのように向き合うべきか、を改めて考えた。そして、一年間の中でどのようなことを学んだか、来年度の探究活動ではどのようなことに挑戦したいかを各々で考えて、「グローバル探究Ⅰ」の総括とした。



②「データサイエンス基礎」

1) 授業の目標

データサイエンスは今日において社会の根幹にもかかわる重要な学術分野であり、ビッグデータ、人工知能（AI）などの新しい技術だけでなく、ビジネスを含む社会活動における意思決定や問題解決なども取り扱う。そして、政府が提唱した今後の社会の姿、いわゆる society5.0 の構想においても、データサイエンスは社会の基盤を構築するための要素として重視されている。

このような背景から、高等学校教育においても、情報に関わるリテラシーの一つとして、データサイエンスについて学ぶことが求められている。

2) 授業の特徴

本科目は、今日求められるデータサイエンスについてのリテラシーとなる知識や技能を、講義と演習を通して、高校1学年の生徒全員を対象に学習させる初めての取組である。

- ・データサイエンスに関わる話題を幅広く扱うことによって、基礎的な知識や技能を、文理を問わず身に付けさせることを目指す。データサイエンスに興味があったり、数理的なことが得意だったりする生徒のみを選抜し、大学で学ぶような数学的知識の準備に特化した授業ではない。生徒全員に対してデータサイエンスへの興味や関心を与える。
- ・具体的かつ実際のデータ事例や社会問題、AI 技術を踏まえた上で、データサイエンスに関わる思考力・判断力・表現力の学習を目指す。例えば、ある目的に対して生データを処理するプロセスを把握させること、データに関する倫理的課題の解決へ向けた議論をさせること（対立する意見の克服等を含む）、身近にある AI や機械学習への理解を深めさせること（新しい価値の創造等を含む）がある。
- ・本科目は他教科との連携を重視し、本授業内外を問わずデータサイエンスを経験させ、データを取り扱うことに対して主体的に取り組む態度を養うことを目指す。特に、探究的な活動において、生徒がより主体的かつ責任ある行動をするためにはデータを根拠とした意思決定の手法例を認識させておくことが必要不可欠である。このため、グローバル探究の授業とは具体的に連携を図っている。

3) 授業の設計

本授業は、高校1年生向け（1単位）であり、コンピュータ室で実施した。定期試験および提出物・平常点を主な評価手段とした。配布したプリントを主としたため、教科書は無し。『今日から役立つ統計学の教科書（ナツメ社）』『情報リテラシー入門編<改訂版>（FOM 出版）』の2冊を副読本とした。

4) 前提条件（留意事項）

生徒の知識や技能は、小中学校で学ぶ内容のみを前提とした。生徒の PC の操作技能には、大きな差があったが、ほとんどの生徒が操作に慣れてないという状況からスタートした。また、数学に苦手意識がある生徒も少なく無い。生徒に PC の操作の習得と共に数学的理解を求めることには困難があり、高等学校以上の数学的理解を求めることは

最小限に留め、Excel で数学的計算ができることを目標とした。

5) 他教科との関わり（他教科との連携を含む）

- ・平野校舎では「情報」と「データサイエンス基礎」が1単位ずつ並行で実施された。池田校舎では「データサイエンス基礎」の1単位のみ実施され、2年次で「情報」が実施される。
- ・授業代表者として数学科教諭（筆者）が両校で授業を担当した。池田校舎では国語科教諭と情報科教諭と共に授業を行った。平野校舎では理科科教諭（グローバル探究担当）と共に授業を行い、並行する「情報」の担当教諭と連携をした。なお、大阪大学の数理・データ科学教育研究センターの高野特任教授に監修をいただいた。
- ・授業内容の選定では、次の2点を考慮した。「数学Ⅰ・データの分析」は、年度の“途中”で履修することもあり、本授業では分散や標準偏差などの、より数学的な話題は扱わない。また、平野校舎での「グローバル探究」の活動との具体的な連携をする。（平野校舎のみを挙げた理由は、探究活動の進捗進度に依るものである。）

6) 学習目標

次の5つを学習目標とした。【】内は、その目標と大きく関係する科目である。

1. データを基盤とする現代社会の構造や技術に関する用語や仕組みを知る。また、データが用いられている具体的かつ実際の事例において、データから得られる特徴を理解する。【情報／現代社会】
2. データを収集し、表現、分析する各過程において、倫理的な注意および適切な見方や取り扱いができる。【倫理】
3. さらに、データ（の分析）を利用した判断や意思決定をするための基本的な手法と、コミュニケーションや議論を通して新しい価値を導き出す過程を知る。データを根拠に意思決定を行う有用性や価値を認識する。【探究／理科】
4. データを取り扱うことに伴う数理統計的な背景やスキルを理解し処理できる。【数学】
5. エクセルを利用したデータの取り扱いを身につける。データ処理を用いた有用な技術を学ぶ。【情報】

7) 本年度の具体的な取組について

ア) 授業項目と主な評価規準

本年度に実施した授業項目と主な評価規準を掲載する。評価規準の項目は、a：知識・技能、b：思考・判断・表現、c：主体的に取り組む態度に関するものである。

【E】を付けた項目はExcelを利用した授業であり、【P】を付けた項目はPythonを利用した授業である。

	単元	内容（項目）	主な評価規準
6月～	・総論 ・見る	(1) Society5.0, データサイエンスの概要 (2) 身近なデータサイエンス／ビッグデータ/AI, IoT (3) 既知の知識（小中学校の内容）の復習	a ：データサイエンスに関わる基本的な知識を得たか。図表やグラフの観察や、データの数値の見方・取り扱い方について身につけることができ

7月	・取り扱う①	(4) Excel (四則, 関数, 参照など) 【E】 (5) データとは (データの定義) (6) データの質と量/尺度水準 (7) 図表・グラフの作成と使い分け 【E】 (8) 図表・グラフの見え方, 印象の変化 【E】 (9) ヒストグラムによる分布の形状観察 【E】 (10) 数値要約 (代表値の計算と使い分け) 【E】	ているか。 b: 図表やグラフもしくはデータを見て, それらが何を示しているかを正確に読み取ったり, 適切にデータを扱ったりすることができるか。 c: データや図表・グラフなどを取り扱う実習の場面で, 主体的に発言や活動を行うことができるか。
8月～10月	・見る ・取り扱う②	(1) データを根拠とした意思決定について (2) 相関と連関, 因果関係 (3) 散布図と相関係数, 回帰 【E】 (4) クロス集計とΦ係数, 独立 【E】 (5) データの取得と関連する倫理的課題 (6) データの取扱と関連する倫理的課題 (7) データの信頼性 ※池田校舎では, 11・12月も上記内容を行った。平野校舎の11・12月は次の単元に進んだ。	a: データの扱い方やデータサイエンスのあり方, 倫理等につき基礎的な知識を得たか。 b: 図表やグラフ, もしくは数値化されたデータを見て, それらが何を示しているかを正確に読み取ったり, 適切にデータを扱ったりすることができるか。データサイエンスに関わる倫理に基づき, データの扱い方について適切な判断や思考ができているか。 c: データや図表・グラフなどを取り扱う実習の場面で, 主体的に発言や活動を行うことができるか。
11月～12月	・知る ・手法の選択	(1) データ事例の紹介 (2) グローバル探究との連携 (平野のみ) - アンケートの取り方と倫理事項 - Google Form の使い方 【E】 (8) ※データの収集/表現/分析/意思決定において既習事項の利用・倫理的課題の遵守すること。	a: データの評価方法や事例分析などにおける基本的な知識を得たか。 b: 事例やアンケート調査において, 得られたデータが何を表しているか等を正確に読み取ったり, どのようなことが言えるかについて考え, 適切な意思決定等ができるか。 c: データ分析やアンケートを取り扱う実習の場面で, 主体的に発言や活動を行うことができるか。
1月～2月	・応用 ・技術 ・展望	(1) 人工知能について (2) 人工知能との共存/IA, イノベーション (3) プログラミングと Python の概要と利用例 (4) Python 文法の基礎ルール, 関数 (import, input, print, int/str など) 【P】 (5) グラフや図表の作成, 分布や代表値の計算 (numpy と matplotlib の利用含む) 【P】	a: 機械学習や人工知能, プログラミングに関する基本的な知識を得ているか。 b: プログラミングや人工知能・機械学習に関する実習において, 示された課題について適切な解答を出すことができるか。 c: プログラミングや人工知能・機械学習に関する実習の場面で, 主体的に活動ができているか。

	(6) 教師あり学習（回帰と分類）と教師なし学習（クラスタリングなど）の理論説明 (7) 手書き数字や画像の分類 (8) 機械学習の実装（scikit-learn を利用した SVM と k-平均法）【P】 (9) 深層学習について	
--	---	--

イ）本年度の特異性および保護者向けオンライン授業

- ・本年度は，コロナ禍での休校およびオンライン授業の実施から始まった。オンライン授業では，身近に利用されているデータサイエンスや AI， Society5.0 に関わる動画の視聴や，既習であるグラフ・図表や統計手法の復習をさせた。
- ・池田校舎で PTA 文化行事の保護者向けオンライン授業があり（10 月末），「データサイエンス基礎」として，1 時間の授業動画を作成し放映した。（データサイエンスの概要，データ分析，人工知能と倫理的課題。）

ウ）指導内容

データサイエンスという言葉自体を知らない生徒達に対しての指導であった。天下りの知識の指導ではなく，“問題・事例ありき”という授業スタイルを取ることに努めた。

以下，学習目標別に分類して指導内容を説明する。各目標が独立して存在する訳ではなく，相互に関連しあっていることに留意していただきたい。

(a) 学習目標 1 について

データに関わる既知の学習内容との繋がりを導入とした。身近にあるデータサイエンスや人工知能の技術の例を生徒と一緒に考えながら，データサイエンスに興味や関心を持たせた。データサイエンスの学問的特徴（データサイエンスのベン図，データサイエンティストの仕事，PPDAC サイクルなど）を解説した。そして，年間の授業を通してデータサイエンスへの理解を深めさせる指導を行った。

(b) 学習目標 2 について

データの取得および取り扱いに関しての倫理的課題を扱った。同時に，データ可視化したグラフや図表の“形状”によってデータを見る印象が大きく変わることも説明した。また，人工知能と人間の共存や IA についての問題も取り扱った。特に，倫理的責任は，国家や社会だけではなく 1 人 1 人の個人が理解と責任を持つ必要があることを共有した。Mickr や Mentimeter などのリアルタイムで意見を集約することが可能なシステムを利用し，それぞれの問題に関して各生徒の意見を尊重しながら，倫理的課題について理解を深めさせる指導を行った。

(c) 学習目標 3 について

PPDAC サイクルなどを含めた，データを根拠にする意思決定の重要性や有用性を伝えた。また，社会的問題をテーマとして与えて，データの取得から統計的な結果を出し，問題に関する結論を導出する過程を体験させた。

平野校舎では「グローバル探究」と連携をした。アンケートを利用した調査方法や

倫理的留意事項を説明し、生徒が実際の活動で行ったアンケート調査や分析について、アドバイスをを行った。

(d) 学習目標 4 について

データとは何か(データの定義)から初め、データの統計的な解析方法を解説した。機械的に数学の計算をすることからの脱却を図った。(データを観て、適切なグラフや図表にまとめ、分布を可視化する。この分布を見た上で統計量を計算する必要性を解説した。)

指導内容は、1 変量データの分布の可視化方法・中心化傾向・代表値の使い分け及び計算と、2 変量データの分布の可視化方法・関連の度合いの計算(相関係数や Φ 係数等の使い分けと計算)である。ただし、分布の数量化(分散や標準偏差など)は扱わなかった。また、統計的な手法の仮説検定などは全く扱っていない。

(e) 学習目標 5 について

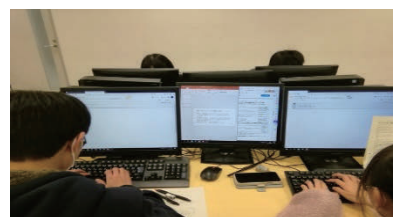
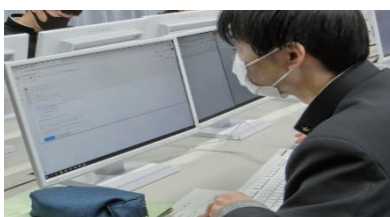
学習目標 4 の指導(④)において、Excel(やPython)を利用した方法の実習を繰り返した。Excelの基礎的操作を全く知らない生徒も多数いたため、四則演算や初歩的な関数、参照などの説明から始めた。

データサイエンスの応用例としての機械学習や人工知能の理論の解説をした。Pythonでのプログラミングを通して、機械学習を実装するコードの構造を教えた。

(Pythonの環境は、Google Colaboratoryである。)データ分析や機械学習への理解を深めるためにPythonを利用することを目的としたので、プログラミングの文法の解説は目標としなかった(時間が取れなかった)。つまり、Pythonの文法の説明は最小限の基礎的な内容に留め、サンプルコードについてのおおよその構造を把握させると共に、そのコードを実行することで何が起こるかを経験させることに重きを置いて指導した。

エ) 今後の学習との繋がり

- ・ベネッセが開発したPプラス検定を3月に受験する。
- ・2年生で「データサイエンス」という選択科目を開講する。データサイエンスの知識や技能について高度な事柄を学ぶ。



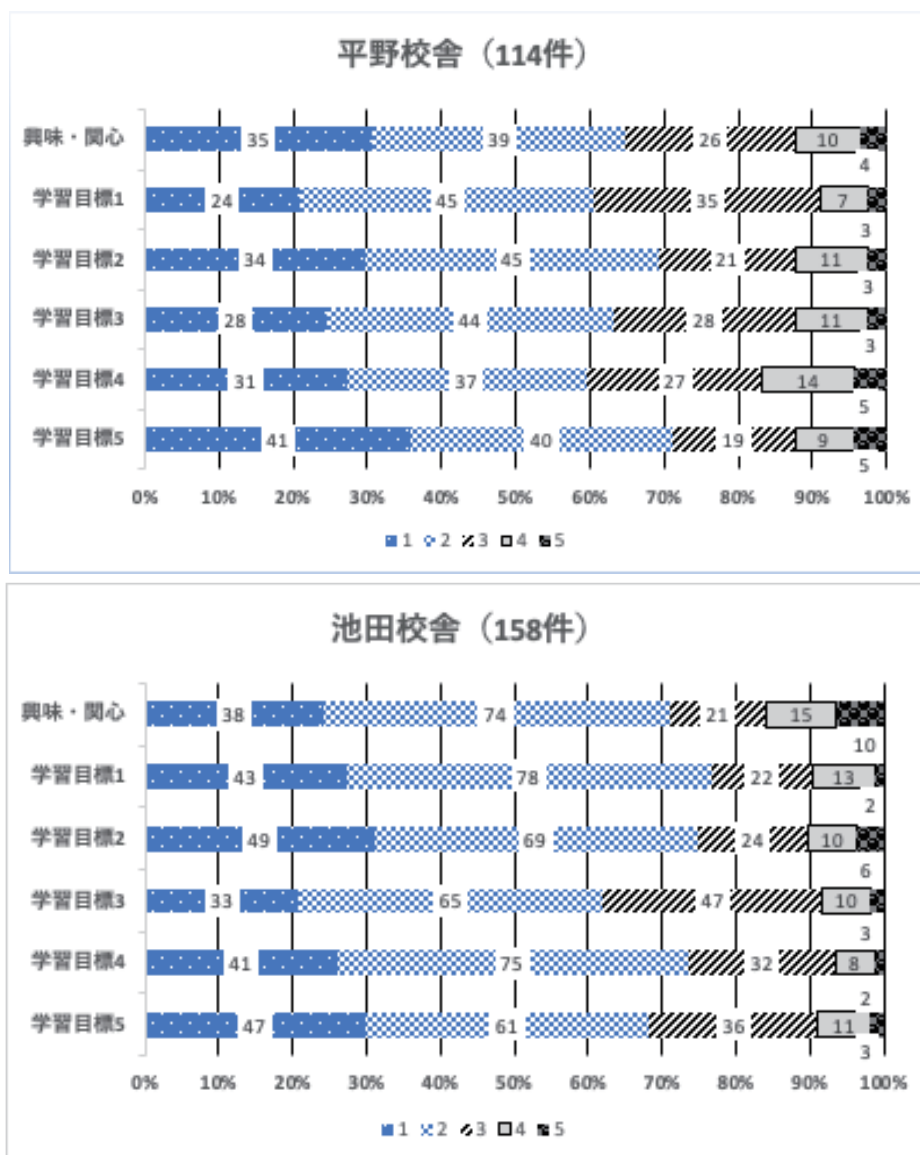
(授業の様子) 左にある2枚が平野校舎、右にある2枚が池田校舎での授業風景

オ) 成果と課題について

(a) 生徒へのアンケート実施の結果

生徒へのアンケートを実施した結果を校舎毎に帯グラフとして掲載する。このアンケートは、一年間の最後の授業で、Google Form を利用して実施した。

質問項目は「この授業を通して、『データサイエンス』について、興味や関心が深まりましたか。」と「学習目標に対して、授業によって理解が深まりましたか。(5項目)」である。



1: そう思う, 2: ややそう思う, 3: どちらとも言えない, 4: ややそう思わない, 5: そう思わない

(b) 成果

大きな成果は、1年間の教材開発と指導を通して、高校1年生で学ぶべきデータサイエンスの基礎についての履修事項の構築の基盤ができたことである。生徒へのアンケートの回答結果を観ると、学習目標を概ね理解できたかについて、いずれの項目に

についても「そう思う」「ややそう思う」に約 60%以上の生徒が回答をしている。同時に、平野校舎では 60%以上、池田校舎では 70%以上の生徒が興味・関心が深まったと回答をしている。

自由記述で得た肯定的な意見を幾つか挙げる。「データサイエンスという単語も知らなかったのに、授業を通して、日常の中でデータサイエンスは様々なところで使われていることが分かって面白いなと思いました。」「データが社会に与えている影響がよく分かりました。」「たくさんのデータが流通している中、それらのデータを扱う上でのモラルとか、学んだことを生かしてこれから生活していこうと思います。」「エクセルとか、インターネット上のツールの使い方も学ぶことができました。」「プログラミングの学習を通して、大体の仕組みや操作の仕方を理解することができた。」

他には、「楽しかった。」と「パソコンができるようになった。」「プログラミングが楽しかった。」という意見が多数あった。

(c) 課題

課題として、4 点掲げる：

1 点目は、有意義な実データや利用例（ビッグデータを含む）、AI の実例を十分に扱うことができなかったことである。本年度は、授業の話題の選定に準備時間を大きく割いた。次年度は、本年度の教材を基盤に、現実的な問題意識を含む教材を豊富に構築したい。

2 点目は、各学習目標の項目を十分に突き詰めることができなかったことである。生徒からのアンケート回答では、各学習目標の理解について「ややそう思う」が最も多い。幅広い話題を扱ったため、各項目の内容を突き詰めることができなかったことに反省が残る。全体の分野バランスと共に考慮したい。

3 点目は、アンケートの各項目への回答を観ると、「どちらとも言えない」も含めて「そう思わない」「ややそう思わない」が一定数いることである。自由記述には「パソコンの操作が難しかった。」「数学的な内容が難しかった」というコメントがあった。なお、池田校舎（のみ）では、Python の詳細な解説が欲しかったというコメントが多数あった。これらと、1 点目と 2 点目の課題の検討によって、改善を見込みたい。

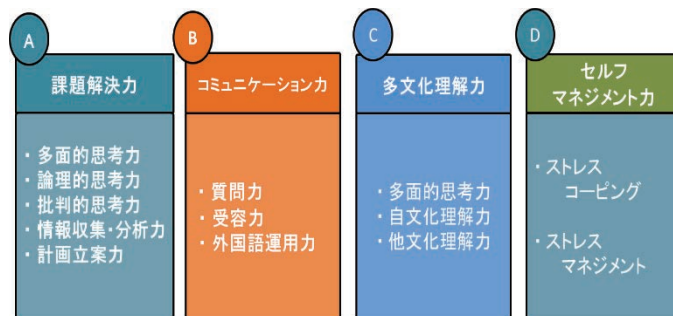
4 点目は、「グローバル探究」でデータサイエンスの知識や技能をもっと発揮させることである。いずれの生徒も“データを根拠にすることができる”という発想で留まり、あらゆる意味で、“実際にデータを取り扱うことへの意識”が希薄である。本年度は、探究活動がある程度進んだ時期に、アンケート活動が必要なグループに対して、個々に合わせた具体的なアドバイスを行う形に留まった。生徒が探究活動の方針を具体的に構想する以前に、データの価値の共有を図り、何を知っておく必要があるかを考えさせることから始めたい。

③「生命の倫理」（平野校舎）

1) 授業の目標

本授業は、SGH 指定時より引き続き開講する文理融合を特徴とする学校設定教科である。この授業では、科学技術の進歩とそれらを活用する人間の倫理観との間に発生する「ジレンマ」に向き合い、よりよい解決策を見いだす力・態度の育成に重点をおいている。さらに、ここでは OECD の Education2030 におけるラーニング・コンパスを参考にして「各論題における問題点の整理と解決への見通し」「ディベートを活用した討論」「討論を振り返り、立場を入れ替えて違う視点から見通しを立てる」というサイクルで学習を進めている。

平野校舎ではグローバルリーダーに必要なコンピテンシーとして「4つの力」を設定しており、本教科においても引き続き「4つの力」の育成をねらいとし、本事業で育成する8つ資質能力、態度等の育成に資することを目指す。



2) 年間授業計画

1 学期は、「受精卵遺伝子診断」「代理母」「脳死は人の死か」「臓器移植法の改定」「尊厳死・安楽死」という5つのテーマについて、関連知識を獲得し、課題の所在について考えた。

2 学期は、上記5つのテーマごとに8人のグループを編成し、肯定側4人、否定側4人のチームに分かれてディベートの準備を行った。その後、クラスをディベーター、司会進行、ジャッジ、オーディエンスに分け、5つのテーマごとにディベートを実施した。

3 学期は、上記5つのテーマについて、2学期とは肯定・否定の立場を入れ替えてディベートを実施した（次ページの図参照）。



「アジア高校生架け橋プロジェクト」の留学生が意見を述べている様子

論題について

論題 ① 受精卵遺伝子診断は、認められるべきである。

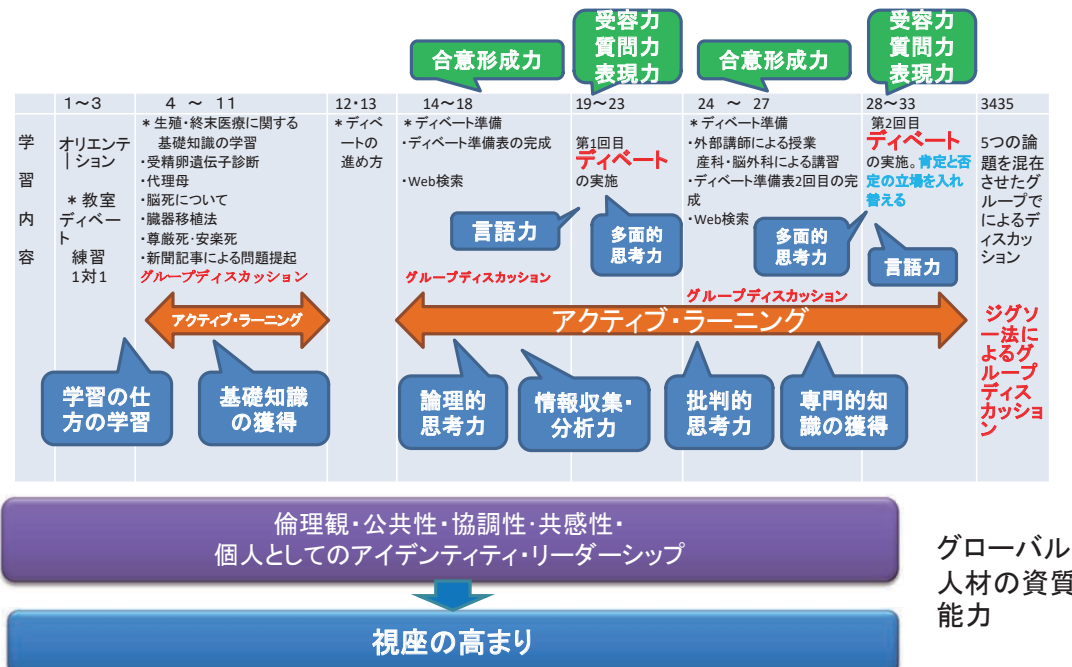
論題 ② 代理母は認められるべきである。

論題 ③ 「脳死」(全脳死)は、「人間の死」である。

論題 ④ 現行の脳死者からの臓器移植法は、改訂されるべきである。

論題 ⑤ 末期状態における「尊厳死」または「安楽死」あるいは、その両方は立法化して認められるべきだ。

…コミュニケーション力
…個人を対象とした能力



3) 成果と課題

5つのテーマについて探究することで、人間の生死に関する倫理的課題についても考え、理解を深めることができた。また、科学技術の発達とのジレンマについて考えることにより、多面的な視点や論理的、批判的な思考力が身についた。

また、ディベートを行うことで、論理的思考力や批判的思考力、コミュニケーション力が向上するとともに、聴衆の前で発言する緊張感は、生徒のセルフマネジメント力を高める場にもなっている。

課題としては、授業時間が少ないことがあげられる。生徒たちは放課後や休み時間を利用してディベートの準備に取り組んだり情報を集めたりしていた。アクティブラーニングでは生徒の負担が増えるため、生徒のシャドー・ラーニングに対する配慮が必要となろう。

【3】国内・海外研修等

①国内フィールドワーク

A：平野校舎 琵琶湖合宿

(a) 目的 近畿の食と環境保全－琵琶湖における SDGs と Society5.0－

「グローバル探究Ⅰ」の学習では、SDGs の諸課題がそれぞれ単独で解決されると認識するのではなく、各課題のつながりを捉える視点を持ち、地球規模の課題を自分事として実感する当事者意識をもつことが大切である。そこで、SDGs のウェディングケーキモデルにならい、農業・林業、漁業や淡水、気候変動などの健全な環境の持続が、貧困問題や健康福祉問題の解決の前提となることを具体的な体験を通して学習する。

(b) 概要

日程：令和2年11月13日（金）～11月14日（土） 1泊2日

場所：アクティプラザ琵琶（滋賀県高島市）

参加者：1年119名

(c) 内容

琵琶湖は、淀川水系を通じて本校が所在する下流消費地の市民生活に影響し、魴漁という伝統漁業が森・里・湖と人を複雑なシステムとしてつないでおり、SDGs 教材に最適である。そこで降水から始まる水の旅に沿い、水源の森での「森のカルテ体験版」、朽木溪谷から琵琶湖に注ぐ安曇川由来の伝統工芸高島扇子、ラムサール条約湿地水鳥ガイドウォーク、エコツーリズムに注目される SUP 等で文字通り琵琶湖の水辺に触れ、農林水産資源の主力近江米と琵琶湖産小鮎を夕食で味わう五感を駆使したフィールドワーク型探究を実施した。また、宿舎での講話でドローンのプログラミング操縦が農業・林業の課題解決をもたらす Society5.0 社会の一端に触れ、琵琶湖保全と水産を担当する滋賀県職員を招聘して質疑応答の場を設け、琵琶湖における環境保全と伝統漁法の継承、生活様式の変化と経済開発の両立の背景と課題を学習した。

家事負担を減らす洗濯機普及が富栄養化をもたらし、食糧難対策の干拓増反や水害対策護岸築堤道路が固有種の産卵や渡りの中継地となる内湖や湿地減少を招くなど、生活の豊かさと貧困、健康福祉との関係に目を向ける機会となった。なお、感染防止上、プログラムの一部は草木染等に変更した。プログラム（右表）とその内容（以下）を記す。

月日	プログラム
11月13日 (金)	①フィールドワーク講話Ⅰ ②フィールドワーク講話Ⅱ ③森の講話・草木染め体験【前半56名】 ④SUP体験・ドローン講習【後半54名】 ⑤水鳥観察・扇子絵付け体験【9名】
11月14日 (土)	③森の講話・草木染め体験【後半54名】 ④SUP体験・ドローン講習【前半56名】

「フィールドワーク講話Ⅰ」

講師：滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖保全再生課 奥田一臣氏

琵琶湖の概要、環境保全への取組を学んだ。特に、SDGs に関連した今後の環境保全の展望は、生徒が着手している「グローバル探究」に大きな示唆を与えていただいた。

「フィールドワーク講話Ⅱ」

講師：滋賀県農政水産部水産課水産振興 関 慎介氏

水産の視点から、漁業者と消費者、琵琶湖の環境を保つ行政の関係を学習した。これらの関係性はアクションプランを考えていく上でも大いに参考になった。

「森の講話・草木染め体験」

豊かな水と豊かな森林環境との関係について学習した。草木染めが現地に根ざす歴史的な背景を聴き、体験も行った。

「SUP (Stand Up Paddle Board) 体験・ドローン講習」

ドローン講習では、理論や技術的な内容を聴き、実際に操縦体験を行った。



講話Ⅰ



操縦するドローンから撮影



ドローンとタブレットを接続

②海外研修代替プログラム

A：平野校舎

1) カンボジア研修

1, 2 年生の希望者を対象とする「カンボジア研修」(8 月実施予定) は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止し、オンラインツアー(オンラインによる研修)に変更した。

ア) 当初の実施計画

日程：令和 2 年 8 月 17 日(月)～令和 2 年 8 月 22 日(土)

場所：カンボジア シェムリアップ周辺

目的：・海外で支援活動を行う団体と共に活動し、その目的や運営について理解する。

- ・現地での探究活動を今後のグローバル探究等にかす。
- ・フィールドワークを通して、現地の社会課題の歴史的背景や現状を学ぶ。
- ・現地校との交流を通して、異文化に対する理解を深める。

内容：当初計画は次ページの表を
参照



訪問予定であったブオク高校(左)とバイヨン中・高校(右)

日程表2020(海外フィールドワーク:カンボジア)

	8月17日(月)	8月18日(火)	8月19日(水)		8月20日(木)		8月21日(金)	8月22日(土)
		起床	起床		ボスコ	伝統の森	全員	起床
7:00					起床			関西空港着
8:00			8:00ホテル発		ホテル発	ホテル発		入国後、荷物を 受け取り解散
8:30	関西空港集合						ロビー集合	
9:00		ホテル発			移動	移動	ホテル出発	
9:30								
10:00		クマエ: 山勢代表から クマエでの活 動報告、ゴミ 山視察	プオク高校 交流会			伝統の森訪問 (DVD鑑賞 & 岩 本様のお話、 伝統の森散策)	バイヨン中学 校で現地中学 生と交流	
10:30	10:30 関西空港発 VN331便				ボスコで料理 教室			
11:00								
11:30								
12:00							モイモイ農園 で昼食	
12:30		昼食	昼食	昼食	昼食	昼食		
13:00								
13:30		SALASUSU: 橋本様より、 SUSUの説明、コ ミュニティファ クトリー見学、 バームリーフ ボックスづくり 体験	ホテルでシャワー		スーパーマウ ス 地雷除去のマ ウス見学	シルクのハン カチ染色体験	アンコールワッ ト遺跡観光	
14:00	13:25 ハノイ着		ホテルでシャワー後、「ボスコ」 or「伝統の森」へ出発 (宿泊に必要なものはリュック などにまとめて移動する)					
14:30								
15:00								
15:30	ハノイ発VN837便							
16:00	シェムリアップへ				移動	移動	空港到着	
16:30								
17:00	17:10シェムリアップ着		ホテル出発					
17:30								
18:00					夕食			
18:30	夕食		ホテル着				各自、空港内 で食事をする	
19:00		夕食	ボスコ宿泊 夕食	伝統の森宿泊 夕食	ナイトマーケット			
19:30								
20:00								
20:30	ホテルチェックイン	オーガニック コットン 古澤様 講演会					18:05 シェムリアップ 発、VN836便	
21:00	ミーティング						00:20 ハノイ発、 VN330便	
21:30								
22:00								
22:30	就寝	就寝			就寝	就寝		

VNとは、ベトナム航空のことです。

VNとは、ベトナム航空のことです。

イ) オンラインツアー

参加者：1, 2年生 28名 教員 5名 カンボジア 7名

(a) 第1回オンラインツアー (NPO 法人「SALASUSU*」の講義・インタビュー)

(*SALASUSU…女性の自立支援を進めるため、い草製品の製造を中心とするソーシャルビジネスを展開する NPO 法人)

日時：令和2年12月14日(月) 16時～18時

場所：平野校舎合同教室

準備：教員7名が事前にデモビデオ等を視聴し、当日の授業について意見交換を行った。オンラインの利点をいかし、例年では見学できない場所等を映し、現地の人々へのインタビューを試みる事が提案された。

内容：

- ・カンボジアの歴史に関する講義「ポルポト政権とカンボジアの課題」
- ・現地オンラインツアー（現地視察）
- ・講話とインタビュー

SALASUSU で勤務する女性工員から話を聴き、SALASUSU で勤務する以前の生活や現在の仕事の内容、今後の生活に関する展望等についてインタビューを行った。

生徒は、現地の様子や工房で働く方の話を聴き、カンボジアにおける環境問題、貧困問題、教育等について学習を深めることができた。

実施後のアンケートでは、89%が今後もオンラインで学習を続けたいと答えた。



以下は生徒アンケートからの抜粋。

「現地スタッフの方の『貧困は目に見えない』という感想が心に響いた」

「カンボジアで生きる中で困難や苦難も多い中、私たちなら 10 代 20 代という楽しい時期に家族の世話や仕事をし、30 代ではたくさんの子どもの子育てで生きていくバンケンさんの姿に感動した。『貧困は目に見えない』という言葉が心に刺さった。国や人々の背景や様々な情報を知り、より深く理解することが貧困の解決につながる。」

(b) 第 2 回オンラインツアー（NPO 法人「SALASUSU」の講義・視察・インタビュー）

日時：令和 3 年 1 月 29 日（金）16 時～18 時

場所：平野校舎大講義室

内容：

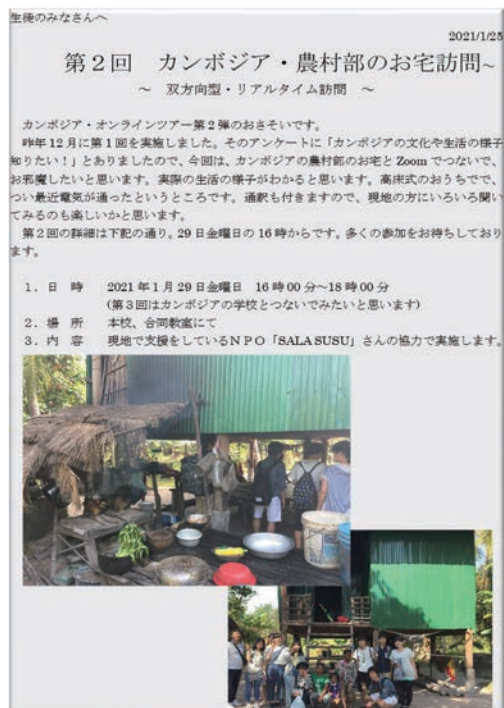
- ・農村部の生活の視察

現地の村や住民の自宅を訪問した。井戸や米を炊く薪、寝室や鶏小屋等を見学し、生活の様子を知ることができた。

- ・インタビュー

電気や水道等のインフラ状況や医療問題に関してヒアリングを行った。数年前に電気が通ったが電気代が高いこと、18 歳以下は診療費が無料であること、市内まで行かないと大きな病院がないこと等、様々な情報を得ることができた。

実施後の生徒の感想には「日常生活も楽しそうだと感じた」とあり、物質的な豊かさとは豊かな生活のだけで判断しないことに気づく生徒もいた。



(c) 第3回オンラインツアー（現地小学校の視察・インタビュー）

日時：令和3年2月22日（月）16時～18時

場所：平野校舎教室

内容：学校関係者等からの講話とインタビュー

バンテアスレイ小学校をオンラインで訪問し、現地の学校教育について、校長や教員の話を聴いた。また、小学校2年生（国語）、4年生（国語）、6年生（数学）の授業を参観し、小学生や校長、教員へのインタビューを行った。

実施後の生徒の意見には「カンボジアの子どもたちが中学校以降、特に大学にいけるようにするにはどうすればよいか」「子どもが学校に行かずに、働かなくてはならない環境をどう改善すればよいのか」等、課題意識をもったことがわかる意見が多数あげられた。



(d) 第4回オンラインツアー（一般社団法人 KUMAE*の講義・インタビュー）

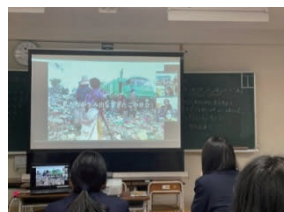
（*KUMAE…ゴミ山での労働から子供たちを開放し、自立支援を進めるため、バナナペーパー等の商品づくりを行う法人）

日時：令和3年2月26日（金）16時～18時

場所：平野校舎教室

内容：法人代表の山勢拓弥氏からの講話とインタビュー

ゴミ山の諸問題と現状、法人が目指すものについて話を聴く。カンボジア研修で毎年訪れていた現地のゴミ山をオンラインで見て、危険度の高い仕事に就く子供や人々の様子を聴いた。貧困をなくしつつ生活環境を改善するためには、安全で収入が得られる仕事の創出が必要であることを、現地の状況を聴きながら学びとった。また、山勢氏が取組を始めた経緯やその後の経過について話を聴いた。



毎年生徒が訪れる現地のゴミ山(後方)

2) ニュージーランド研修

1年生希望者対象の「ニュージーランド研修」(3月実施予定)は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止となった。代替プログラムとして、訪問を予定していた連携校との国際ワークショップに変更した。

ア) 当初の実施計画

日程：令和3年3月22日(月)～31日(水)

研修中に連携校のヘイスティング・ガールズハイスクールを訪問し、次年度以降の国際共同研究及び高校生国際会議等の準備となる交流や協働的な学習に取り組む予定であった。

イ) 国際ワークショップ

目的：

- ・英語での意見交換を通して、コミュニケーション力、プレゼンテーション力を高めるとともに、双方の国の社会や文化を知ること、グローバルな社会課題の理解及び多文化理解を深める。
- ・令和3年度実施予定の「高校生国際会議」並びに「ニュージーランド研修」に向けた両校の生徒の協働的な学習(定期的なオンラインでの学習)へのスタートに位置づける。

日時：令和3年3月17日(水) 9:30～11:10

場所：平野校舎教室

準備：現地のコーディネーターの協力を得ながら2月以降、両校の担当教諭がメールで連絡を取り合い具体的な準備を始めた。3月10日にオンライン(Zoom使用)で当日の打合せや通信状態の確認を行った。

内容(予定)：

- ・オープニング
- ・アイスブレイク(自己紹介、学校紹介等)
- ・トピック1:「アフターコロナにおける生活の変化と職業・サービスの変化」
- ・トピック2:「コロナ禍での学校生活とオンライン授業」
- ・その他の情報交換

B：池田校舎

1) オンライン講演会

池田校舎では「カナダ研修」、「シンガポール研修」令和3年3月に予定してたが、いずれも中止し、その代替プログラムとして、SDGsをテーマとしたオンライン講演会を実施した。池田校舎から1年生68名、2年生150名、平野校舎から1年生8名、2年生2名が参加した。

ア) 講演会の日時と参加者数

令和3年2月12日(金) 9:00-10:10	Mr. Jiya Janowitzs (英語)	93名参加
10:20-11:30	川西 俊吾教授 (英語)	52名参加
2月13日(土) 9:00-10:10	Mr. Sonny Patel (英語)	127名参加
10:20-11:30	佐藤 健一医師 (日本語)	59名参加

※ZOOMで実施したため各講演会ごとの校舎別・学年別の参加者数は不明

イ) 内容

(a) Mr. Jiya Janowitzs 所属：Space Tango (米国の宇宙開発研究会社)

2020年スタンフォード大学大学院卒業

講演タイトル：“How to be Lucky”

<講演の特徴と主な内容>

- ・自身のライフヒストリーと現在の仕事の中で、SDGsの目標と関連する部分を何点かのSDGs目標と関連付けて提示。どのストーリーがSDGsの何番の目標と関連しているかを関連付けて説明され、SDGsとの繋がりが明確になった。
- ・講師は自身が奨学金をもらい大学入学を果たしたという、情熱を持って突き進んできた学生時代のストーリーを写真も交えて紹介された。
- ・Explore, Go adventure, Take Opportunities, Not to limit yourself, Passion, などのキーワードが非常に力強く、自ら人生を切り開いてきたアメリカ人の若者らしい発想が印象的であった。
- ・後半で、現在の仕事、研究分野について説明。再生可能なエネルギー開発の研究を行い、学位は航空エンジニアリングで修得。現在は宇宙開発技術研究会社 (Space Tango) で、宇宙ステーションに行くロケットの中に入れて運ぶ箱型機械の開発と実際の運用に携わり (世界で唯一の会社)、国際宇宙ステーションでの業務に関わる。各国の人々との連携が非常に重要な業務であり、やりがいを感じている。

<主なチャットでの質問と講師からのアドバイス等>

- ・7人の生徒から英語で質問あり、そのうち3件を以下に記載。

Q「SDGsに貢献するには何をすればよいと考えるか？」

⇒世界の国々は相互に繋がっており、外国にいけば、世界を支援したいと思う気持ちを持つだけでもすでに世界を助ける力に繋がる。一人で解決できる課題はなく、社会ではすべてがチームプレーであることを忘れないように。

Q「再生可能エネルギーの中で一番成長株は？」⇒太陽光

Q「人生を切り開く準備をしているときに自分に対する信頼を失うことはあったか？」⇒ ない

- ・講師から最後に参加した生徒へのアドバイスとして、
「自分がどんな機会にも対応できるような準備をしっかりとしておくことが大切」
皆さんへのアドバイスは、
① Learn how to learn ② Invest in yourself ③ Follow your own path
「自分で自分の人生を切り開いてゆくこと、自分にしかできないことが必ずある。」

(b) 川西俊吾 教授 所属：北陸先端科学技術大学院大学

講演タイトル：“Expected Roles of Individuals and Society in Health and Medical Care and Maturity attainable by overcoming the COVID-19 Pandemic”（保健医療に対する個人と社会に期待される役割，コロナ禍を乗り越えることで得られる（個人と社会の）成長）

<プレゼンの特徴と主な内容>

- ・川西先生の専門分野の一つはグローバル教育。今回の講演は、現在起こっているコロナ禍で、我々はどのような態度（意識）を持って対応していけばよいかを論点を見せながら説明された。CHANGE ⇒ Change から Chance へ。
- ・若者に対するメッセージとして、変化の時期に、「変化」にどのように向かっていけばよいかについて、次の4タイプを提示。
 1. Change neglectors（変化を無視する人）
 2. Change refusers（変化を拒否する人）
 3. Change followers（変化に自分の考えなしに追随する人）
 4. Change makers（変化を起こす人）
 参加した生徒へ、最後の4. Change maker になることを提案。現実社会で必要な変化をもたらす人。未来は、現在の自分が決めるものではない。想像と創造の力から生まれる。
- ・講義の内容は、SDGs の目標の中では、目標3と関連づけられる。
- ・Forecasting 今起こっていることから未来がどのようになるか予想する。
- ・Backcasting どんな未来を作りたいかを考えて、今すべきことを決める。
- ・コロナ禍で、SDGs の目標3にネガティブな影響を与えている。そのため、保健医療にどのように応じるかは、個人で判断をすることが求められている。そのために個人でできる5つの点を提示。
 - ①予防 ②抑制 ③コミュニケーション ④連携と協力 ⑤肯定的な考え方
- ・講師から参加した生徒へのメッセージ：
「現状から何を学び、どうこの機会を将来に活かしていくかはあなた次第。
あなた自身が未来です。Change Maker になろう！」

<主なチャットでの質問と講師からのアドバイス等>

- ・今できることを誠実に行う事が大切。ただ与えられたものを消化するのではなく、自分自身で決めた目標、考えた目標に向かって進むこと。
- ・「医療従事者へのエールを込めた活動とは？」⇒物質でなく、人間愛を大切に

**(c) Mr. Sonny Patel 所属：ハーバード大学講師，シドニー大学リサーチフェロー等
専門は“分子生物学” Molecular biology**

これまでの研究調査対象地域として、ウクライナ・チェルノブイリ原発事故周辺住民、南アフリカ貧困地域住民、福島原発事故被害住民（子供たち）等を対象とした調査経験有。

講演タイトル：” How do we navigate our career?”

我々は、自らのキャリアをどう操縦するのか

副タイトル : How to navigate uncertainty to find your passion?

情熱を（かけるものを）探すため不確実性をどう操縦すればよいか

How can we be global resilient leaders?

我々はどのようにグローバルで打たれ強いリーダーになれるのか

<プレゼンの特徴と主な内容>

- ・講師自身のこれまでの勉強や研究、研究機関、調査地域などについて、自身の（外見が）変化してきた写真も見せながら説明。地域住民を対象とした調査活動での写真も多く含まれ、講師の専門分野である「分子生物学」を活かした研究調査として、課題を抱える地域社会に入り込み地元住民と交流した経験がいかに講師の心を動かし、影響を与えてきたかがよくわかった。
- ・どんなキャリアをどうやって選べばよいか？
 - ①Know your passion 好きな事、情熱をかけたいことを深く慎重に選ぶ
 - ②Choose career options that match your values
自分が価値を置くものと適合するようなキャリアを選択する
 - ③Testing and Refining Skills 自分の能力や技術を絞り込み、試してみる
- ・講師自身は、ウクライナのチェルノブイリ原発事故被災地域の周辺住民（3代目、4代目でもまだトラウマが残っている）に対する調査を行い、そこでの住民との交流から自身の能力が上がり、その経験がずっと活かされている。2019年にも、同地域で、高度な調査を実施。
- ・福島では、グリーンクロスという団体との連携で、被災2年後に現地入りし、子どもたちの参加型の活動を指導し、子どもたちは、トラウマがいかに長く続いても、自ら前を向いて進んでいく力を目の当たりにする経験をした。
- ・地域住民との交流を通じ、様々なことを教えることは難しくないが、政府と連携した仕事になると、様々な政策アジェンダが入りこみ、難しくなる。
- ・チェルノブイリと南アフリカでの地域住民との交流の経験で、自身の情熱が試されたと感じている。
- ・講師は大学時代に演劇パフォーマンスにも情熱を持ち、演技の勉強と活動をした。その経験は、人間心理の分析や、人間は、どんな状態の時にどんな態度に出るかなどを考えるための基礎になり、仕事にも活かされていると感じている。

<主なチャットでの質問と講師からのアドバイス>

- ・「米国の職業選択に関する不平等について」
「アメリカでは、誰もが同じように職業を選ぶチャンスを与えられるわけではない。その不平等について、どうやって乗り越えることができるか？」
⇒確かに、それは米国には存在する。自身もハーバード大学に入ったころは、自

分と同じような背景や経験（インド系）を持っている生徒はあまりいなかった。しかし、自分がそんな中で学位を取り研究生活を進めていくうちに、他にも同じような境遇の生徒が入学してくるようになった。自分がやっていくことで、他の同じような境遇の人にもできる，ということを示すことができ，それが社会への貢献につながると信じている。

- ・「お金を稼ぐことは大切なのか？」

⇒自分のやりたいことをし，それをするための生活環境を維持するためにお金は必要であるが，必要以上に目的なしにお金もうけだけに走ることを勧めるわけではない。安定した生活をすることは大切であり，そのためにお金を稼ぐ。

- ・「キャリアを探すために情熱を持つことは必要と思うが，それをどうやって実行するのか？」

⇒すぐに答えが出るものでなくても，その質問の答えは，自分自身の成長の過程で生まれてくるのではないか。

(d) 佐藤 健一 所属：NMC（日本メディカルケア シンガポール）

医師として，シンガポールの日本人向け病院勤務

講演内容：シンガポールの医療事情について

日本語での講演（PPT，質疑応答も日本語）

<プレゼンの特徴と主な内容>

- ・講師は 2007 年にシンガポールであった学術会議に参加したことがきっかけで，世界から日本を見てみたいと思い，シンガポールで働くようになった。
- ・シンガポールの医療事情について説明。海外からの労働者の寮で発生した COVID-19 への対応について説明。人口 570 万人のうち外国人が 167 万人というシンガポールでは，バングラデシュからの単純労働者やフィリピンからのメイドや高齢者施設などの労働者が住む外国人労働者寮で発生した COVID-19 の患者は，重要課題であり，政府が隔離施設を作り，集中治療にあたった。国民に対し，マスクは自動販売機で無料配布。公共の場でマスクをしない人には，300 ドルの罰金が課される。
- ・後半「グローバル社会について」生徒へのアドバイス。
- ・海外に出るときは，目的を明確にして行くこと。何をしたいのかをよく考えて。
- ・海外での行動，生活は，自己責任で。ガイドブック通りではない。
- ・全体を見て自分が何を信じるかを自分で判断。マスコミなどは消費者が望むものを切り取って情報提供しており，実際に起こっていることの全体像は見えない。
- ・Think Globally, Act Locally
世界で見て感じたことを日本に還元してほしい。

<主なチャットでの質問と答え>

- ・シンガポールでのワクチン接種審査と承認制度，コロナワクチンの副作用について，マスク警察（日本以外の国には存在しない）と刑罰，マスクの有効性など，全ての質問が，シンガポールの社会保障制度と日本の違いなど，医療やコロナの話に集中し，特化したものとなった。

ウ) 海外交流コーディネータからの報告

今回は途上国で現在働いている日本人から、仕事にける思いや将来の夢、何故今の仕事に就いているのかなども含み話してもらえると生徒が自分に引き寄せて考えやすいのではないかと。講演後にチャットでアメリカ人講師へ英文を作成して質問した生徒たちの能力や、それらの的確な質問内容に対しては講師からも称賛され、講義内容を理解したうえで英語で質問できる何人かの生徒には、もっと成長できる伸びしろを感じた。

エ) 事後研修

令和3年3月18日(木) 10:00-11:30 川西 俊吾教授

前半は、参加生徒をグループに分けて英語で振り返りを行った後、各グループから感想・意見を英語で報告してもらう。

後半は、今年取り組んだ「探究」の概要を英文で提出した生徒の探究内容に対して、川西教授から講評をいただき、SDGsをテーマとした探究活動について助言をいただく。

【4】高校生国際ワークショップ

A：平野校舎

1) 高校生国際ワークショップへの活動（グローバル探究プラス）

ア) 概要

令和3年度に実施する高校生国際会議に向けて海外連携校とグローバル課題に関する共同研究を行うことを目標に、学校設定科目「グローバル探究Ⅰ」を発展させた放課後活動「グローバル探究プラス」を実施した。グローバル探究プラスは、「イングリッシュサロン」及び「イノベーションラボ」の2つの講座からなる。

「イングリッシュサロン」では、年間を通して、国際ワークショップにおける議論の素地となるグローバル諸課題に関する英文に触れ、また、英語での議論やプレゼンテーション等について学んだ。一方「イノベーションラボ」では、データサイエンスやAIテクノロジーを世の中の課題解決に役立てる探究活動として、大学等が主催するプロジェクトごとに事前学習や模擬ディスカッション、成果のフィードバック等を行った。両講座とも、各回10～20名程度の希望者が参加し、継続的に活動に取り組んだ。

なお、活動に係る情報共有はGoogle Classroom及び啓林館と共同開発中である「スマートレクチャー」を試験運用した。そのような中で、今年度、高校生国際会議の準備として実施したのが高校生国際ワークショップである。

イ) 年間の活動内容

イングリッシュサロン 指導：海外交流アドバイザー(外国人指導者)、本校教員1名

7/22	1. キャラクターをペアで説明 2. 折り紙を使って自己紹介
7/29	1. Which do you like better? 2. Convenience store preference 3. 24/7 is better or not?
9/2	1. Warm Up questions
9/16	1. Effects of Global Warming 2. How can we reduce carbon footprint?
9/30	1. Artificial intelligence 2. What kind of jobs will be replaced?
10/7	『全国高校生SRサミットFOCUS』のWritingチェック
10/14	1. Review of artificial intelligence 2. Stereotypes / biases / discrimination 3. Gender inequality
10/28	1. Introduction of SDGS 2. Social Equality 3. Naomi Osaka's anti-racism message
11/4	1. Animal rights 2. Is keeping animals in zoos good or bad?

	3. Animal experiment
11/11	1. Worm Up 2. SDGs Goal No.2 zero hunger 3. Causes of malnutrition / hunger / starvation / famine
1/13	『国際ワークショップ』abstract チェック
1/20	1. Worm UP 2. The situation about COVID-19 at school
2/17	1. Language Extinction 2. Causes & Effects of Language Extinction
2/24	1. Introducing Casinos in Japan 2. Negative & Positive Effects of Casinos

イノベーションラボ 指導：本校教員 4 名

7/9	大阪府立大学『高校生起業家講座』プロジェクト(A)の校内募集開始
7/23	A ラボ① 情報源を豊かにする・用語集の事前調査
8/1	A ラボ② ディスカッション入門, オンデマンド講座の受講開始
8/6	A ラボ③ 模擬ディスカッション+ミニプレゼン相互評価 日本エシカル推進協議会『エシカル甲子園』プロジェクト(B)の校内募集開始 外務省, 公益財団法人日本国際連合協会主催『ユネスコ国際協力作文』プロジェクト(C)の校内募集開始
8/14	『高校生起業家講座』グループディスカッション
9/16	立命館宇治高校『全国高校生 SR サミット FOCUS』プロジェクト(D)の校内募集開始
9/24	D ラボ① 「ガイダンス (プロジェクト概要の理解, SDGs に関わる先行発表の研究)」
10/1	D ラボ② 『全国高校生 SR サミット FOCUS』参加申込の準備
10/8	A ラボ④ 事後報告会 D ラボ③ 『全国高校生 SR サミット FOCUS』エントリーシートの作成
10/15	D ラボ④ 『全国高校生 SR サミット FOCUS』発表動画の作成
11/2	『全国高校生 SR サミット FOCUS』ウェビナー開始
11/14 ・15	『全国高校生 SR サミット FOCUS』オンライン開催
11/23	平野校舎『国際ワークショップ』プロジェクト(H)募集開始
12/3	D ラボ⑤ 事後報告会+『国際ワークショップ』参加者選考
12/12	H ラボ① 第1回準備会(小トピック①②の決定)
12/16	H ラボ ②第2回準備会 (abstract の準備) 啓林館スマートレクチャーの試験運用
1/18	H ラボ ③進行およびファシリテーションレコーディングの検討
1/21	国際ワークショップ第1日
1/26	国際ワークショップ第2日
2/12	国際ワークショップ事後アンケート

2) 高校生国際ワークショップ(平野ー台湾)

平野校舎の生徒と、海外連携校である高雄師範大学附属高級中学（以下、高雄）の生徒が、グローバル社会にける新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）の影響とその後の世界のあり方について、2日にわたりディスカッションを行った。

ア) 第1回 高校生国際ワークショップ

日時：令和3年1月21日（木）16時～18時

場所：平野校舎セミナー教室

参加者：（生徒）平野校舎13名、高雄5名

（教員）平野校舎9名、高雄3名、大阪教育大学2名

オンラインツール：シスコ Webex

タイムテーブル：

16:00 オープニング

16:03 挨拶：高雄師範大学附属高級中学 李金鵞校長

大阪教育大学附属高等学校平野校舎 佐藤賢司校舎主任

16:10 自己紹介 / アイスブレイク（進行役 各国1名）

16:20 コロナの影響に関するプレゼンテーション（高雄）

16:40 ディスカッション

(a) 感染拡大防止対策や、学校生活・オンライン学習について

(b) これからの時代に必要とされる職業やサービスについて

17:55 クロージング，終了

内容：

- ・プレゼンテーション「コロナ禍の台湾の社会生活」（高雄の生徒）

マスクの着用，ソーシャルディスタンスの保持等は日本と同様だが，商業施設は通常通り営業し，国内旅行も平常通りであった。学校は，フィールドトリップ等の行事は見送られたが，オンライン学習や分散登校等はなく，平常通り授業が実施された。日本と同じように検温は義務化されている。約20年前のSARSの経験から，台湾の国民は政府の対応が迅速であったと考えている。例えば，ポスターによるソーシャルディスタンスや規制等の注意喚起，手洗いを促す歌，マスクをしないことに対する罰金，また，国民全員にマスクがいきわたるための保険証番号の偶数・奇数によるマスク購入日の分散措置等である。

- ・ディスカッションⅠ（コロナ禍での学校生活とオンライン学習）

日本では，緊急事態宣言下において多くの学校が休校し，オンライン授業や分散登校などの措置がとられてきた。平野の生徒から，学校のオンライン授業に関する経験やその利点と問題点を話し，高雄の生徒と共有した。

- ・ディスカッションⅡ（緊急事態宣言下での日常生活）

両国のコロナピーク時の政府の対応や施策，国民の日常生活（例えば，日本の緊急事態宣言での不要不急の外出自粛や必需品の購入方法等）について，また，両国

で共通して需要が増加した食品デリバリーサービスの等について情報交換を行った。

・ディスカッションⅢ（これからの時代に必要とされる職業やサービス）

高雄の生徒から、仕事への影響は職種によって異なり、特にツーリズム関係の職業に影響が顕著であること、台湾の国内旅行を推進するために高速道路料金が 90 日間無償とされたこと等の情報が示された。一方、平野の生徒からは、店舗において客と店員の接触を避けるためにタブレットや機械が導入されていること、外出自粛によりオンラインでの活動の需要が高まっている等の情報が提示された。

アフターコロナの時代には、正しい情報を入手する力や、非接触で利用できるインターネットやコンピューターの活用スキル、オンライン上で適切にコミュニケーションを図るスキルが求められるという意見が両校の生徒から出され、一致した。



イ) 第 2 回 高校生国際ワークショップ

日時：令和 3 年 1 月 26 日（火）16～18 時

場所：平野校舎教室

参加者：（生徒）平野 13 名，高雄 5 名

（教員）平野 7 名，高雄 3 名，大阪教育大学 3 名，琉球大学 1 名，大阪大学ユネスコチェア（協働大学）1 名，

（その他）日本 WHO 協会（協働機関）1 名，大阪教育大学教職大学院生 1 名

オンラインツール：シスコ Webex

タイムテーブル：

- 16:00 オープニング
- 16:03 日本 WHO 協会 中村安秀理事長挨拶
- 16:06 講義 琉球大学医学部 小林潤教授
- 16:30 質疑応答
- 17:00 ディスカッション
- 17:55 クロージング，終了

内容：

・講義（小林潤教授）

コロナのような感染症に適切に対応するためには、スペイン風邪や SARS のようなパンデミックの歴史を学び、正しい情報を手に入れることが重要である。日本で起こったハンセン病のような空気感染しない病気であっても、間違った情報から隔離され、差別等を生む可能性もある。現在は、コロナの間違った情報を流してしまっている国はコロナの感染を効果的に抑えることができていない。SARS のようなパン

デミックを経験した中国、台湾、韓国などは今回の感染防止対策が機能しており、AI を含むテクノロジーをうまく利用している台湾のコロナ対応は世界で高く評価されている。

・質疑応答

台湾では SARS の経験から、ベトナムと協力し AI 技術を駆使したことが大きな成果を上げている。小林教授が問題視している点は、ハンセン病の時にあったような恥辱差別が起こることであり、同じことがコロナ感染者に対して起こらないようにすべきであるとの見方である。

今後もソーシャルディスタンスのような対応が続く中、いかに新しいテクノロジーを活用するかが求められる。

・プレゼンテーション「緊急事態宣言下の学校生活・私生活」(平野校舎の生徒)

最初の緊急事態宣言下では日本中の学校が閉鎖され、各学校は対応に追われた。オンライン授業については、授業を何度も聴くことができる利点である一方、質問ができない欠点を指摘し、高雄の生徒と共有した。冬になり 2 度目の緊急事態宣言下にあるが、学校は閉校にならず、多くの商業施設も制限はあるものの営業している。緊急事態宣言に国民が慣れてしまっているためか、前回ほどの効果が得られていない。延期されたオリンピックが開かれるかどうか心配している。



・情報交換

日本のオンライン授業や、台湾の追跡システム、マスクの販売箇所を示すアプリなどが話題になった。



ウ) 事後アンケートの結果 (回答: 平野 8 名, 高雄 3 名, 高雄教員 2 名)

Q1. ネット環境について 良好 (23.0%) おおむね良好 (53.8%) 良くなかった (23.0%)

Q2. 1 回目のディスカッションの時間 適切 (76.9%) 長い (23.0%)

Q3. 各話題の満足度 (記述)

<コロナ禍での学校生活とオンライン学習>

- ・ I have learned how it was done in Japan. Hearing the facts from actual students that have experience online learning is really nice. It was fun.
- ・ The students have talked about the problems with online learning, but little has been said about how to improve the effectiveness of online learning.

<緊急事態宣言下での生活>

充実した討論 (53.8%), おおむね満足 (30.7%), もう少し討論したい部分があった (7%), 不十分な討論 (7%)

- ・ I perfectly know what they do when quarantined, and it's really cool, especially

camping in the house!

- The students had an in-depth discussion concerning their lives under quarantine and we did learn a lot about the covid-19 situation in Japan.

<これからの時代に必要とされる職業やサービス>

充実した討論 (30.7%), おおむね満足 (46.1%), もう少し討論したい部分があった (15.3%), 不十分な討論 (7%)

- 職業だけでなく, 必要な能力まで討論できた。
- We discussed this topic to its details and talked about many possible outcomes.
- The students have presented quite a few changes as well as challenges resulting from the pandemic.

<平野校舎の生徒によるプレゼン (緊急事態宣言下の日本の生活について) >

- 充実した内容 (46.1%), おおむね満足 (38.4%), 少し物足りなかった (15.3%)
- 伝えたいことを絞り, 役割を決めて簡潔にまとめることが出来たと感じたから。
- It was very interesting! Some of the things which were mentioned in the presentation were very special. I could never imagine something like that.
- I learned a lot from them. I only get information about other countries from news. Hearing from students who really lived in those environments change my thoughts.
- Their presentation put a lot of photos on it, I can learn their reality life practicality.

<高雄高級中学の生徒によるプレゼン (台湾の感染拡大防止策等について) >

充実した内容 (76.9%), おおむね満足 (23.0%)

- 質問にきっちり回答してくれたので台湾について深く知ることができ, 興味深かった。
- We explained how Taiwan take actions to keep the virus in control. While doing that, I also learned things I didn't know before.
- The presentations were well prepared and informative.

Q6. 今回の2回のワークショップは満足できましたか。

満足した (53.8%), おおむね満足した (38.4%), 少し物足りなかった (7%) .

- 自分たちの考えも多角的になったと感じた上, 英語で議論するという, ことに対しても大きな抵抗を感じることなく, 進められて成長に繋がったと感じた。
- もう少し, 下調べをしてからテーマを決めるべきだったと思う。
- Although sometimes there were technical issues and problems concerning audibility, the overall experience was great. It was a pleasure to meet the Japanese students and understand how things have been going there. Also, I am very glad that I can put my English skills to use in the meeting. I found it hard to find the opportunity for me to truly go all out most of the time, so I am beyond happy to be able to do so in the meeting.
- I have more understood their culture and situation about the coronavirus, like 2 meters social distances and online learning, examination. I also have the after conversation with Japanese partners on IG. We really have a pleasant cooperation!
- This online conference gave students great chance to discuss current issues.

3) 高校生国際ワークショップ(平野ーニュージーランド) ⇒ p 38 参照

B: 池田校舎

1) 高校生ワークショップ(池田ー韓国)

今年度は海外連携校である清州外国語高校に、ユネスコ・スクールとして 2006 年以來、隔年で双方を訪問しあう関係であるサンダン高校も交えた 3 校で国際ワークショップを開催する予定であった。しかし、COVID-19 の影響で来日しての交流が出来なくなったことに加え、清州外国語高校の担当教員が 4 月に休職し、WWL の取組が後任教員に全く引き継がれなかったため、やむなくサンダン高校と 2 校間でのオンラインによる交流を行うことになった。

何度か日程調整を行い、以下の形でオンラインでの交流を実施した。

日 時：令和 2 年 11 月 25 日（水）16:00～17:00

参加者：サンダン高校（日本語／国際交流担当 カン・ソンホ先生，生徒 14 名）

池田校舎（ユネスコ部生徒 10 名，教員 7 名）

内 容：参加生徒双方から自己紹介（日本語・英語・韓国語）

サンダン高校のカン先生が池田校舎との交流のために開設した Google Classroom で、サンダン高校生が作成中の大阪・池田校舎訪問の旅程案等が共有できることの紹介があった。

質疑応答（日本語・英語・韓国語）

双方から自己紹介や自国の文化について伝え合うことを通して相互理解を深めた。本校の生徒たちにとっては、サンダン高校の生徒から思いもよらない質問を受けることで、日本文化について改めて考える機会にもなった。池田校舎の生徒で韓国語を自ら学んでいる生徒が複数おり、相互に英語，韓国語，日本語を駆使した会話をを行い、急速に打ち解けることができた。

今後の予定

- ・今後も Google Classroom 等を活用して、SDGs に関する探究活動の成果や、サンダン高校の生徒たちが取り組んでいる日本（大阪）への旅行計画についての相互発信を継続して、日常的な交流を活発にする。
- 各高校の Google Classroom は利用しづらいことがわかったので、池田校舎で国際交流用の Google のドメインを新たに設定し、交流の促進を図る。
- ・池田校舎から SDGs に関する探究活動の成果物等をサンダン高校に送付する。
 - 1 年生：「グローバル探究」：探究活動の成果をまとめた発表動画
 - 2 年生：「総合探究」：探究活動の成果をまとめた個人レポートの概要（英語）の全員分を収録した冊子
- ユネスコ部：SDGs に関する探究活動をまとめた動画（ビデオレター）



【5】大学との連携プログラム

平野校舎及び池田校舎では、令和3年度より、高度な学びや大学教育先取り履修に向けた授業として「大学アドバンスセミナー」（2年希望者）を開講する。これは、管理機関である大阪教育大学と協働大学である大阪大学や大阪府立大学が両校舎と連携・協働し実施するものである。各講座1単位(高校の単位)が認定される。

来年度開講を予定する下記の授業について、各校舎において本年度実施したものと、実施に向けてカリキュラムや指導体制等を準備したものがある。

大阪教育大学：「教師にまっすぐ」（実施）

大阪大学：「SEEDS プログラム」（実施）、「グローバルヘルス」（実施）、「データサイエンス」（準備）

大阪府立大学：「イノベーションシンキング」（準備）

また、上記の授業以外のプログラムや教員研修も実施したので、併せて報告する。

（a）実施授業

①大阪教育大学「教師にまっすぐ」

目 的 教員を志望する高校生を対象とし、学校教育や教職について詳しく学ぶ。

場 所 大阪教育大学（オンラインの場合は家庭）

参加者 平野校舎4名

指導者 大阪教育大学の教員等

内 容 7月26日（日） 教員養成大学で学ぶ意味や教職について学ぶ。

8月23日（日） 教育や教職に関する大学の授業を選択受講する。

10月4日（日） 今後の英語教育、防災と防災教育、子どもと俳句、プログラミング教育、体と運動等をテーマとした課題研究に取り組み、現代の教育課題について考察する。

10月18日（日） 課題研究の取組を小論文にまとめ、大学生からの指導助言を受ける。

12月26日（土） これまでの学びを総括し、ワークショップ形式で教職について考える。

②大阪大学：「SEEDS プログラム」

目 的 表現することを体系化し、コミュニケーション能力及び文章力を育成する。

目 標 ・論理的に思考したり、多角的な視点でものごとを捉えたりするために、どう考えるべきかを学ぶ。

・コミュニケーションを通して表現力を磨く力を養う。

・自分の考えを分かりやすく相手に伝える能力を養う。

場 所 家庭、各学校、大阪大学等

参加者 池田校舎4名、平野校舎5名、奈良女子大学附属中等教育学校5名、他高校3名

指導者 毎日新聞社 濱弘 明氏，大阪大学大学院理学研究科 寺田健太郎教授
内 容 令和3年3月12日(金)，16日(火)にオンラインで実施。新聞記者による文章力育成の講義や，模擬記者会見，記事作成およびその講評を通じて，おのこの表現力を磨く。

③大阪大学「グローバルヘルス」

目 的 「健康，福祉」(SDGs の目標 3)に関わる現状と課題を，より高度な視点から深く学ぶ。
場 所 平野校舎教室
参加者 平野校舎 10 名 (2 年生)
内 容 大阪大学大学院医学系研究科国際未来医療学講座が大阪大学で開講する授業「健康・医療イノベーション学」のうち下記講義を聴講(ビデオ視聴)する。
・中田 研教授(国際・未来医療学)「健康・医療イノベーション学」のめざすゴール グローバル健康・医療イノベーターになる！
・Ken Suzuki 教授(Queen Mary University of London)「英国における医学教育と医療：再生医療研究の現場から」
・金田安史教授(分子治療学講座遺伝子治療学)「遺伝子治療とゲノム編集～課題と展望～」
・渡瀬淳一郎医師(大阪赤十字病院)「国際医療支援の実際―活動地やフェーズによる多様性について」
・南谷かおり医師(国際・未来医療学)「地域中核病院における国際医療の現状と課題」
・中谷比呂樹教授(国際・未来医療学)「国際・未来共生社会に向けての課題と保健分野からの取り組み」
・Virgil HAWKINS 教授(国際公共政策研究科)「途上国や紛争地域における医療の現状をグローバルな視点から捉え、考える」
・嶋津岳士教授(救急医学 高度救命救急センター)「救急医療と社会・救急医療の役割、脳死と臓器移植」

(b) 実施プログラム

①大阪大学「アカデミック・ライティング講習」(池田校舎)

本事業の対象である1年生グローバル探究Ⅰ(2年次のグローバル探究Ⅱ)の先行実施として，2年生の「総合的な探究の時間」を対象に，大阪大学との連携プログラム「アカデミック・ライティング講習」を実施した。2年生の「総合的な探究の時間」は毎週火曜日の6・7限に設定されており，SDGs(持続可能な開発目標)の17の目標からテーマを選んで探究活動を行い，その成果を年度末にレポートにまとめるものである。

大阪大学では初年度教育として「アカデミック・ライティング」の講習が実施さ

れ、教材（『阪大生のためのアカデミック・ライティング入門』）は冊子として刊行、および Web 上で公開されている。大阪大学の「アカデミック・ライティング講習」を池田校舎の生徒向けにアレンジして実施されたのが、本講習である。

講師に大阪大学全学教育推進機構の堀一成教授と坂尻彰宏教授を迎え、10 月と 12 月に計 4 回（各 50 分）実施した。また、本講習の目標は、レポート作成に向けて、答えのない課題の設定や論拠としての情報収集、アウトプットのまとめ方（ポスターやレポート）等の指導に関して、大学の初年度教育担当の教員から直接指導協力を得ることで、生徒自身のスキルの向上だけでなく、高校教員の指導力向上にもつなげることである。

各回の内容は、次表の通りである。

計 4 回の講習を経て、生徒たちは本発表（ポスター形式）とレポートに各自の探究の成果をまとめた。受講前に提出したブックレポートなどからは飛躍的な伸びを見せた。今年度は感染症拡大の休校措置等のスケジュール変更により、年度当初にこの講習を組み込めなかったが、次年度は年間計画の早い段階でこの講習を設定したい。

第 1 回	10月 6日（火） 6限（1・2組） 7限（3・4組） 講師：堀 一成先生 ※講習の裏では“TOK”（「知の理論」）やデータサイエンスにまつわる講義を実施。	・アカデミック・ライティングとはなにか ・なぜアカデミック・ライティングをするか ・「問い」「答え」「論拠」の説明 ・自慢を考えるワーク ・論拠の吟味についての説明 ・論拠練習問題を考える ・アカデミック・ライティングのだんどり
第 2 回	10月13日（火） 6限（3・4組） 7限（1・2組） 講師：堀 一成先生 ※講習の裏では“TOK”（「知の理論」）やデータサイエンスにまつわる講義を実施。	・授業開始・前の時間からの接続 ・生徒持参書籍交換内容チェックワーク ・アカデミック・リーディングとはなにか ・アカデミック・リーディングの段階 ・速読・多読のためのスキル説明 ・構造読みのためのスキル説明 ・キリン論文速読実習 ・キリン論文構造読み実習 ・キリン論文構造読み確認（ペアワーク）
第 3 回	12月15日（火） 6限 3組（坂尻 彰宏 先生） 4組（堀 一成 先生） 7限 1組（坂尻 彰宏 先生） 2組（堀 一成 先生）	・パラグラフライティングとは？説明 ・パラグラフライティングとは？説明 ・「問い」と「答え」を書き出す ・トピックセンテンスを書いて検証する ・1パラグラフ文作成 ・パラグラフ確認（ペアワーク）
第 4 回	12月 22日（火） 6限 3組（坂尻 彰宏 先生） 4組（堀 一成 先生） 7限 2組（坂尻 彰宏 先生） 1組（堀 一成 先生）	・レポート作成のチェックポイントの説明 ・ダメレポートを読む（個人ワーク） ・ダメレポートのよくないところを書き出す（グループワーク） ・書き出したものの鑑賞・評価（グループごとに代表者にポイントを話させるか、講師がまわって書き出したものについてコメントする） ・よくないところを講師が解説



②大阪府立大学「第6回高校生企業家教育講座」(平野校舎)

イノベティブな見方・考え方を育成することを目的として、大阪府立大学が主催し、大阪府、日本政策金融公庫、ヤフー(株)、日本取引所グループ(JPX)等が共催する「高校生起業家教育講座」に4名が参加した。

本講座には第1回から毎年2~6名(本年度を含み計23名)が参加しているが、本年度は、受講内容を参加者以外の生徒も共有できるように、「グローバル探究プラス」(p44参照)の時間に、受講者が他の生徒に発表し一緒に課題を考察するようにした。

受講日及び内容

○令和2年8月1日(土)~10日(月)

下の講座を全て受講し(本年度オンライン)自分の考えやビジネスアイデアをまとめる。

- ・「新しい生活様式」にイノベーションを起こせ!
- ・FinTech(フィンテック)で未来の“価値”を創造しよう
- ・SDGs達成をめざす成長企業を発掘し、最強のポートフォリオを作ろう!
- ・AI/5G/IoTなど先進技術を活用したビジネスモデルを考えよう!
- ・メガトレンドからITビジネスアイデアを考えてみよう

○令和2年8月14日(金)

5~6人構成のグループに分かれ、上記の各テーマについて各自のビジネスアイデアや考えを基にディスカッションしながら、一つのビジネスアイデアにまとめ、プレゼンテーションする(Zoomでのグループディスカッション)。

③大阪府立大学「SDG s 地域連携学びあい」(池田校舎)

大阪府立大学及び大阪・関西ユネスコスクール(ASPnet)ネットワーク主催のSDG s 地域連携学びあい「小さな成果の大きな連携」に、本校1年生の2グループ(8名)が「グローバル探究Ⅰ」で探究した成果を発表した。参加者及び参加団体は関西圏(大阪府、奈良県、京都府、兵庫県)からの参加で、対面またはZOOMによるオンライン参加のハイブリッド形式で行われた。

- ・主 催 大阪府立大学現代システム科学域／人間社会システム科学研究科
大阪・関西ユネスコ・スクール(ASPnet)ネットワーク
- ・日 時 2021年1月24日(日) 9時45分～16時10分
- ・会 場 大阪府立大学 I-site なんば
- ・発表者及び発表団体
 1. 大阪府立大学環境システム科学域 大塚教授
 2. コニカミノルタ株式会社
 3. 富山国際大学付属高等学校 (Zoom 発表)
 4. 神戸市立大沢中学校
 5. 京都嵐山自治会
 6. 奈良県立国際高等学校
 7. 堺市環境局環境都市推進部環境政策課
 8. 箕面こどもの森学園小中学生
 9. 大阪府立大学環境システム科学域 藤田教授
 10. 兵庫県立川西明峰高等学校
 11. 大阪府立大学生／名鉄観光株式会社 合同
 12. 大阪教育大学附属高等学校池田校舎
- ・内 容



小学生、中学生、高校生が持続可能性の課題や取組を発表するだけでなく、大学教員や企業、自治体、自治会がそれぞれの立場で取り組んでいるSDG sに関する研究や取組を発表しあった。発表会を通して、各機関、地域、立場、世代を超えて「持続可能な社会の面的、立体的なアプローチ」を知り、その後のディスカッションを通してお互いの理解を深め、俯瞰的に「知」の共有を行うことができた。小学生が発表した内容、『日常の「当たり前」が持続可能性を阻害する要因になる』の視点が高校生に響く、本校生が発表した「伊丹空港農村都市計画」に小学生や大学の先生が興味を示す、あるいは大学の研究テーマと生徒の探究テーマに共通点があるなど、お互いに新たな視点の獲得や連携の継続にも発展する学びあいとなった。

(c) 教員研修

大阪大学「アカデミック・ライティング研修」(池田校舎)

- ・ 目的 探究活動の指導の充実に向けて、レポート添削や評価について、高校現場に即した指導が行えるよう、高校教員の探究活動の指導力向上を図る。
- ・ 日時 2021年3月5日(金) 14:00~15:30
- ・ 場所 附属高等学校池田校舎 国際教育センター2階 さつきホール
- ・ 講師 大阪大学全学教育推進機構 堀 一成教授, 坂尻 彰宏教授
- ・ 対象 附属高等学校池田校舎教員 (25名参加)
- ・ 内容 講師からの説明パート (30分程度)

ピアワークパート (30分程度): 実際の生徒の報告書を使って

ディスカッションパート (30分程度)

※ライティング指導について、今後複数の教員で添削していくことについて、考える機会になった。特に、同じ生徒のレポートに対して、教員によって評価が分かれることがあった。これは評価の判断基準が統一できていないということで、現時点では仕方ないかもしれないが、探究学習に学校全体で取り組んでいく上で、重要な課題であることが確認できた。



【6】その他

①多文化理解講座

概要：大阪教育大学に留学中の教員研修留学生が本校を訪れ、1年生全員（3クラス）を対象に実施した。教員研修留学生は自国で教員をしており、様々な科目を担当している。当日の交流会では、少人数のグループで交流を行ったことと研修留学生の円滑な進行により、どのグループも活発にやりとりをしていた。生徒へのアンケートから、76%の生徒が積極的に交流に参加でき、97%の生徒が交流を通して外国に興味を持てたと回答した。この活動の成果は、実際に英語を使って外国の方々と交流することにより、英語学習の重要性や楽しさ、また、将来に繋がる英語学習の意欲向上につながったことである。

日時：令和2年11月28日（土）

学年：平野校舎1年生全員（3クラス）50分授業×3回

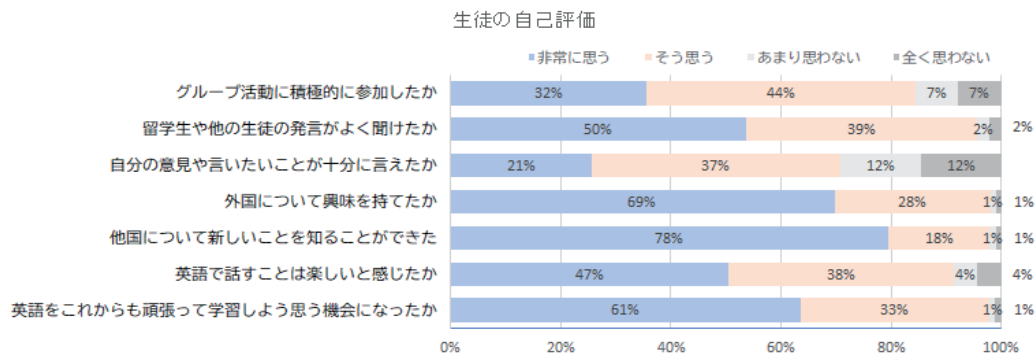
参加者：教員研修留学生（6名）

担当：大阪教育大学グローバルセンター 中山あおい教授、平野校舎 福好教諭

内容：自国の社会や文化紹介、学校生活についてのディスカッション

	内 容	時間
グループでの話し合い（1回目）	①生徒6, 7名+留学生1人のグループ（6グループ）に分かれ各グループで自己紹介（留学生から自己紹介を始める）	5分
	② 留学生の自国の文化紹介（写真・PC使用）	5分
	③ ディスカッション1「お互いの国のイメージについて」	5分
移動	留学生が隣／別のグループへ移動	3分
グループでの話し合い（2回目）	① 各グループで自己紹介（留学生から自己紹介を始める）	5分
	② 留学生の自国の文化紹介（写真・PC使用）	5分
	③ ディスカッション2「学生生活について」 各グループで日本と海外の学生生活について話す 「共通点」「相違点」「良い点」をA3用紙にまとめる → 発表（1つのグループで2名程度が発表）	22分

生徒対象事後アンケートの結果



感想：

- ・英語だけの環境にいと、よく聞き取れていくような実感が湧き始めた。将来、大学生になったら留学をしてみたいと思うようになった。英語が苦手なので得意になりたい。
- ・留学生の先生方は、出身国によって同じ英語でも少し違っていることに気づいた。国ごとに文化が全く違うことも一人一人の目線から聞くことができてよかった。
- ・様々な国の文化の違いを知ることができ楽しかった。国によって少しずつ発音が違って、途中聞き取りにくい言葉もあったが、言葉だけでなく、ジェスチャーや声のトーンなど、伝えようとする気持ちが大切だと思った。



②アジア高校生架け橋プロジェクト

令和2年度は、本プロジェクトにより来日した2名の留学生を、平野校舎の第1学年及び第2学年で受け入れた。本年度は海外研修が中止となり、学校外で外国人と一緒に活動する機会がほとんどなかったため、留学生と一緒に教科（グローバル探究や生命倫理等も含む）、学校行事、部活動に参加することは双方にとって貴重な機会となった。来年度も受け入れて一緒に学習する予定である。

期間：令和2年11月下旬～令和3年3月中旬

出身国：ラオス、モンゴル

③ランチタイムチャット

A：平野校舎

概要：Zoomを利用して、大阪教育大学柏原キャンパスと平野校舎をつなぎ、大阪教育大学の教員研修留学生と高校生が英語で意見交換等を行う。

目的：多様な英語に触れる機会を提供し、英語力、多文化理解力等の向上を図る。

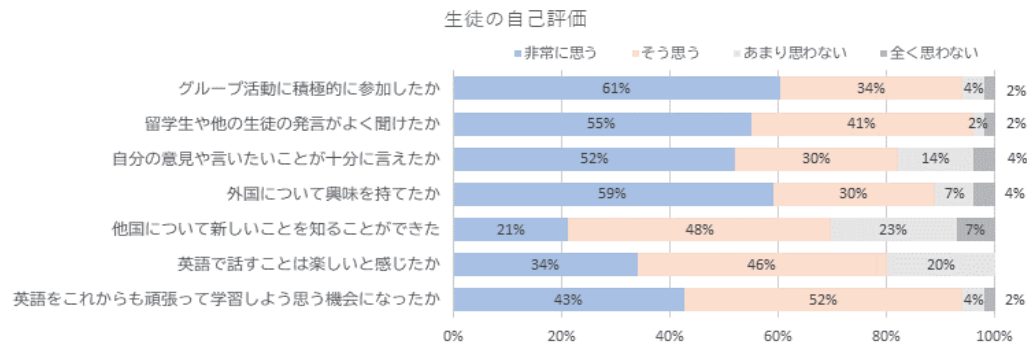
日時：平日 12:50～13:15

対象生徒：1,2年生希望者。合計78名が参加を希望した。

講師：研修教員留学生

実施形態：毎日、講師1名に対して生徒4～5名が一緒になって話し合う。

生徒対象事後アンケートの結果



感想：

- ・自分の伝えたいことを言葉にすることが難しかった。しかし、頑張って言った言葉に対して返事していただいた時はとても嬉しかった。もっと英語を上手に話せるようになり、いろいろな国の人と話してみたいと思う。
- ・とても楽しくて良い時間であった。外国に興味を持つことができたと同時に、もっと外国の人と触れ合う機会が欲しいと感じた。
- ・初めてアフリカの方と話することができてとても楽しかった。ただ、自分の言いたいことが言えず、語彙力がないことが悔しかった。もっといろいろな国の方の英語を聞いてみたい。



B：池田校舎

池田校舎では、12月から1月の2ヶ月間、9名の生徒が週に3回程度ランチタイムチャットを行った。

・実施日及び参加人数

12月11日（3名）、12月17日（6名）、12月21日（9名）、
12月22日（9名）、1月12日（9名）、1月14日（3名）、
1月18日（9名）、1月19日（6名）、1月21日（3名）、
1月25日（3名）、1月26日（2名）、1月28日（1名）

・成果

英語力のある生徒が聞き取りのうまくできなかった生徒をサポートし、相互に協力し合う力を身につけることができた。海外の人に日本文化について伝える必要性から、日本文化について理解を深める機会となった。

・課題

25分間という限られた時間であるため、参加人数が多くなると、意見の交換をする時間が十分に持てない。可能であれば、より長時間のチャットの機会を持ちたい。

④グローバル体験プログラム

概要：大阪府が企画する実践的英語体験活動推進事業の一環であり、ECC 国際外語専門学校が主体となり、中学3年生と高校生を対象に実際に英語を使用する環境をつくり出し、体験しながら楽しく英語でのやりとりを経験するものである。

日時：令和3年2月20日（土）14:00-16:20

参加生徒：第1学年15人 第2学年3人 合計18人

内容：本年度は、本プログラムのEコースを受講した。Eコースは「英語で異文化発見」を目的とし、グループごとに海外の文化や名所を選び、対話式のロールプレイを使って紹介した。留学生と共に完成させたロールプレイは、映像合成技術を使用した作品として仕上げた。

感想：

- ・英語だけでなく他の言語も学んでみたいと思った。たくさんの人と話すことで選択肢を広げていきたい。
- ・外国の方と英語を用いて話すことは楽しいと思った。こんな機会をもっと活用し、英語で海外の人ともっと会話してみたい。

⑤文部科学省主催「高校生フォーラム」

主 催：文部科学省、国立大学法人筑波大学

日 時：令和2年12月20日（日）13:00-16:00

参加者：平野校舎1年生4名、池田校舎1年生4名

内 容：事前に英語でのポスター発表の映像データを送付。当日は、開会式、生徒交流会、総会（各賞発表・動画紹介）、講評、総評、閉会式が行われた。

A 平野校舎

ポスター発表の内容：

（研究題目）「フードロス！食べられるのに捨てられてしまう規格外農作物を買う機会を増やそう。」

Food-Loss! Suggesting a new solution for non-standard vegetables”

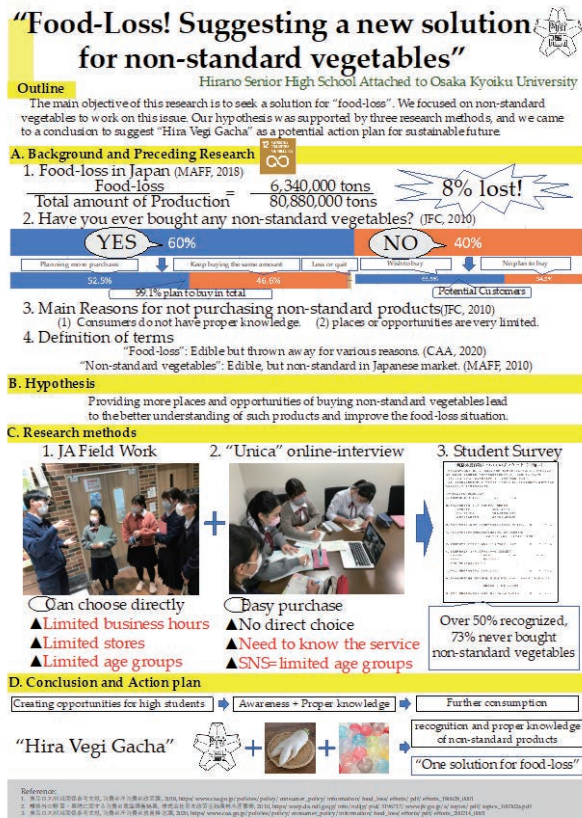
（研究概要）

生活に欠かせない「食」について考察する中で、様々な要因で食品が廃棄されている現状を知った。「持続可能な食料の確保」の手段として、食べられるのに廃棄されている「規格外農作物」に注目した。先行研究から「規格外農作物の販売場所を増やすと、それに対する知識や認知度が向上し、結果、食品ロスの改善につながるのではないか」という仮説を立てた。

規格外農作物を購入場所として、スーパーの他に農産物直売所が大きな割合を占めていたので、地元、平野で、JAが運営する直売店で聞き取り調査を実施した。現物を手に取れることがメリットである反面、営業時間が短い、店舗が少ないこと、課題として、若い世代の客が少ないことがデメリットとして挙げられた。さらに、インターネット販売について、規格外農作物を専



門的に販売している“unica”にオンラインでインタビューを実施した。インターネットを利用するメリットは、いつでもどこでも購入できる点、デメリットは、実物を見ることができない点とそのサービスを知らない点と利用できない点、利用者層の年齢の偏り等も課題であることがわかった。以上から、対面販売による正しい知識の提供と規格外農作物の消費量増加が必要と考えた。アクションプランは「平ベジガチャ」の提案で、規格外野菜を若い世代に販売するプランである。農家と協力し、旬の規格外農作物の詰め合わせを作り、購入しやすい時間の設定や値段設定などの準備が必要だが、このシステムが広がること、SDGsに挙げられるような食品ロスの問題へ持続的に取り組むことができる。



B 池田校舎

ポスター発表の内容

(研究題目) 水質浄化は本当に海洋環境問題の解決になるのか

Is the water purification really a solution to marine environmental problems?

(研究概要)

牡蠣の漁獲高が減っていることと、海中のリンの減少の相関関係に着目した。すなわち、水を綺麗にしすぎることによって不利益もあると考えたのである。そして、現在の下水处理場の44%を止めれば適切なリン濃度を保てることを主張した。

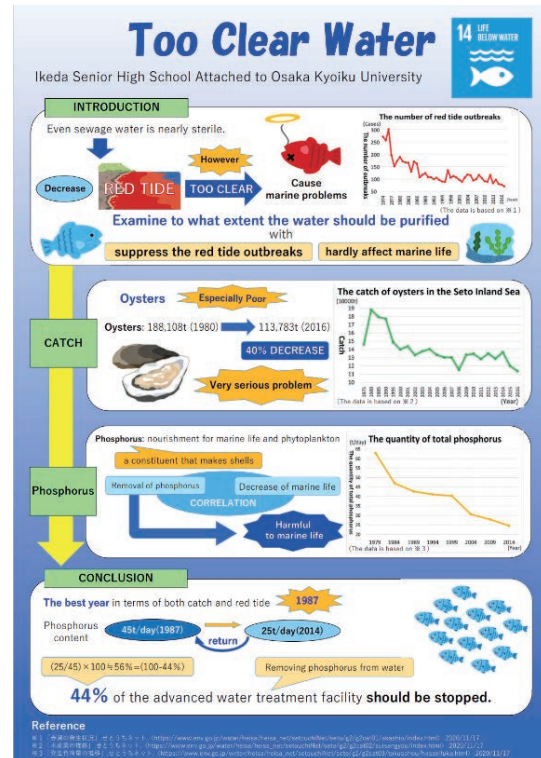
入賞は逃したが、他校生徒から「牡蠣の収穫量減少をトレードオフとしてとらえ、1987年のリン濃度を最適値として示す方法は合理性がある」「大変優れた発表だった」と高評価を得た。

参加生徒からは、「英語の専門用語には苦労したが、『高校生フォーラム』という目標があることで、意欲が高まった。また、他校の発表を聞いて、身近でプロジェクトしやすいテーマ設定をすることで、探究が深まることを実感した。2年では、テーマ設定から計画的に取り組みたい。」という感想があった。



生徒の発表の様子や感想から判断すると、目的・目標を達成できたと言っているだろう。同様にSDGs等のテーマに取り組む、高い意識を持つ生徒との交流は刺激的なものであったと推測される。

今回、参加生徒たちは交流会の中で、他校の生徒から出た「このテーマについて、自ら行動できるプロジェクトは何か」の質問に「ない」と答えるしか無かったという。高校生にとって、SDGs達成を自分事としてとらえることは難しい。しかし、そうした視点こそが重要であることを、身をもって学んだことだろう。こうした視点を持つ生徒がグローバル探究Ⅱにおいて、ほかの生徒たちを牽引していく存在となってくれることを期待している。



⑥探究甲子園

平野校舎の2年生1名が、3月21日(日)に完全オンライン形式で実施される「文部科学省WWLコンソーシアム構築支援事業〔WWL・SGH×探究甲子園2021〕～SDGsの実現を目指して～」(関西学院大学主催)のグループディスカッション〈テーマ2:日本の少子化における課題と解決策〉に出場する。

⑦平野校舎主催「課題研究教員研修会」

日時：令和2年11月21日（土）10:30～12:45

開催方法：オンライン（Zoom）による開催

参加者：42人

発表内容：

（1）課題研究の指導について

本年度2年生に対して実施してきた昨年度及び本年度の課題研究の授業について、担当教員が発表した。発表資料は以下参照。

探究学習の指導 ～48期生 課題研究～

2020/11/21
大阪教育大学附属高等学校平野校舎
近藤真之

「いのち」について考える

1年次	2年次
・課題研究のイントロダクション ・大阪の課題研究 【格差問題、食料問題、防災減災】	・海外（東南アジア）の課題研究 【格差問題、食料問題、防災減災】 ・「いのち」の論文（～3年次）

前年度の反省を踏まえて

前年度：アクションプランのスケールが大きすぎた
（～制度の導入、市へ提案 等）

48期生：アクションプランの実施を目標
⇒社会課題を学び、課題へのアプローチを考える
＝課題研究＝社会貢献

1年次活動

1学期			2学期			3学期		
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
探究学習の導入	探究学習の導入	探究学習の導入	探究学習の導入	探究学習の導入	探究学習の導入	探究学習の導入	探究学習の導入	探究学習の導入

チームビルディング

- ・キーワード：ダイバーシティ（多様性）
コンセンサス（合意形成）
- ・多様性に基づき、合意形成を行う
⇒「1+1=2+a」となるチーム作り
- ・活動：Dixit・NASAゲーム

DIXIT

- ・1枚のカードにも多様な見え方があることに気づく
- ・多様性（ダイバーシティ）

詳細は平野メソッド「探究学習の指導」参照

NASAゲーム

- ・宇宙で生き残るために必要なアイテム
- ・多数決や一人の意見で決まらない話し合いによるコンセンサス（合意形成）

⇒「個人の力」と「チームの力」

詳細は平野メソッド「探究学習の指導」参照

「いのち」の写真集

- ・本校教員が提供した、「いのち」を感じる写真集
- ・多面的に「いのち」を考える
- ・自分の考える「いのち」
⇒「いのち」の写真QFTへ

「いのち」の写真集と問いつくり

- ・QFT（Question Formulation Technique）
- ・「焦点」（＝写真）に対する問いつくり
⇒「同じ問い」と「問いの異なる」の変換
問いつくりの分け分け、変換
＝問いの決定
- より深い気づきや理解へとつながる

詳細は平野メソッド「探究学習の指導」参照

大阪の課題発見ワーク

- ・大阪の課題点、問題点、イメージを書き出す
⇒3つ選び、「焦点」としてQFT
⇒Qに対する答えを調べる（HW）
- ・研究領域決定「医療・保健」「防災・減災」「格差・貧困」
- ・課題設定へ

研究ミニマムリスト

- ・研究に最低限必要な要素をリスト化

タイトル	主題	方法	対象
目的（研究意義）	問題提起	結果	結果
意義	考察	考察	考察
仮説	まとめ	結論	エビデンス

SDG課題発見シート

情報収集・分析・考察

- ・先行研究・統計データ等の調べ方
- ・調査手法（アンケート調査や対面調査）
- ・仮説の検証にはどんな根拠が必要か（ロジックワーク）

発表機会

- ・領域内発表・2学年発表（見学）・1学年発表・最終発表会
- ・ポイント
①短期的な目標設定
②研究内容の整理
③批判的思考力の育成

魅力的なポスターづくりの支援

- ・手書きポスター
P Cスキルに左右されないレイアウト
⇒pptスライド上で作成
- ・作成マニュアル
フォントなど各種情報

総括

- ・チームの振り返り
- ・個人の振り返り
- ・研究レポート

2年次へむけて

- ・日本との関係「Think Globally, Act Locally」
- ・1年次の研究の発展
- ・先輩の研究の引継
- ・タイ調べ学習・カンボジア研修報告会・異学年交流会
⇒自分の興味関心を探す
⇒研究領域・題を早めに決定

2年次課題研究

- ・1年次の経験を活かす
- ・スポットで指導を入れる（例）
・ロジックツリー
・ポスター構成（ポスターコード・ペン入れ）
・発表（計4回）

ロジックワーク

- ・1年次には三角ロジック（右）
⇒根拠や論理の指導
・逆引きロジックツリー（右）
⇒逆引きロジックツリー（右）
- ・論理的思考の磨き
⇒要素分解

ロジックツリー

- ・課題の設定に問題（例）食料廃棄の問題
⇒要素分解ツリー
- whyツリー：原因追究
Howツリー：アクションプラン設定

引用：GlobeEdu Inspiring global school

魅力的なポスターづくりの支援

- ・手書きポスター
P Cスキルに左右されないレイアウト
⇒pptスライド上で作成
- ・作成マニュアル
フォントなど各種情報

ペン入れ指導

- ・キーワード毎に色分け
- ・一貫性やレイアウトの確認
- ・「図表」「子ども食堂」
⇒貫して意図
・改訂余地
⇒中央の情報整理

ペン入れ指導例②

- ・「住み分け」
⇒言葉なし・説明不足
- ・「インフルエンザ」は言葉のみ
⇒本研究の関与性が不明確
- ・「消費エネルギー」
⇒貫して意図されている

まとめ

- ・チーム作り
ダイバーシティ（多様性）とコンセンサス（合意形成）
- ・生徒の意欲（ゴールの明示と社会貢献）
社会のつながりと、自分たちの未来・役割への意識向上
- ・自分たちで考えることができる指導（平野メソッド）
- ・発表の機会（プレッシャー・目標）
- ・振り返り（自己評価・次の成長）

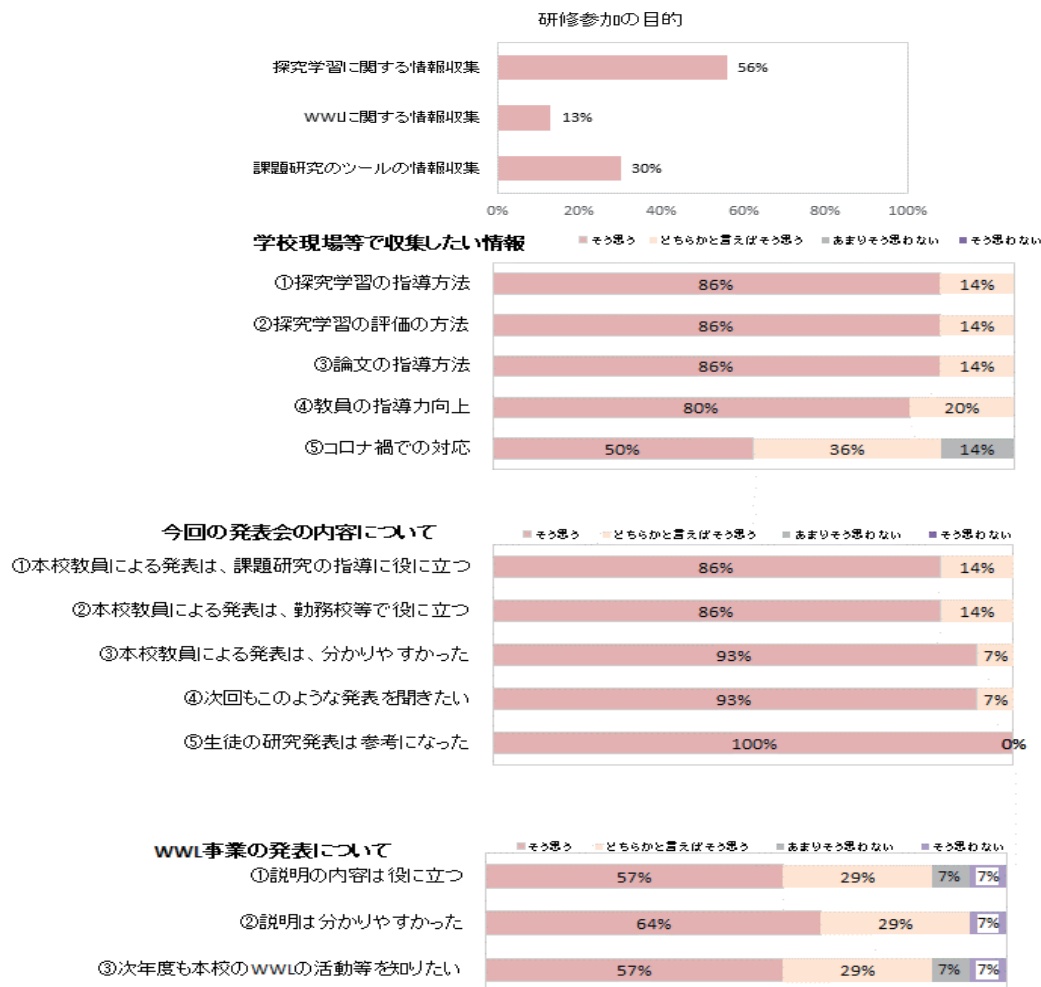
上記の指導のアウトカムとして、生徒の課題研究をビデオオンデマンドで発表した。
「フードロス ～食べられるのに捨てられてしまう 規格外農作物の購入機会拡充～」(1年)
「消滅言語を守る ～ブータン王国におけるゾンカ語の普及に向けて～」(2年)
「教室を避難所へと大変身 ～柔軟な避難所づくりで不安とストレスを軽減!～」(2年)

(3) WWL事業について

The collage consists of numerous overlapping documents and posters. The most prominent ones include:

- Top Left:** A document titled "令和2年度 課題研究研修会" (Research Symposium for FY2020) from Osaka University of Education, featuring a section on "WWL事業について" (About WWL Projects).
- Top Center:** A poster titled "Society 5.0 に向けた生涯と教育のための「学びの共同体」の構築" (Building a 'Community of Learning' for Life-long Learning and Education towards Society 5.0), focusing on "イノベティブなグローバル人材育成システムの開発" (Development of Innovative Global Human Resource Development Systems).
- Top Right:** A poster titled "大阪教育大学" (Osaka University of Education) with a focus on "国際化推進" (Internationalization Promotion) and "英語力向上" (Improvement of English Proficiency).
- Middle Left:** A document titled "国内連携校" (Domestic Exchange Schools) listing various partner schools and their collaboration programs.
- Middle Center:** A document titled "海外連携校・連携大学" (Overseas Exchange Schools and Partner Universities) listing international partners and their programs.
- Middle Right:** A document titled "大阪教育大学" (Osaka University of Education) with a focus on "国内連携大学" (Domestic Exchange Universities) and "英語力向上" (Improvement of English Proficiency).
- Bottom Left:** A document titled "大学・大学院における授業展開" (Curriculum Development in Universities and Graduate Schools) listing various programs and their implementation.
- Bottom Center:** A document titled "プラットフォーム (Cisco Webex Teams) の活用" (Utilization of Platform (Cisco Webex Teams)), showing a screenshot of the Webex interface.
- Bottom Right:** A document titled "評価指標の作成" (Creation of Evaluation Indicators) listing various indicators and their measurement methods.

(4) 参加者対象のアンケート結果



記述による意見

- ・昨年度も課題研究発表会に参加したのですが、昨年度の学年の取り組みとは異なる点があり、「平野メソッド」が学年によってアレンジされていることがよくわかりました。目の前の生徒に合わせて、また担当する教員の個性に合わせてアレンジできる形になっているのは良いツールだと思います。
- ・勤務校で探究学習を進めていくにあたって指針となりました。生徒さんの発表も見ることができ、研究のプロセスから発表まで勉強させていただきました。
- ・WWL事業の中身がよくわかりました。勤務校はWWL拠点校・連携校ではないので、今後本校の取り組みにどう活かせるのかと思いながらうかがっておりました。
- ・WWL拠点校はSGHに比べると数が少ないので、どのように取り組みに広がりを持たせられるか、一部の学校の取り組みで終わらないようにするかという部分に期待しております。
- ・課題研究（探究活動）の指導に関する教員研修の方法を教えてくださいたいです。
- ・初期のころの「課題研究」をブラッシュアップしていく過程を知りたいです。

2 附属学校間ネットワーク

(1) 会議記録

①第1回 日時 令和2年9月30日 10:00～12:30 Zoom 会議

1, 参加者

大阪教育大学	佐藤賢司平野校舎主任
大阪教育大学附属高等学校平野校舎	堀川理介副校長
大阪教育大学附属高等学校池田校舎	筒井和幸副校長
大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎	井上広文副校長
京都教育大学附属高等学校	岡本幹副校長
奈良女子大学附属中等教育学校	吉田隆副校長
神戸大学附属中等教育学校	齋木俊城副校長

2, 内容

1) 自己紹介

2) 文科省に提出したビジュアル資料（ポンチ絵）による事業説明

3) 本会の趣旨説明

「課題研究」「国際共同研究」等に関する連携校の研究会を実施し、種々のプログラムの共有化等を図る。課題研究の評価、実施、国際共同研究等の探究活動を進める上での課題となっている項目について、各附属高校での経験をもちより、課題解決のための研究を行い、生徒の多様な興味・関心に対応する学習機会・教育実践の開発に取り組むとともに、成果の連携校への普及を図ることを目指す。

4) 検討内容

○各校から「課題研究」および「海外交流」の現状を報告しあい共有した。

○今後の検討事項（下記）を確認し、合意した。

- ・各校における、「課題研究」「国際共同研究」等の実績の交流・情報交換。
- ・各校における、「課題研究」等の指導プログラム、指導メソッドの情報交換。
- ・各校の教員交流研修会の実施
- ・高校生による課題研究発表会等の相互参加
- ・連携校間の高校生の研究交流の実施（インターネット上での成果物の共有等）
- ・連携校間の、課題研究指導の相互協力体制の可能性の検討
- ・高校生国際会議等の連携実施体制の構築

○今後の進め方

- ・各校の課題研究やその成果発表会、海外交流について記入シートを送付。各校の現状や課題等を共有しあい、さらに担当教員も加えた会議をスタートさせる。

②第2回 日時 令和2年11月9日 16:00～17:30 Zoom 会議（*当日欠）

1, 参加者

大阪教育大学	佐藤賢司平野校舎主任*
--------	-------------

大阪教育大学附属高等学校平野校舎	堀川理介副校長，松田雅彦主幹教諭
大阪教育大学附属高等学校池田校舎	筒井和幸副校長，森大光教諭
大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎	井上広文副校長 森中敏行教諭*
大阪教育大学附属特別支援学校	北室聖史副校長*
京都教育大学附属高等学校	岡本幹副校長*，古川豊主幹教諭，境倫代教諭
奈良女子大学附属中等教育学校	吉田隆副校長，神徳圭二教諭
神戸大学附属中等教育学校	齋木俊城副校長，増見敦教諭

2，内容

1) WWLで取り組みたいこと

○近畿附属校での連携

「課題研究」「国際共同研究」等に関する連携校の研究会を開催し，種々のプログラムを共有して，生徒の多様な興味・関心に対応する学習機会・教育実践の開発に取り組む。

○高校生国際会議の開催

- ・WWL 事業では，令和3年度・令和4年度に，国内・海外の連携校の生徒が参加する高校生国際会議を大阪で開催予定。並行して教員の会議も開催予定。
- ・日程・日数・プログラムは今後検討，SDGsに関わるテーマを掲げる予定。

2) 具体的な連携内容

○「課題研究発表会」等への相互招待

○「高校生国際会議」への生徒の「参加」と「運営」

- ・期間中の企画や当日の運営などを行う，6校の生徒による運営組織をつくる。
- ・各校の海外協定校等の参加も可能（WWL 連携校への新規加入も可能）。

○教員同士の「課題研究」「海外校との交流・国際共同研究」等の情報交換

3) 意見

附属校らしい研究であるべき。何について研究するのが重要。

（2）開催事業【近畿国立大学附属学校「課題研究合同発表会」】

1，日時 令和3年3月20日（土） 9時20分～12時20分

2，場所 大阪教育大学附属高校天王寺校舎

3，内容 9:20 ～ 開会

9:30 ～ 口頭発表 各校1グループ（発表時間10分、質疑応答10分）

1) 大阪教育大学附属高等学校平野校舎 4) 京都教育大学附属高校

2) 奈良女子大学附属中等教育学校 5) 大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

3) 大阪教育大学附属高等学校池田校舎 6) 神戸大学附属中等教育学校

11:40 ～ 講評（大学教員他）

11:55 ～ 各校の特色ある学校行事や課題研究の紹介

12:20 解散

3 管理機関における取組

(1) 学部生対象の教養基礎科目『探究型学習の実践と研究』の新設

①経緯

WWL事業のテーマである「学びの共同体の構築」の主体の一部には、未来の教員である学部生や大学院生も含まれている。教員養成系単科大学である本学の特性を生かし、附属高等学校で展開されている探究型学習の実践について学ぶ学部生対象の教養基礎科目『探究型学習の実践と研究』（2単位）を新設した。

②授業の到達目標

探究型学習の先行的実践例を通して、その方法を理解し、思考力、判断力、表現力を養ううえで類似する学習方法との違いと有用性を探究する。

③授業の概要

本学附属高等学校副校長らによる講義を通して探究型学習の基本について学んだ後、附属高等学校で行われている実践例を見学し、探究型学習をデザインするために必要な要件をグループ討論等によって考究する。附属高等学校各校舎（天王寺校舎、池田校舎、平野校舎）で行う授業見学を期間内の平日または土曜日に複数回設定するので、いずれかの日に所定の回数見学することが必要となる。また、その成果は授業内で発表する。

④授業の実施

- 第1回 10月6日（火） ガイダンス（授業の目標、日程、意義について）
- 第2回 10月13日（火） 探究型学習の実践と特色① 附属高等学校池田校舎の実践
- 第3回 10月20日（火） 探究型学習の実践と特色② 附属高等学校天王寺校舎の実践
- 第4回 10月27日（火） 探究型学習の実践と特色③ 附属高等学校平野校舎の実践
- 第5回～第12回 探究型学習の実践例の見学
- 第13回 1月12日（火） 学びの振り返り
- 第14回 1月26日（火） 成果発表及び相互評価・講評（オンラインにて実施）
- 第15回 2月2日（火） 最終レポートの作成・提出

⑤授業の振り返り

令和2年度は、新設科目の設置申請が時間割作成に間に合わなかったため、受講生は3名にとどまったが、それが奏功して深い学びが実現したと考える。それぞれに受講に至る動機が明確であり、附属高等学校（天王寺校舎および平野校舎）における探究型学習の授業参観にも意欲的に参加した。

成果発表のプレゼンテーション及びレポートからは、新しく発見できたことや、疑問に思ったことを整理するにとどまらず、受講生自身の高等学校における学びの経験との比較や文献調査による海外事例（アメリカ）との比較などを通して実践例との共通点や相違点

を考察していた。

⑥次年度に向けての課題

令和3年度は、引き続き教養基礎科目として開講するが、大阪教育大学副専攻プログラムの一環として位置付けられることとなった。すなわち、「STEAM教育を中心とした教科横断型教育プログラム」科目の一つに指定された。その結果、次年度は受講希望者の増加が予測されるため、附属高等学校における実践例見学の日程調整や、成果発表の方法等の工夫が課題となる。

（２）附属学校園教員と大学教員との研究交流会における発表（予定）

大阪教育大学では、附属学校園教員と大学教員との連携・交流の促進を目指している。その一環として、令和2年度には「第9回 附属学校園教員と大学教員との研究交流会」を令和3年3月16日（火）にオンライン開催する予定である。

WWL関連の発表は、以下の2件である。

- ① 附属高等学校との協働による学部授業『探究型学習の実践と研究』の展開
(鈴木真由子, 広谷博史, 井上広文, 筒井和幸, 堀川理介)
- ② ワールド・ワイド・ラーニング コンソーシアム構築支援事業 拠点校の取組
(堀川理介, 松田雅彦, 鏑木昌博, 山崎勝載, 熊原真史, 水谷文信, 小西真里奈, 福好功伸)

4 アセスメントグループの取組

(1) アセスメントグループの取組

当グループは、WWL 事業におけるイノベーティブな人材育成の効果についてアセスメントを行い、得られたデータから取組の改善に資することを目指し、また当初認識されていなかった視点を提供する。

(2) 育成する資質・能力・マインドセット

本 WWL 事業における人材育成の目標指標は、次の 8 項目が設定されている。これらの資質能力は『OECD 教育 2030』でも議論され、将来の人材に必要とされている。本事業では、これらの資質能力育成を目標として、「カリキュラム研究開発」が行われ、各取組が実施される。

表① 本事業イノベーティブ人材育成の目標指標

【資質・能力】（『OECD 教育 2030』でも論され、将来の人材に必要とされる）	
a【価値創造力】	新しい価値を創造する力：課題設定・再設定の力，創造的思考力，協働力，適応力，好奇心
b【対立克服力】	対立やジレンマを克服する力：コミュニケーション力，企画立案及び実行力，多文化理解力
c【責任行動力】	責任ある行動をとる力：やりぬく力，ストレスから回復する力，セルフマネジメント力
【心構えや考え方，価値観等のマインドセット】	
d【脱既成概念力】	既存の知識の枠組みに捉われず，自由な発想で柔軟に物事を捉えようとする心構え
e【不偏判断力】	課題に関する，多面的かつ批判的な考え方や偏見の無い価値観
f【主体的解決力】	課題解決に向けた主体的な行動
【探究スキル】には，「データサイエンス」と「文理融合的アプローチ」	
g【データ思考力】	データに基づいて議論することができ，データを活用して課題を解決できる
h【文理融合探究力】	文理融合的アプローチによって，多様な解決方法を発想・試行し，総合的に探究できる

(3) 調査実施

先行事業である SGH 事業では、平野校舎において学習者の変容を、プロジェクト外の取組と比較分析することを視野に入れ、「PROG-H」調査を行ってきた。表②に「PROG-H」調査のジェネリックスキル調査項目、すなわちリテラシー項目、コンピテンシー項目を示す。本 WWL 事業において、これまでの本学および附属学校のデータと、新たな取り組み

による効果とを比較検証可能とするため、引き続き PROG 調査を継続している。平野校舎は令和 2 年 4 月に実施し、池田校舎は令和 3 年 2 月に実施した。

表② PROG-H

PROG-H ジェネリックスキル指標の内容		
【リテラシー構成：4 力】 OECD における能力区分（学力やスキル）		
① 情報収集力		確実な情報を収集するスキル
② 情報分析力		情報から現状を把握するスキル
③ 課題発見力		幅広い視点で現象を捉え、考察し、課題を発見するスキル
④ 構想力		課題解決を実現にむけて計画するスキル
【コンピテンシー構成：9 力】		
対人基礎力	⑤ 親和力	信頼関係を構築する人間性
	⑥ 協働力	課題を協力して取り組む人間性
	⑦ 統率力	建設的な議論を進める人間性
対自己基礎力	⑧ 感情制御力	自己の感情を制御
	⑨ 自信創出力	自信を向上させる人間性
	⑩ 行動持続力	責任感を持ち取り組む人間性
対課題基礎力	⑪ 課題発見力	解決すべき課題を見つけ向き合う人間性
	⑫ 計画立案力	効果的な計画を構築
	⑬ 実践力	自ら行動する人間性

なお、本事業で人材育成目標（表①）と、「PROG-H」調査（表③）はともに OECD のキーコンピテンシーをベースに構築されているため、対応関係を概ね設定できる。本報告において、暫定的な対応関係を表③に記す。しかし、本事業では「イノベティブ人材」の育成に重点があるが、「PROG-H」調査のメインターゲットにはなっていない。そのため本事業においては、特に「イノベティブ人材」評価指標に着目し、研究知見に基づいて、別途調査を実施した。イノベティブ・マインドセット尺度(Tsuzuki & Niigaki, 2014)を今回採用し、対象を平野校舎 1, 2, 3 年生、池田校舎 3 年生(参加任意)として、調査を行った。

また、イノベーションを実現するための基盤的態度として、自己効力感が重視されることから、一般性セルフ・エフィカシー尺度(Sakanao & Tojo, 1986)を採用、調査実施した。対象：平野校舎 3 年生、池田校舎 3 年生(参加任意)

表③ 対応表：WWL 人材育成目標 対 PROG-H ジェネリックススキル項目（暫定）

【資質・能力】		【対応】継続調査(PROG-H)項目・新規調査
a	【価値創造力】	←新規調査「イノベティブ」尺度 比較：PROG⑪⑫
b	【対立克服力】	PROG⑤⑥⑦
c	【責任行動力】	PROG⑦⑧⑨
【心構えや考え方，価値観等のマインドセット】		
d	【脱既成概念力】	PROG⑪
e	【不偏判断力】	PROG⑩
f	【主体的解決力】	←追加調査：自己効力感 比較：コンピテンシー項目 PROG⑨
【探究スキル】には、「データサイエンス」と「文理融合的アプローチ」		
g	【データ思考力】	PROG リテラシー項目：①②
h	【文理融合探究力】	PROG リテラシー項目：③④

表④ イノベティブ・マインドセット尺度

表1 イノベティブ・マインドセット尺度の因子分析結果（Promax 回転後）

項 目 内 容	因子負荷量			
	I	II	III	IV
第一因子「自律的な思考と表現への志向」				
生徒が自分の考えを模索したり，討論したり表現するたくさんの機会があるのが良い	.89	.07	-.08	-.10
生徒に自分自身で答えを見つけるように促す先生は良い先生である	.64	-.10	-.01	.18
生徒は教室で自分の考えを表現する機会をたくさん与えられたほうが良いと思う	.56	.02	.11	-.05
第二因子「深く探究する態度」				
何らかの課題に取り組むときには集中できるほうだ	.00	.68	.09	-.10
注意深く物事を調べることができるほうだ	-.01	.66	-.08	.03
いろいろな物事についてより深く知りたいと思うほうだ	.00	.56	.00	.08
第三因子「変革志向」				
仕事には一つの決まったやり方で臨むのが好きだ (R)	.05	.03	.75	-.03
いつも同じ方法で一貫して仕事をしている人が好きだ (R)	.00	-.11	.59	.04
昔から良いとされているやりかたに従うほうだ (R)	-.04	.11	.42	.05
第四因子「リスクテイキングへの積極性」				
人に反対の意見があるときには率直に言うほうだ	.03	-.13	.01	.61
リスクを取るほうだ	-.02	.05	.02	.47
物事を変えていくことに興味があるほうだ	.02	.25	.01	.47
因子間相関				
	I	II	III	IV
		-.02	.00	.41
			.10	-.07
				-.11

出典：Tsuzuki & Niigaki, 2014

表⑤ 一般性セルフ・エフィカシー尺度

因子	項目 No.	項目内容	因子負荷量
行動の積極性	1	何か仕事をするときは、自信を持ってやるほうである。	.3029
	5	人と比べて心配性なほうである。	-.3217
	6	何かを決めるとき、迷わずに決定するほうである。	.3386
	8	ひっこみじあんなほうだと思う。	-.7079
	10	結果の見通しがつかない仕事でも、積極的にとりくんでゆくほうだと思う。	.3357
	13	どんなことでも積極的にこなすほうである。	.5126
	15	積極的に活動するのは、苦手なほうである。	-.5979
失敗に対する不安	2	過去に犯した失敗や嫌な経験を思いだして、暗い気持ちになることがよくある。	.4819
	4	仕事を終えた後、失敗したと感ずることのほうが多い。	.5962
	7	何かをするとき、うまくゆかないのではないかと不安になることが多い。	.5615
	11	どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれなことがよくある。	.5776
	14	小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである。	.3673
能力の社会的 位置づけ	3	友人より優れた能力がある。	.6450
	9	人より記憶力がよいほうである。	.3979
	12	友人よりも特に優れた知識を持っている分野がある。	.6339
	16	世の中に貢献できる力があると思う。	.3297

出典：Sakanao & Tojo, 1986

(4) 生徒分析

①PROG-H 調査による調査

本事業では、生徒の資質能力の変容を客観的かつ定量的に測定し、比較分析するため、(株)リアセック社および河合塾の PROG-H 調査を行っている。平野校舎においては、昨年度に引き続き全学年で実施し、池田校舎では本年度1年生を初めて実施した。この調査は「知識等を活用して問題解決をする力」をリテラシーとし、「自分を取り巻く環境に実践的に働きかけ対処する力」をコンピテンシーとして、大きく2つの観点から測定している。1～5の5段階で点数化され、生徒にフィードバックされる。

②PROG-H 調査におけるリテラシー指標の学年比較（平野校舎）

図4-1に、平野校舎における1, 2, 3年生の PROG-H 調査 リテラシー指標の比較を示す。PROG-H 調査 リテラシーの各指標は、1年生, 2年生, 3年生の順に高く、1年生と3年生の間では全ての指標で3年生が有意に高いことが示された。

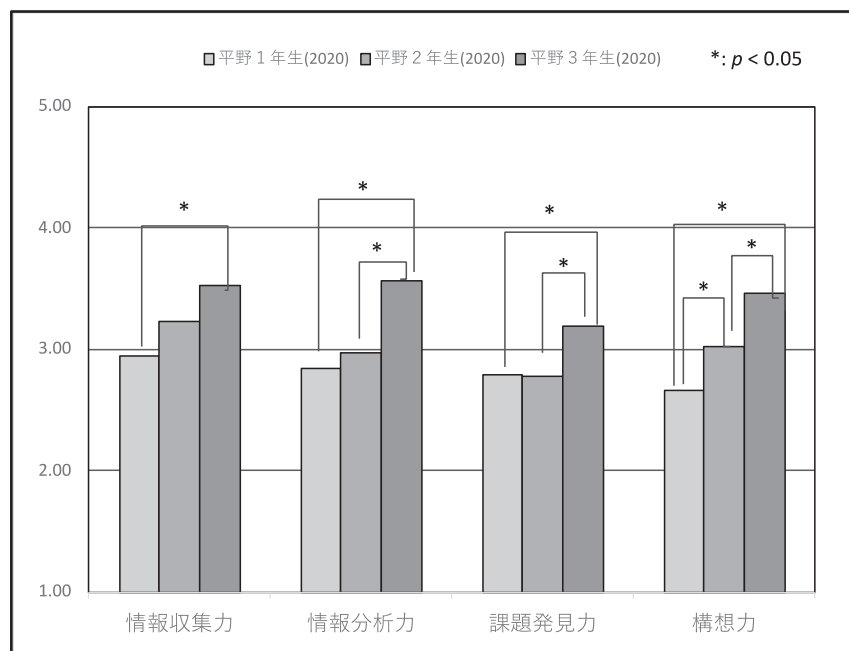


図 4-1 PROG-H 調査 リテラシー指標 学年比較 (平野校舎)

③PROG-H 調査におけるコンピテンシー指標の学年比較 (平野校舎)

図 4-2 に、平野校舎における 1, 2, 3 年生の PROG-H 調査 コンピテンシー指標の比較を示す。PROG-H 調査 コンピテンシーの指標は、3 つの上位項目「対人基礎力」、
「対自己基礎力」、
「対課題基礎力」で構成されている。対人基礎力、対自己基礎力には明らかな差はなかったが、対課題基礎力は 1 年生よりも 2 年生、2 年生よりも 3 年生と高くなっており、1 年生と 3 年生の間に有意な差が見られた (Welch t test, $p < 0.05$)。

図 4-3 に、平野校舎における 1, 2, 3 年生の PROG-H 調査 コンピテンシー指標の下位の項目の学年比較の結果を示す。3 つの上位項目「対人基礎力」、
「対自己基礎力」、
「対課題基礎力」は、それぞれ 3 つの下位項目で構成されている。PROG-H 調査のリテラシー指標では、各項目は 3 年生が最も高くほぼ階段状であったが、コンピテンシー指標は下位項目も対人基礎力、対自己基礎力に関する項目においては、顕著な学年間の差が示されなかった。対課題基礎力のみ、課題発見力と実践力の項目で学年間に有意差があり、3 年生が最も高いという結果であった。

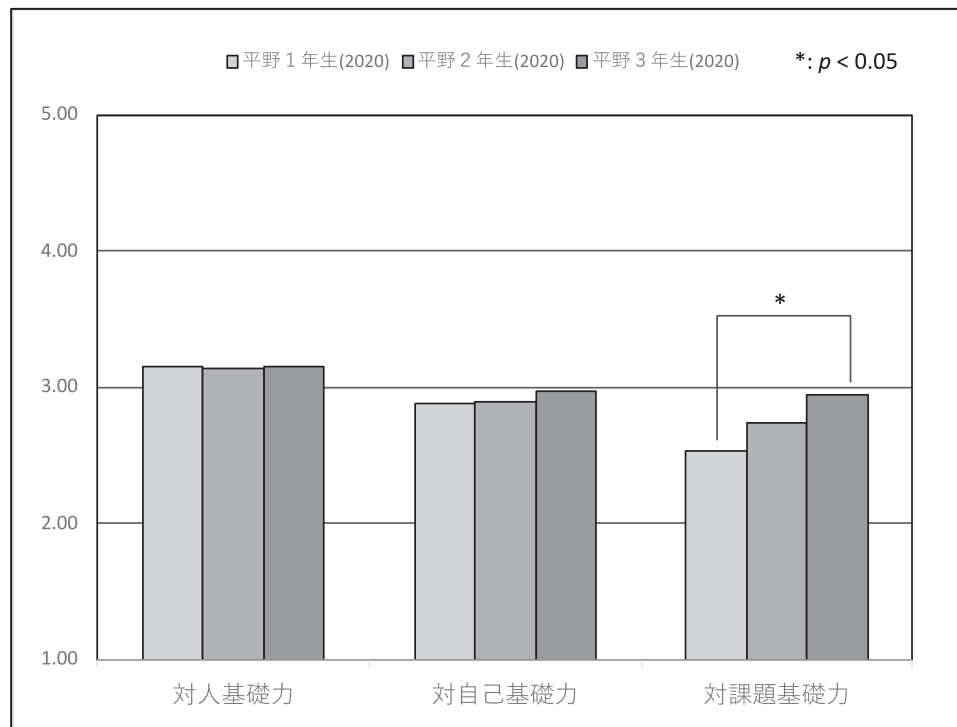


図 4-2 PROG-H 調査 コンピテンシー上位項目 学年比較 (平野校舎)

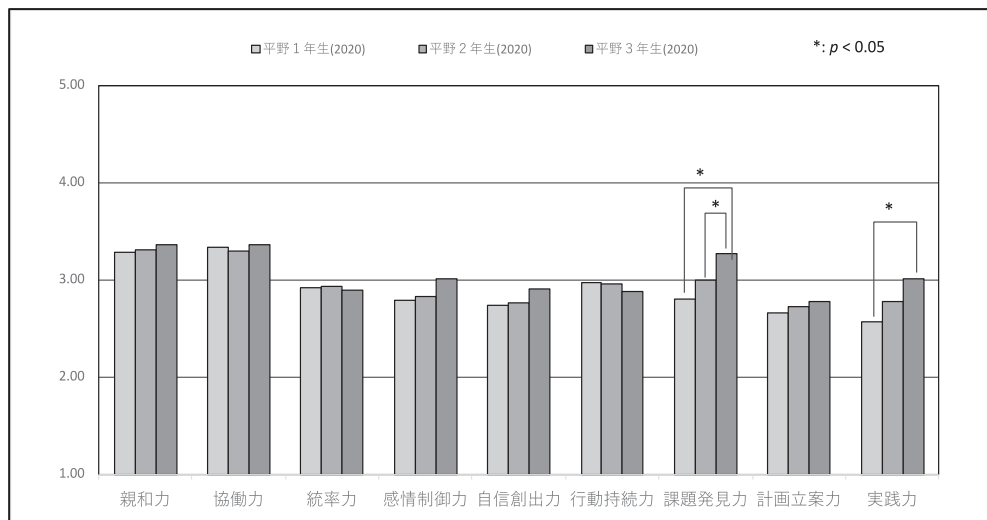


図 4-3 PROG-H 調査 コンピテンシー下位項目 学年比較 (平野校舎)

④イノベティブ人材育成指標と PROG-H 調査の比較 (平野校舎)

図 4-4 に、本事業の 8 つのイノベティブ人材育成指標 (表①) に対し、本年度平野校舎において 1, 2, 3 年生を対象に実施された PROG-H 調査の結果と「イノベティブマインド尺度」と「一般自己効力感尺度」を基に暫定的に対応させた結果を記す。

「イノベティブマインド尺度:a」と「一般自己効力感尺度:f」は、1 年生と 2 年生では、2 年生が低くなり、3 年生で高くなる傾向が見られた。一方、PROG 調査では、概ね学年が上がるにつれて、コンピテンシーの尺度は高くなる傾向を示しており、特徴

に違いが見られた。一方，学年の違いは，PROG 調査のリテラシーの項目の方が学年間の差が顕著であり，「イノベティブマインド尺度」や「一般自己効力感尺度」での，2 年生が低くなる傾向は見いだされない。

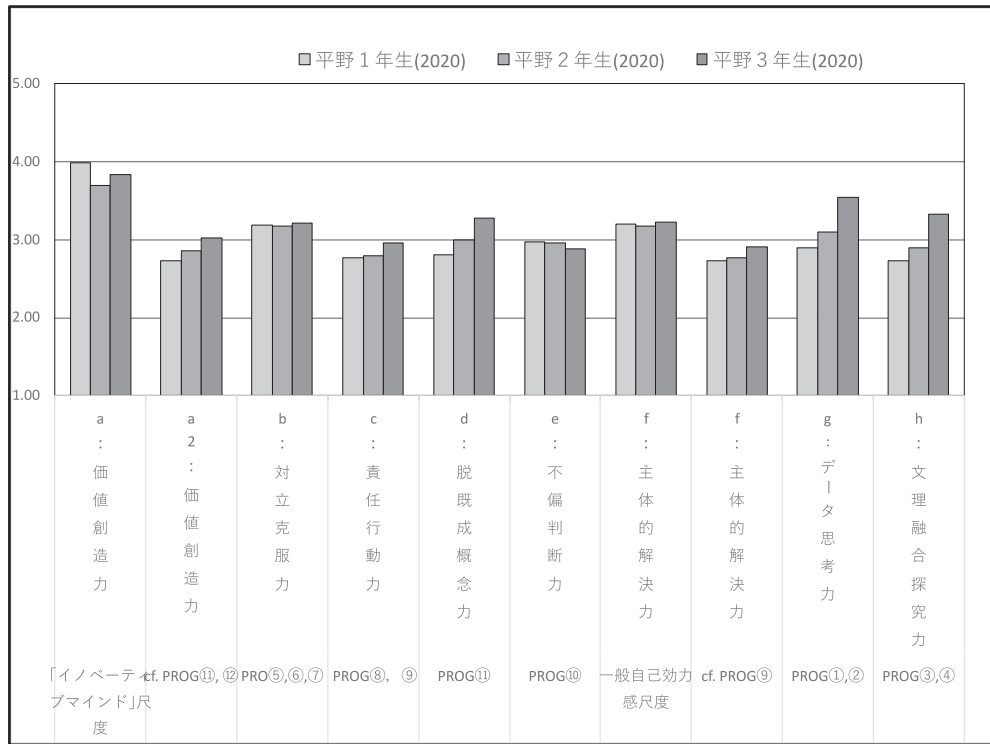


図 4-4 PROG-H 調査 コンピテンシー下位項目 学年比較（平野校舎）

⑤PROG-H 調査におけるリテラシー指標データ（池田校舎）

図 4-5 に，池田校舎 1 年生の PROG-H 調査 リテラシー指標の比較を示す。次年度以降の推移を継続調査していく予定である。

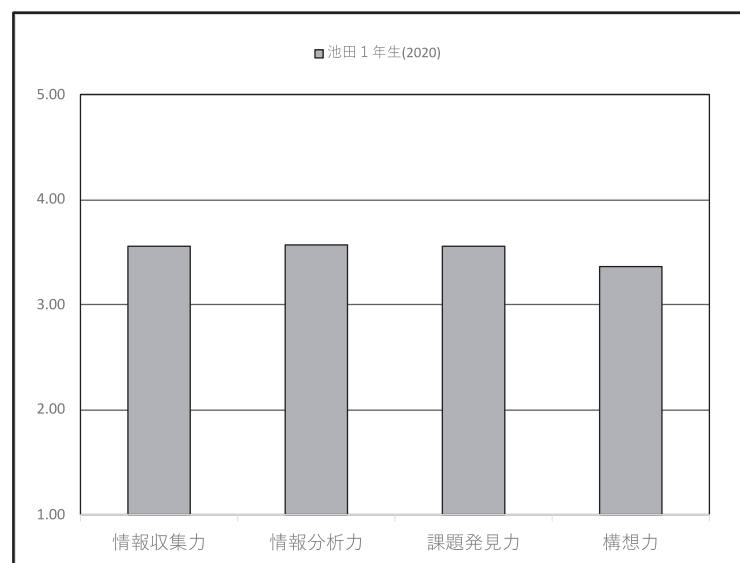


図 4-5 PROG-H 調査 リテラシー指標データ（池田校舎 1 年生）

⑥PROG-H 調査におけるコンピテンシー指標の比較

(池田校舎 1 年生, 平野校舎 1 年生)

図 4-6 に, 池田校舎と平野校舎における 1 年生の PROG-H 調査 コンピテンシー指標の比較を示す。PROG-H 調査の 3 つのコンピテンシーの上位項目「対人基礎力」, 「対自己基礎力」, 「対課題基礎力」では, 統計学的に有意な差は無かった。

図 4-7 に, 池田校舎と平野校舎における 1 年生の PROG-H 調査 コンピテンシー指標の下位の項目を比較した結果を示す。3 つの上位項目「対人基礎力」, 「対自己基礎力」, 「対課題基礎力」は, それぞれ 3 つの下位項目で構成されている。コンピテンシー指標は下位項目も対人基礎力は, 平野校舎の方が比較的高い傾向があり, 協働力の項目は, 有意差が示された。一方, 対自己基礎力に関する項目においては, 池田校舎の方が高い傾向が見られ, 自信創出力の指標に有意差が示された。対課題基礎力は, 実践力の項目で池田校舎 1 年生の方が有意に高かった。

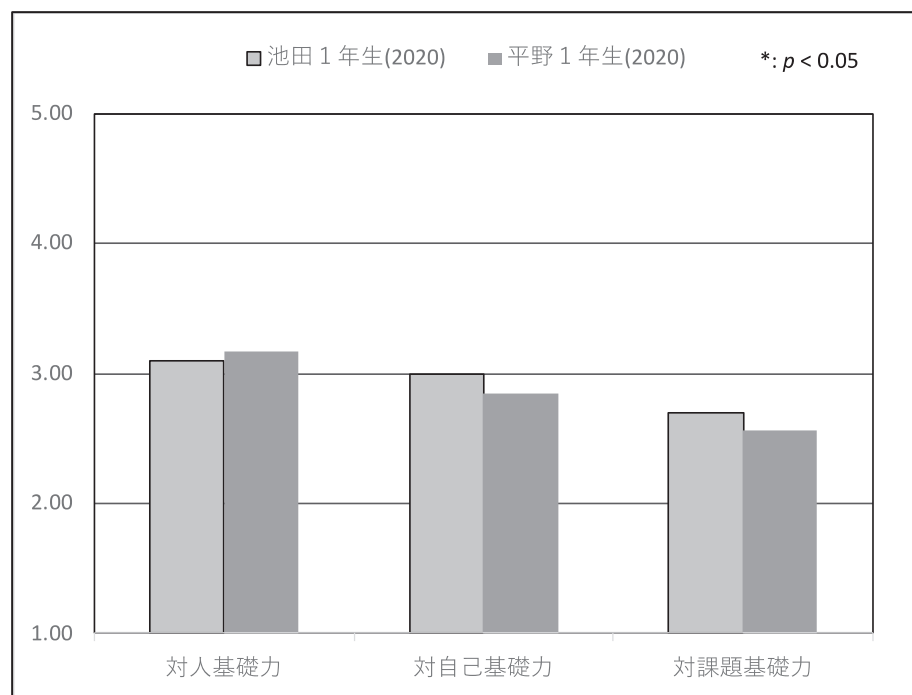


図 4-6 PROG-H 調査 コンピテンシー上位項目比較
(池田校舎 1 年生, 平野校舎 1 年生)

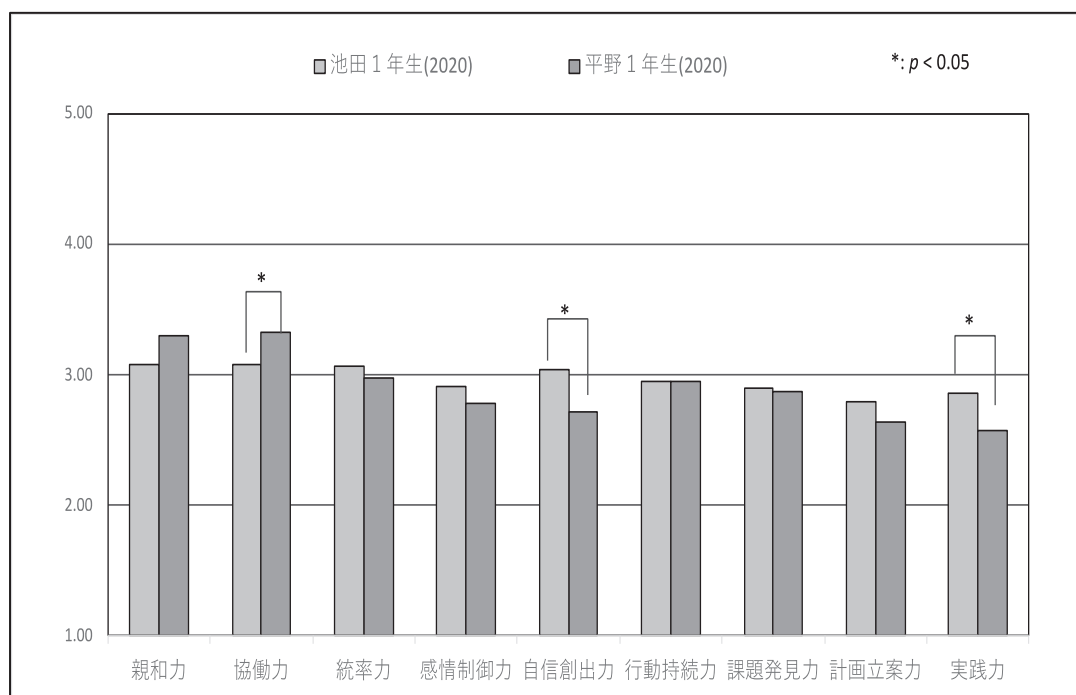


図 4-7 PROG-H 調査 コンピテンシー下位項目比較
(池田校舎 1 年生, 平野校舎 1 年生)

⑦PROG-H 調査におけるコンピテンシー指標の比較

(平野校舎 1, 2, 3 年生, 池田校舎 3 年生)

図 4-8 に, 平野校舎 1, 2, 3 年生の回答結果について, 「一般自己効力感尺度」を横軸に, 「イノベティブマインド尺度」を縦軸にとった散布図を示す。なお, 「一般自己効力感尺度」は「肯定回答: 1」, 「否定回答: 0」として, 肯定的回答の総和が得点となるが, この分析においては「0-1」までのスコアに変換し規格化したデータを用いた。また, 「イノベティブマインド尺度」も「4 件法」の回答「1-4」の点数とし, 総和を得点として, さらに「0-1」までのスコアに変換し規格化したデータを用いた。

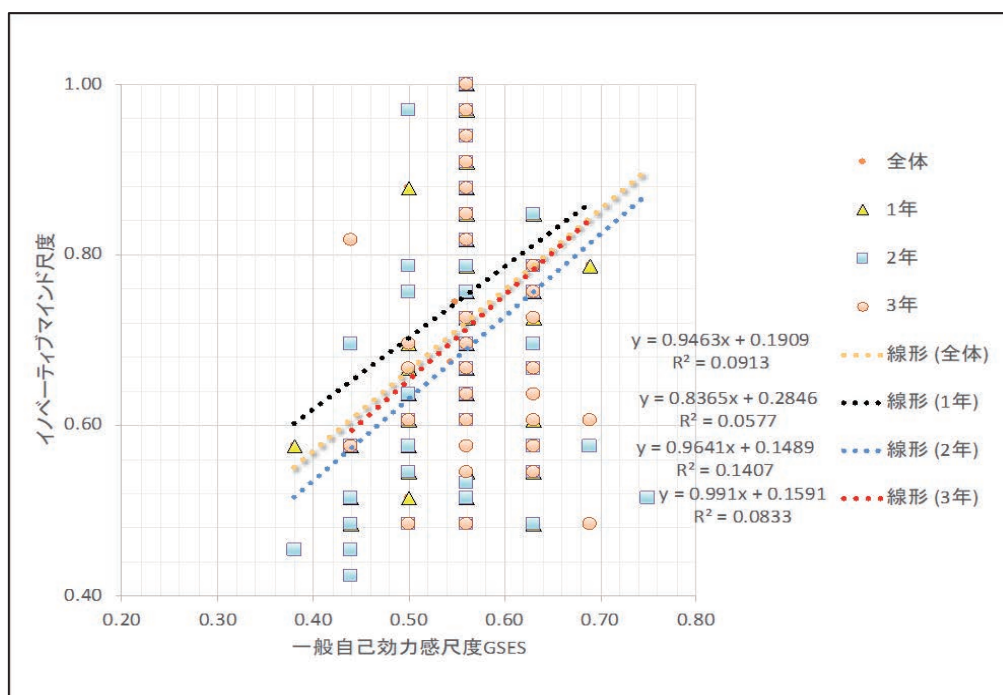


図 4-8 「一般自己効力感尺度」・「イノベティブマインド尺度」
(平野校舎 1, 2, 3 年生)

学年ごとに、「一般自己効力感尺度」を説明関数、「イノベティブマインド尺度」を被説明関数として線形回帰分析を行った。それぞれの学年の傾きは 0.84 (1 年生), 0.96 (2 年生), 0.99 (3 年生) であり, 定性的には両変数は正の相関を示した。また, 2 年生の回帰直線の y 切片が一番小さく, 2 年生, 3 年生, 1 年生の順番で, ほぼ並行に並んでいる。このことから生徒の「イノベティブマインド」に関する認識は, 全体的に 2 年生で一旦低下し, 3 年生で向上する傾向が示唆される。すなわち, 自己効力感とイノベティブマインドは正の相関を持つものの, 自己効力感とは独立した要因によって変動している可能性がある。今後, イノベティブマインドの下位尺度を詳細に分析する必要がある。

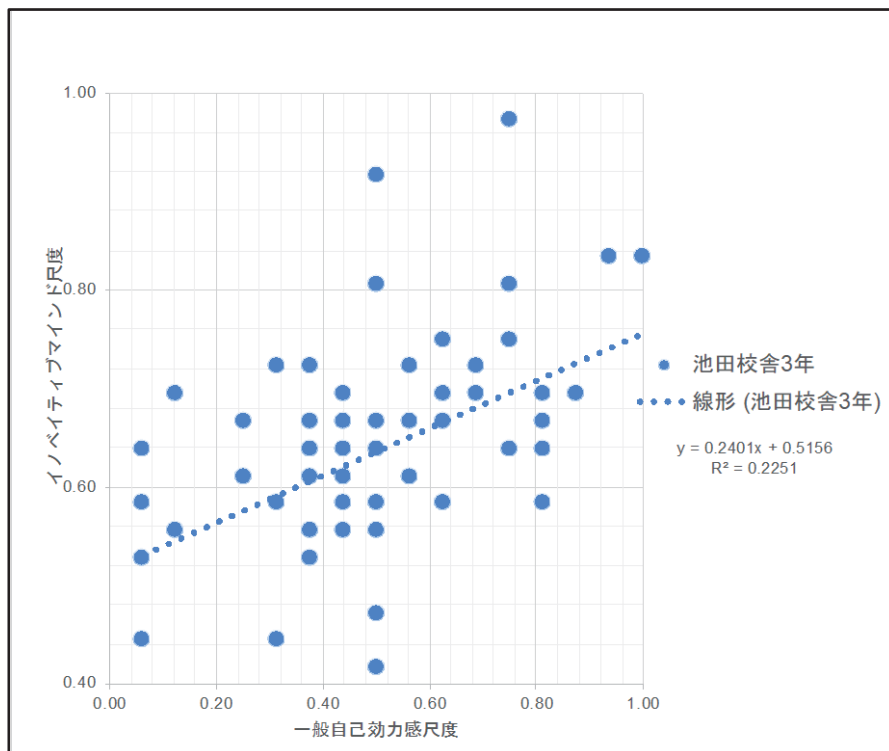


図 4-9 「一般自己効力感尺度」・「イノベティブマインド尺度」
(池田校舎 3 年生)

図 4-9 に、池田校舎 3 年生の回答結果について、「一般自己効力感尺度」を横軸に、「イノベティブマインド尺度」を縦軸にとった散布図を示す。なお、「一般自己効力感尺度」、「イノベティブマインド尺度」、さらに「0-1」までのスコアに変換し規格化したデータを用いた。「一般自己効力感尺度」を説明関数、「イノベティブマインド尺度」を被説明関数として線形回帰分析を行った。回帰直線の傾きは、0.24(3 年生)であり、平野校舎の結果と同様に、定性的には両変数は正の相関を示した。ただし、平野校舎の回帰直線の傾きは 0.84 (1 年生)、0.96(2 年生)、0.99(3 年生)であり、それらに比べると、比較的緩やかであった。この背景には、平野校舎の「一般自己効力感尺度」の分布が 0.4-0.7 までの間であったのに対し、池田校舎の「一般自己効力感尺度」の分布が 0-1.0 までの間に広がっており、大きく散らばっていることが要因になっている。この差異については、生徒自身の認識の違いの可能性と、調査方式の違いの影響の可能性も考えられる。平野校舎の調査はマークシートによる回答方式であり、池田校舎の調査は Google Form によるオンライン調査であった。

(5) まとめ

アセスメントグループでは、先行事業である SGH 事業において継続的に調査してきた「PROG-H」調査のジェネリックスキル調査項目を用いることで、調査分析の継続性を担保しつつ、本事業の「イノベーティブ人材育成の目標指標」の効果測定の実現を本年度検討してきた。

「PROG-H」調査のジェネリックスキル調査項目において取り扱われている「リテラシー」項目や「コンピテンシー」項目は元来 OECD の人材育成イメージと共通しており、一定適用できることが示唆された。

しかしながら、本事業の「人材育成の目標」に掲げられている「イノベーティブな人材」については、先行研究で提供されている「イノベイティブマインド」尺度の学年比較の結果から、「PROG-H」調査のジェネリックスキル調査の学年比較の結果とは異なる傾向が示された。これらの知見にもとづいて、次年度は本事業の「イノベーティブ人材育成の目標指標」の効果的なアセスメント方法の確立とカリキュラム開発の支援を進めていく。

5 広報活動

本事業では、イノベティブなグローバル人材の育成のために、国内外の高等学校、大学、企業等が協働する新たな学びのシステムとしてALネットワークを形成し、教育資源や研究成果の共有を目指している。ALネットワークを拡充するには、事業内容を広く発信する必要がある。そこで、広報活動の一環として、拠点校及び共同実施校の活動を紹介したパンフレット（写真①）を作成した。また、管理機関である大阪教育大学の公式サイトトップページに専用のバナー（写真②）を設置し、WWL関連の情報を集約したホームページを立ち上げた（写真③）。

・パンフレット



写真① パンフレット（全8ページ）

・ホームページ



写真② WWL 専用バナー



写真③ WWL ホームページ

Ⅲ. 会議報告

1 AL（アドバンスト・ラーニング）ネットワーク運営会議

（1）第1回

①日程：令和2年10月2日（金）14：00～

②方法：Zoomによるオンライン会議

③議題：

- 1）事業概要について
- 2）現状報告について
- 3）今後の連携について
- 4）その他

④概要：

- ・議長（栗林澄夫学長）挨拶の後、委員の自己紹介を行った。
- ・議題に沿って、担当者から画面共有にて事業概要及び現状を報告した。
- ・今後の連携に関する課題として、プラットフォームへの登録を依頼した。
- ・委員から事業に関する質問を受け応答した。

⑤資料：資料編参照

- 1）大阪教育大学アドバンスト・ラーニング・ネットワーク運営会議設置要項
- 2）委員名簿

（2）第2回（予定）

①日程：令和3年3月26日（金）10：00～

②方法：Zoomによるオンライン会議

③議題：

- 1）令和2年度の活動報告及び令和3年度の活動計画
- 2）連携校からの報告
- 3）意見交換
- 4）その他

2 運営指導委員会

（1）第1回

①日程：令和2年10月27日（火）14：00～

②方法：Zoomによるオンライン会議

③議題：

- 1）事業概要について
- 2）現状報告と今後の課題
- 3）その他

④概要

- ・議長（和田良彦副学長）挨拶の後、委員の自己紹介を行った。

- ・議題に沿って、担当者から画面共有にて事業概要及び現状を報告した。
- ・委員から事業に関する質問を受け応答した。

⑤委員：

和田 良彦	大阪教育大学副学長（委員長）
恩知 忠司	前大阪府立北野高等学校校長
城戸 楓	東京大学大学院情報学環特任助教
田中 博	立命館大学大学院教職研究科准教授
平岡 香子	大阪府教育庁教育振興室高等学校課参事
藤岡 ゆか	藤岡金属株式会社代表取締役社長
米川 英樹	宝塚大学学長

（２）第２回

①日程：令和３年３月８日（月）１３：３０～

②方法：Zoom によるオンライン会議

③議題：

- 令和２年度における事業の取組について
 - ・拠点校・共同実施校における取組
 - ・附属学校間ネットワーク
 - ・管理機関における取組
 - ・アセスメントグループの取組
 - ・広報活動
 - ・その他（２月２５日 文部科学省とのオンライン意見交換会報告）
- 令和２年度における事業の取組に関する質疑応答
- 令和３年度における事業の取組について
- 事業内容に対する意見交換および指導
- その他

④概要：

- ・拠点校、共同実施校からの取り組み内容に関する報告及び附属学校間ネットワーク活動の報告の後、質疑応答を実施した。

（質問）オンラインのメリットをどのように生かしたか。

（回答）定期的な交流の場の設定が可能となるほか、海外研修でも行けない場所の映像を提供してもらい海外研修の幅を広げることができる。

（質問）未来のSDGsの課題等どのようなテーマを取り上げているか。

（回答）多面的なものの見方ができるよう生徒自身で幅広く情報収集し現実の实在像に迫るよう指導している。

（質問）探究的な学びを指導する教員育成の場は今後も計画するか。

（回答）附属高校を中心としたネットワークの中で、教員の指導力を高め外部へ発信していく。

- ・管理機関の取組、アセスメントグループの取組、広報活動、その他に関する報告の後、質疑応答を実施した。

（質問）生徒自身が成長を実感する場を設定したか。

（回答）発表の場を複数回設定し、刺激となるよう他学年から評価を受ける機会をもった。

（質問）事業成果を証明できるメソッドを考えているか。

（回答）アセスメントグループが評価指標を作成し、分析・検証を行っている。

- ・令和3年度事業について報告の後、事業内容について指導を受けた。

- 事業取組の中で身についた資質能力が普段の授業に表れ、教員の授業改善に繋がり、また生徒に骨太の学力がつくことを期待する。
- 効果検証では事業が教育効果を発揮していると考えられ、引続き事業実施、効果検証を行っていただきたい。
- 生徒個人の伸びしろとして時系列的な成長を確認できること（タテの深さ）、学習集団全体の力が向上すること（ヨコの広がり）の両方を目指してほしい。
- オンラインの可能性を積極的に評価し、対面による活動と一体化させた事業の展開を期待する。
- 期間を限定して You Tube に動画をアップするなど、事業の成果を広く公開する方法を検討してほしい。

3 事業検証委員会（予定）

①日程：令和3年3月19日（金）13：30～

②方法：Zoomによるオンライン会議

③議題：

- 1）事業概要について
- 2）アセスメントグループ報告
- 3）質疑応答及び意見交換
- 4）その他

④委員：

稲垣 卓 一般財団法人大学教育質保証・評価センター監事（委員長）

植木 信博 大阪府教育センターカリキュラム開発部長

時任 隼平 関西学院大学高等教育推進センター准教授

4 GIER（グローバル・イノベーション・エデュケーション・リサーチ）委員会

（1）第1回

①日程：令和2年8月5日（水）10：00～

②方法：Teams によるオンライン会議

③議題：

- 1）事業の概要について
- 2）事業における役割について
- 3）令和2年度の事業計画について
- 4）その他

④資料：

- 1）規約
- 2）委員名簿

（2）第2回

①日程：令和2年9月16日（水）14：00～

②方法：Teams によるオンライン会議

③議題：

- 1）進捗状況と課題の確認
- 2）その他

（3）第3回

①日程：令和2年11月9日（月）10：00～

②方法：Teams によるオンライン会議

③議題：

- 1）進捗状況と課題の確認
- 2）その他

【報告事項】

- 1）アドバンスト・ラーニング・ネットワーク運営会議
- 2）令和2年度連絡協議会
- 3）その他

（4）第4回

①日程：令和2年12月22日（月）10：30～

②方法：Teams によるオンライン会議

③議題：

- 1）進捗状況と課題の確認
- 2）事業報告書（分担）について
- 3）その他

【報告事項】

- 1) 事業完了報告書等（文部科学省提出）について
- 2) 広報関係について
- 3) 国際会議準備ワーキングについて
- 4) その他

(5) 第5回

①日程：令和3年2月17日（水）14：30～

②方法：Teams によるオンライン会議

③議題：

- 1) 進捗状況と課題の確認
- 2) その他

【報告事項】

- 1) 令和3年度事業実施計画書について
- 2) その他

資料編

大阪教育大学アドバンスト・ラーニング・ネットワーク運営会議設置要項

(設置)

- 1 大阪教育大学が文部科学省から受託した「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業（以下「WWL事業」という。）」に関する事業の円滑な実施に資するため、アドバンスト・ラーニング・ネットワーク運営会議（以下「運営会議」という。）を設置する。

(目的)

- 2 運営会議は、イノベーティブなグローバル人材を育成するというWWL事業の趣旨に基づき、国内外の機関と協働し、高校生に対する高度な学びを提供する仕組み「アドバンスト・ラーニング・ネットワーク」の形成を目的とする。

(任務)

- 3 運営会議は、次の各号に掲げる事項を審議するとともにその推進に当たる。
 - (1) WWL事業計画の推進に関する事項
 - (2) アドバンスト・ラーニング・ネットワークの形成に関する事項
 - (3) アドバンスト・ラーニング・ネットワークの活用及び普及に関する事項
 - (4) その他運営に必要な事項

(組織)

- 4 運営会議は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学長
- (2) 副学長 3人
- (3) 学長補佐 1人
- (4) 事務局長
- (5) 附属高等学校平野校舎主任
- (6) 附属高等学校平野校舎副校長
- (7) 附属高等学校池田校舎副校長
- (8) 学長が指名する職員 若干人
- (9) WWL事業の学外協働機関関係者

- 5 前項第8号及び第9号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(議長及び副議長)

- 6 運営会議に議長及び副議長を置く。
- 7 議長は、第4項第1号の委員をもって充て、副議長は、第4項第2号の委員から議長が指名する。
- 8 副議長は、議長を補佐し、議長に事故等があるときは、その職務を代行する。

(運営会議)

- 9 運営会議は、必要に応じて議長が招集する。

(運営会議以外の者の出席)

- 10 運営会議は、必要と認めた者の出席を求め、意見を聴取することができる。

(委員会)

- 11 運営会議は、必要に応じて、委員会を置くことができる。

- 12 前項の委員会に関して、必要な事項は、別に定める。
(事務)
- 13 運営会議に関する事務は、関係各課の協力を得て、学術部附属学校課において処理する。
(改廃)
- 14 この要項の改廃は、運営会議において行う。
(雑則)
- 15 この要項に定めるもののほか、必要な事項は別に定める。

附 則

この要項は、令和2年6月1日から施行する。

大阪教育大学グローバル・イノベーション・エデュケーション・リサーチ委員会設置要項

(設置)

- 1 大阪教育大学アドバンスド・ラーニング・ネットワーク運営会議設置要項第11項の規定に基づき、グローバル・イノベーション・エデュケーション・リサーチ委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(目的)

- 2 委員会は、イノベティブなグローバル人材を育成するための教育研究を行い、また、事業の円滑な実施に資することを目的とする。

(任務)

- 3 委員会は、次の各号に掲げる事項について処理する。

- (1) WWL事業の企画・運営に関する事項
- (2) WWL事業の計画に関する事項
- (3) WWL事業の学内体制に関する事項
- (4) その他WWL事業に関する事項

(組織)

- 4 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学長補佐 1人
- (2) グローバルセンター長
- (3) 教育イノベーションデザインセンター長
- (4) 附属高等学校平野校舎主任
- (5) 附属高等学校平野校舎副校長
- (6) 附属高等学校池田校舎副校長
- (7) その他委員長が指名する職員 若干人

- 5 前項第7号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(委員長及び副委員長)

- 6 委員会に委員長及び副委員長を置く。
- 7 委員長は、第4項第1号の委員をもって充て、副委員長は、委員の互選とする。
- 8 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故等があるときはその職務を代行する。

(委員会)

- 9 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

(委員以外の者の出席)

- 10 委員会は、必要と認めた者の出席を求め、意見を聴取することができる。

(専門部会)

- 11 委員会は、必要に応じて専門部会を置くことができる。

(事務)

- 12 委員会に関する事務は、関係各課の協力を得て、学術部附属学校課において処理する。

(改廃)

- 13 この要項の改廃は、委員会において行う。

(雑則)

14 この要項に定めるもののほか，必要な事項は別に定める。

附 則

この要項は，令和２年６月１日から施行する。

アドバンスト・ラーニング・ネットワーク運営会議委員名簿

適用	所属・役職等	氏名
1号委員 「委員長」	大阪教育大学 学長	栗林 澄夫
2号委員	大阪教育大学 副学長	広谷 博史
2号委員	大阪教育大学 副学長	片桐 昌直
2号委員	大阪教育大学 副学長	赤木 登代
3号委員	大阪教育大学 学長補佐	鈴木 真由子
4号委員	大阪教育大学 事務局長	新津 勝二
5号委員	大阪教育大学附属高等学校 平野校舎主任	佐藤 賢司
6号委員	大阪教育大学附属高等学校 平野校舎副校長	堀川 理介
7号委員	大阪教育大学附属高等学校 池田校舎副校長	筒井 和幸
8号委員	大阪教育大学 副学長	森田 英嗣
	大阪教育大学教授	田村 知子
	大阪教育大学准教授	八田 幸恵
	大阪教育大学教授	赤松 喜久
	大阪教育大学教授	町頭 義朗
	大阪教育大学（海外交流アドバイザー）	Okubo Sarah Kai
9号委員	大阪大学 副学長	進藤 修一
	大阪府立大学 副学長	高橋 哲也
	公益社団法人日本WHO協会理事長	中村 安秀
	独立行政法人国際協力機構関西センター 市民参加協力課長	田中 宏幸
	関西サイエンス・フォーラム 副会長・専務理事	萩尾 千里
	国立研究開発法人産業技術総合研究所 関西センター所長	角口 勝彦
	株式会社新興出版社啓林館代表取締役社長	佐藤 諭史
	株式会社ベネッセコーポレーション 商品企画開発本部長	服部 奈美子
	西日本電信電話株式会社ビジネス営業本部 クラウドソリューション部 ビジネスイノベーション営業担当 担当部長	加藤 公隆
	神戸大学附属中等教育学校 校長	井上 真理
	奈良女子大学附属中等教育学校 校長	内田 忠賢
	京都教育大学附属高等学校 校長	谷口 和成
	大阪府立千里高等学校 校長	天野 誠
	大阪府立住吉高等学校 校長	岡崎 守夫
	大阪府立泉北高等学校 校長	西田 恵二
	大阪市立水都国際中学校・高等学校 教頭	美鳥 佳介
	金光学園高等学校 校長	金光 道晴
	沖縄県立那覇国際高等学校 校長	仲宗根 勝
	和歌山県立星林高等学校 校長	岩崎 博

大阪教育大学グローバル・イノベーション・エデュケーション・リサーチ委員会委員名簿

令和2年6月1日現在

適用	役職等	氏名	備考
1号委員 「委員長」	学長補佐（附属学校連携担当）	鈴木 真由子	
2号委員	グローバルセンター長	箱崎 雄子	
3号委員	教育イノベーションデザインセンター長	鈴木 剛	
4号委員	附属高等学校平野校舎主任	佐藤 賢司	
5号委員	附属高等学校平野校舎副校長	堀川 理介	
6号委員	附属高等学校池田校舎副校長	筒井 和幸	
7号委員	委員長が指名する職員	仲矢 史雄	
7号委員	委員長が指名する職員	田村 知子	
7号委員	委員長が指名する職員	八田 幸恵	
7号委員	委員長が指名する職員	尾崎 拓郎	
7号委員	委員長が指名する職員	田中 満公子	
7号委員	委員長が指名する職員	太田 順康	
7号委員	委員長が指名する職員	ト田 隆嗣	
7号委員	委員長が指名する職員	成實 朋子	
7号委員	委員長が指名する職員	橋本 健一	

令和2年度 WWLコンソーシアム構築支援事業
事業報告書・第1年次

令和3年3月発行

発行者 国立大学法人大阪教育大学
大阪教育大学附属高等学校平野校舎
大阪教育大学附属高等学校池田校舎

